仙台市文化財調査報告書第296集

宮城県仙台市

郡山遺跡 26

郡山遺跡・仙台平野の遺跡群
平成17年度発掘調査概報

2006. 3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第296集

宮城県仙台市

郡山遺跡 26

郡山遺跡・仙台平野の遺跡群
平成17年度発掘調査概報

2006. 3

仙台市教育委員会

郡山遺跡第166次調査　SD2120溝跡　一方四町Ⅱ期官衙外溝一　確認状況（南から）

郡山遺跡第166次調査　SD2120溝跡　一方四町Ⅱ期官衙外溝一　完堀状況（北から）

郡山遺跡第171次調査　SA2055材木列掘り方　―Ⅰ期官衙―　完掘状況（南西から）

陸奥国分寺跡　南大門跡　調査区全景（北から）

序　　文

昭和55年の国庫補助事業による確認調査の開始以来25年間にわたって調査を継続してきましたが、その間に官衙の状況が次第に明らかになってきました。Ⅱ期官衙は多賀城創建以前の陸奥国府であると考えられ、その重要性が広く認識されるところとなっています。

本年度は第５次５ヶ年計画終了後の補足調査として小規模な調査を実施しております。方四町Ⅱ期官衙の東側で実施した第166次調査では、官衙の東側では初めて外溝が発見されました。このことと、あすと長町に関わる区画整理事業に伴った調査によって同じ外溝の北西コーナーが確認されたことから、外溝が官衙の四方を囲んでいたことが明らかとなりました。方四町Ⅱ期官衙が材木列と大溝によって区画され、その外側に外溝が巡る構造であったことが明確となりました。このようなあり方は平城京が造られる前の都であった「藤原京」の中心部である藤原宮に類似しています。Ⅱ期官衙のうち方四町Ⅱ期官衙は当時の宮である藤原宮と造り方の上で密接な関係があったと考えられるようになりました。

本書はこの郡山遺跡範囲確認調査の他に、個人住宅建設に対応した調査及び仙台平野の遺跡の中で重要な陸奥国分尼寺跡、陸奥国分寺跡などの調査(「仙台平野の遺跡群」対応)について発掘調査成果の概要をまとめたものです。

郡山遺跡については、特に重要な遺跡の中枢部について、部分的ではありますが、国史跡指定の準備も進めています。国史跡として指定されれば、歴史公園として街づくりも大きく前進すると考えておりますので、今後とも皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年３月

仙台市教育委員会
教育長　奥山　恵美子

例　　言

1．本書は国庫補助事業による郡山遺跡および仙台平野の遺跡群に係わる平成17年度範囲確認調査の概報である。
　なお、報文中第165次調査については調査日程の関係で平成16年度に実施し、年度概報に詳細報告を掲載できなかった内容である。

2．本概報は調査速報を目的とし、作成に当たっては次のとおり分担した。編集は平間亮輔が行った。

第１章　郡山遺跡

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅸ　―　平間亮輔

Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ　―　今野秀治

第２章　陸奥国分尼寺跡ほか

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　―　平間亮輔

Ⅳ　―　工藤哲司

第３章　総括　―　平間亮輔

3．本調査に係わる出土遺物、実測図、写真などの遺物は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．郡山遺跡の平面図に示した座標系は、任意に設定した原点（X＝０、Y＝０）を通る磁北線（６°44′７″W）を基準にしている。
　陸奥国分尼寺跡の平面図に示した座標系は、国家座標（平面直角座標系Ⅹ）である。

2．文中および図中の方位は真北を基準としている。

3．遺構の略称は次のとおりで、郡山遺跡の遺構番号は全体の通しNo.、その他は各調査次数における通しNo.である。

ＳＡ：柱列などの塀跡　ＳＢ：建物跡　ＳＤ：溝跡
ＳＥ：井戸跡　ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＫ：土坑
ＳＸ：その他の遺構　Ｐ：ピット、小柱穴

4．遺物の略号は次のとおりで、郡山遺跡の登録番号は全体の通しNo.、その他は各調査次数における通しNo.である。

Ａ：縄文土器　Ｂ：弥生土器　Ｃ：土師器（非ロクロ調整）　Ｄ：土師器（ロクロ調整）
Ｅ：須恵器　Ｆ：丸瓦・軒丸瓦　Ｇ：平瓦・軒平瓦　Ｈ：その他の瓦
Ｉａ：土師質土器　Ｉｂ：瓦質土器　Ｉｃ：陶器　Ｊ：磁器
Ｋ：石製品　Ｌ：木製品　Ｎａ：鉄製品　Ｎｂ：非鉄金属製品
Ｐ：土製品

5．土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原1997）を使用した。

6．遺物実測図の網点は黒色処理を示している。

7．表中の（　）が付いた数字は図上復元した推定値である。

目　　次

第１章　はじめに
Ⅰ．郡山遺跡の調査体制……1
Ⅱ．郡山遺跡・仙台平野の遺跡群の調査計画と実績……2
１．調査計画……2　２．調査実績……2
第２章　郡山遺跡
Ⅰ．第165次発掘調査……4
１．調査経過……4　２．調査方法と基本層序……4
３．遺構と遺物……5　４．まとめ……8
Ⅱ．第166次発掘調査……11
１．調査経過……11　２．調査方法と基本層序……12
３．遺構と遺物……12　４．まとめ……19
Ⅲ．第168次発掘調査……29
１．調査経過……29　２．調査方法と基本層序……29
３．遺構と遺物……30　４．まとめ……30
Ⅳ．第169次発掘調査……33
Ⅴ．第170次発掘調査……34
１．調査経過……34　２．調査方法と基本層序……35
３．遺構と遺物……36　４．まとめ……36
Ⅵ．第171次発掘調査……38
１．調査経過……38　２．調査方法と基本層序……38
３．遺構と遺物……41　４．まとめ……42
第３章　陸奥国分尼寺跡ほか
Ⅰ．陸奥国分尼寺跡第11次調査……48
１．調査経過……48　２．調査方法と基本層序……50
３．遺構と遺物……51　４．まとめ……57
Ⅱ．陸奥国分尼寺跡南西部範囲確認調査……66
Ⅲ．陸奥国分寺跡南大門跡、薬師堂仁王門の調査……67
１．調査経過……67　２．調査方法と基本層序……67
３．遺構と遺物……67　４．まとめ……73
Ⅳ．南小泉遺跡……89
第４章　総括……90

挿図目次

第１図　郡山遺跡全体図……3
第２図　第165次調査区位置図……4
第３図　第165次調査区全体図……5
第４図　SI2178平面・断面図、SK2179断面図……6
第５図　SI2178出土遺物……7
第６図　第166次調査区位置図……11
第７図　第11次・166次調査区全体図……12
第８図　SD76・78平面・断面図……13
第９図　SX2178平面・断面図……14
第10図　SX2181出土遺物(1)……16

第11図　SX2181出土遺物(2)…… 17
第12図　SX2181出土遺物(3)…… 18
第13図　SD2120平面・断面図…… 20
第14図　SD2120出土遺物…… 21
第15図　第168次調査区位置図…… 29
第16図　第168次調査平面・断面図…… 31
第17図　第169次調査区位置図…… 33
第18図　第170次調査区位置図…… 34
第19図　第170次調査区設定図…… 34
第20図　第170次調査平面・断面図…… 35
第21図　第171次調査区位置図…… 38
第22図　調査区断面図……39
第23図　第171次調査平面・断面図…… 40
第24図　第152次・171次調査区全体図……42
第25図　陸奥国分寺跡、国分尼寺跡位置図……48
第26図　陸奥国分尼寺跡全体図……49
第27図　陸奥国分尼寺跡第11次調査
　　平面・断面図……50
第28図　SB１～６、SA１平面図…… 52
第29図　SK１～８、SX１断面図…… 54
第30図　第11次調査出土遺物(1)……56
第31図　第11次調査出土遺物(2)……57
第32図　第11次調査出土遺物(3)……58
第33図　第11次調査出土遺物(4)……59
第34図　寺域西部地区出土遺物……66
第35図　陸奥国分寺跡全体図（１／2000）……68
第36図　仁王門、南大門跡位置図（１／500）…… 69
第37図　調査区平面図……70
第38図　仁王門礎石エレベーション図……71
第39図　調査区断面図……72
第40図　南大門跡出土遺物(1)……74
第41図　南大門跡出土遺物(2)……75
第42図　仁王門跡出土遺物(1)……76
第43図　仁王門跡出土遺物(2)……77
第44図　南小泉遺跡調査地点位置図……89
第45図　外郭の計測地点……91
第46図　外郭材木列から外溝までの構造模式図……93

挿表目次

表１　17年度郡山遺跡ほか発掘調査計画…… 2
表２　17年度発掘調査実績…… 2
表３　第165次調査遺物集計表…… 8
表４　第166次調査遺物集計表…… 19
表５　第171次調査遺物集計表…… 43
表６　陸奥国分尼寺跡第11次調査遺物集計表……57
表７　仁王門礎石一覧……71
表８　陸奥国分寺跡調査遺物集計表……76
表９　外郭材木列の座標値（ｍ）……91
表10　外郭大溝の座標値（ｍ）……91
表11　外溝の座標値（ｍ）……91
表12　外郭材木列の間隔（ｍ）……92
表13　外郭大溝の間隔（ｍ）……92
表14　外溝の間隔（ｍ）……92

写真図版目次

写真図版１　第165次調査区全景、竪穴住居跡…… 9
写真図版２　SI2178出土遺物……10
写真図版３　第166次調査区西部全景、溝跡…… 22
写真図版４　第166次調査区東部全景、溝跡他…… 23
写真図版５　溝跡……24
写真図版６　SD2120溝跡出土遺物…… 25
写真図版７　SX2181出土遺物(1)…… 26
写真図版８　SX2181出土遺物(2)…… 27
写真図版９　SX2181出土遺物(3)…… 28
写真図版10　第168次調査区全景、断面…… 32
写真図版11　第170次調査区全景、断面…… 37
写真図版12　材木列跡(1)……44
写真図版13　材木列跡(2)……45
写真図版14　材木列跡(3)……46
写真図版15　一本柱列跡、溝跡他……47
写真図版16　陸奥国分尼寺跡
　　第11次調査区全景　土坑……60
写真図版17　拡張区全景……61
写真図版18　第11次調査出土遺物(1)……62
写真図版19　第11次調査出土遺物(2)……63
写真図版20　第11次調査出土遺物(3)……64
写真図版21　第11次調査出土遺物(4)……65
写真図版22　寺域南西部地区出土遺物……66
写真図版23　仁王門全景、礎石全景……78
写真図版24　仁王門礎石(1)……79
写真図版25　仁王門礎石(2)……80
写真図版26　南大門跡調査区全景、根石……81
写真図版27　南大門跡調査区……82
写真図版28　南大門跡調査区断面(1)……83
写真図版29　南大門跡調査区断面(2)……84
写真図版30　出土遺物(1)……85
写真図版31　出土遺物(2)……86
写真図版32　出土遺物(3)……87
写真図版33　出土遺物(4)……88
写真図版34　南小泉遺跡調査区……89

第１章　はじめに

Ⅰ．郡山遺跡の調査体制

郡山遺跡の第５次５ヶ年計画は昨年度で終了し、平成17年度は範囲確認調査の補足調査第１年目にあたる。調査体制は下記のとおりである。

調査主体　　仙台市教育委員会
調査担当　　文化財課　課　　長　阿部　　功
　　整備活用係長　吉岡　恭平
　　主　　査　長谷川隆二
　　主　　任　長島　榮一
　　主　　任　平間　亮輔
　　主　　事　安田　　仁

実際の発掘調査にあたっての担当職員は以下のとおりである。
第166次調査　　整備活用係　主　　任　平間亮輔
第168次調査　　調査係　　文化財教諭　今野秀治
第169～171次調査　整備活用係　主　　任　平間亮輔、調査係　文化財教諭　今野秀治

発掘調査、整理作業を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、指導・助言を受けた。
委 員 長　工藤　雅樹（東北歴史博物館館長　考古学）
副委員長　今泉　隆雄（東北大学大学院文学研究科教授　古代史）
　　岡田　茂弘（前東北歴史博物館館長　考古学）
　　進藤　秋輝（宮城県考古学会会長　考古学）
　　桑原　滋郎（前宮城県考古学会会長　考古学）
　　須藤　　隆（東北大学文学部教授　考古学）
　　宮本長二郎（東北芸術工科大学芸術学部教授　建築学）

発掘調査にあたり次の方々からご協力をいただいた。
報告書作成　須田　　勉（国士舘大学教授）、千賀　　久（橿原考古学研究所附属博物館）、
　　小栗　明彦（橿原考古学研究所）、松村　恵司、神野　　恵、渡辺　文彦（奈良文化財研究所）
地権者　　菅原平三郎、齋藤　捷衛、中村　朋之、渡辺　武弘、齋藤　長昭

Ⅱ．郡山遺跡・仙台平野の遺跡群の調査計画と実績

１．調査計画

郡山遺跡の第５次５ヶ年計画は平成16年度で終了したが、それ以降の調査計画については平成16年３月に開催された郡山遺跡調査指導委員会において審議がなされた。その結果、今後は範囲確認調査から遺跡整備に伴う調査へ移行すべく次の５ヶ年計画は策定せず、当面は現段階で持ち越しとなった課題について補足調査を実施していくことが了承された。

補足調査１年目の今年度は、方四町Ⅱ期官衙の東側にもこれまで確認されている南側と西側同様に「外溝」が存在するか否かを明らかとすることを目標とした。

これらは国庫補助事業である『市内遺跡発掘調査』で実施するものであるが、この他に仙台城の主要遺構の遺存状況確認調査、個人住宅建設など小規模開発に伴う発掘調査も含まれており、これらは「仙台平野の遺跡群」として包括されるものである。なお、今年度は現陸奥国分尼寺の本堂改築工事の機会を捉え、陸奥国分尼寺跡推定寺域南部における範囲確認調査を実施することとし、「仙台平野の遺跡群」の一部として調査を計画した。

仙台城跡を除いた郡山遺跡ほかの発掘調査総経費は22,744,000円、国庫補助金額11,372,000円の予算で計画したが、これを郡山遺跡発掘調査に6,265,000円、陸奥国分尼寺跡発掘調査に7,812,000円、その他仙台平野の遺跡群に8,667,000円として配分し、これによって以下のような発掘調査実施計画を立案した。

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間	調査原因
郡山遺跡第166次	方四町Ⅱ期官衙外郭東辺	200㎡	５月～７月	範囲確認
陸奥国分尼寺跡第11次	推定寺域南部	500㎡	９月～11月	範囲確認

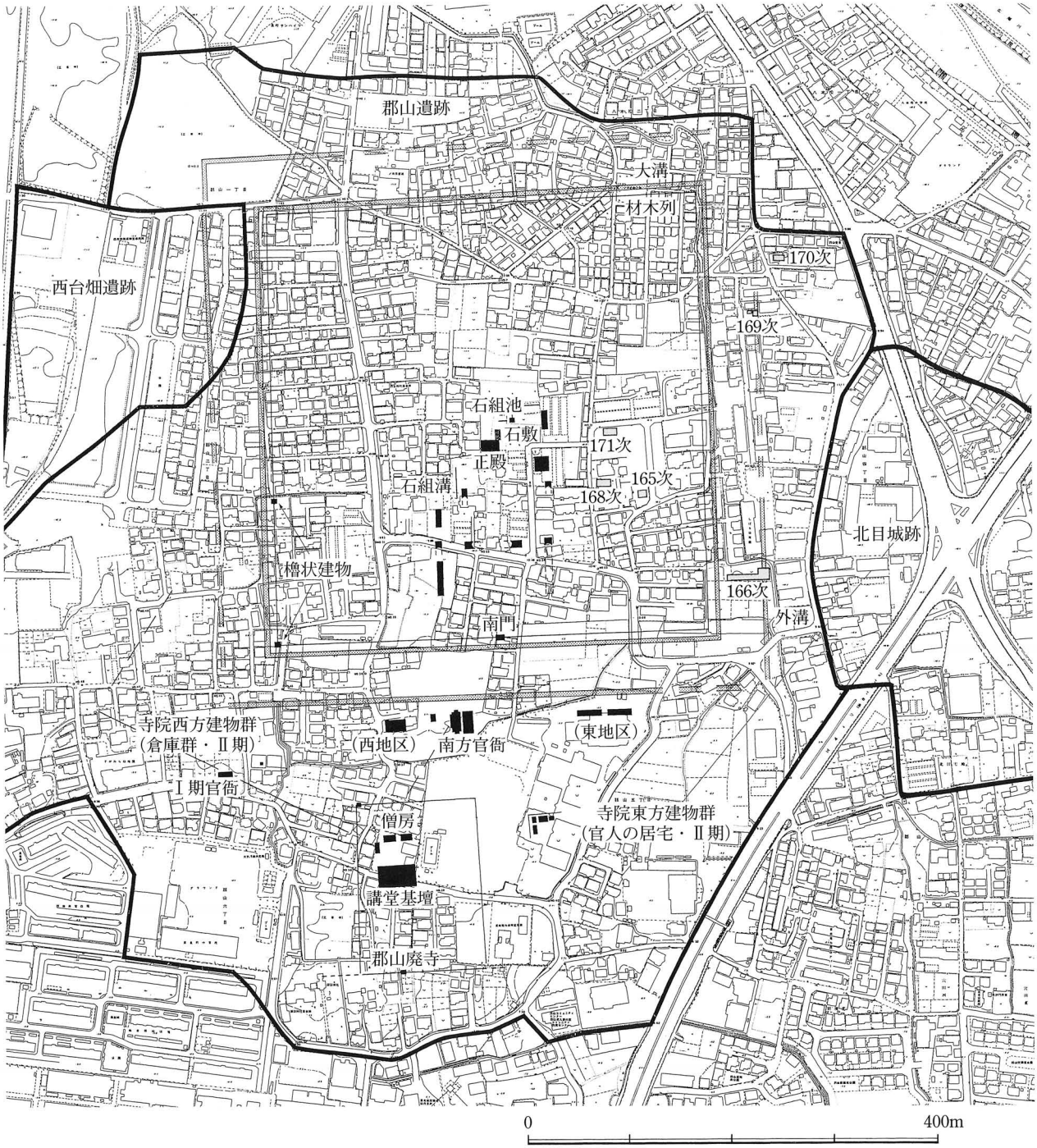
表１　17年度郡山遺跡ほか発掘調査計画

２．調査実績

上記の発掘調査とは別に、個人住宅建設に伴って郡山遺跡で４箇所、南小泉遺跡で２箇所の調査を実施したほか、陸奥国分尼寺跡推定寺域西部において範囲確認調査を実施した。なお、本書には詳細を掲載していないが、伊達政宗が晩年を過ごした城とされる若林城について宮城県、文化庁の指導を受けて範囲確認調査を実施している。また、現陸奥国分寺の仁王門の建替えが急遽必要となり、この機会に仁王門と重複して位置する陸奥国分寺南大門跡の範囲確認調査を実施したが、これらはすべて「仙台平野の遺跡群」として対応した。なお、これらの調査結果はすべて本書に含めることとしたため、今年度の「仙台平野の遺跡群」としての単独の報告書は刊行しないこととした。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
郡山遺跡第166次	方四町Ⅱ期官衙東辺部	219㎡	５月10日～７月15日	範囲確認	郡山遺跡発掘調査
陸奥国分尼寺跡	推定寺域南西部	22㎡	６月20日	範囲確認	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第168次	Ⅰ期官衙中枢部南東側	90㎡	６月21日～７月11日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第169次	方四町Ⅱ期官衙東辺部	19㎡	７月25日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第170次	方四町Ⅱ期官衙東外側	27㎡	８月１日～３日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
陸奥国分尼寺跡第11次	推定寺域南部	215㎡	８月25日～９月26日	範囲確認	仙台平野の遺跡群
陸奥国分寺跡	仁王門跡・南大門跡	18㎡	11月15日～12月２日	範囲確認	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第171次	Ⅰ期官衙中枢部南東側	112㎡	１月10日～１月25日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
南小泉遺跡	西部	21㎡	２月13日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
南小泉遺跡	西部	14㎡	３月６～７日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
若林城跡	城内・南東部	410㎡	３月13日～	範囲確認	仙台平野の遺跡群

表２　17年度発掘調査実績


郡山遺跡
大溝
材木列
170次
西台畑遺跡
169次
石組池
石敷
171次
正殿
165次
石組溝
168次
北目城跡
櫓状建物
166次
外溝
南門
寺院西方建物群
（倉庫群・Ⅱ期）
（西地区）
南方官衙
（東地区）
Ⅰ期官衙
僧房
寺院東方建物群
（官人の居宅・Ⅱ期）
講堂基壇
郡山廃寺
0
400m

第１図　郡山遺跡全体図

第２章　郡山遺跡

Ⅰ．第165次発掘調査

１．調査経過

第165次調査は個人住宅建築工事に伴う調査で、平成17年３月に実施している。調査に至る経緯および調査日程は平成16年度概報に述べたとおりで、日程の関係で平成16年度概報に調査結果を掲載できなかったものである。調査区は方四町Ⅱ期官衙中枢部の東部にあたり、第162次調査区第１トレンチと一部で重複している。

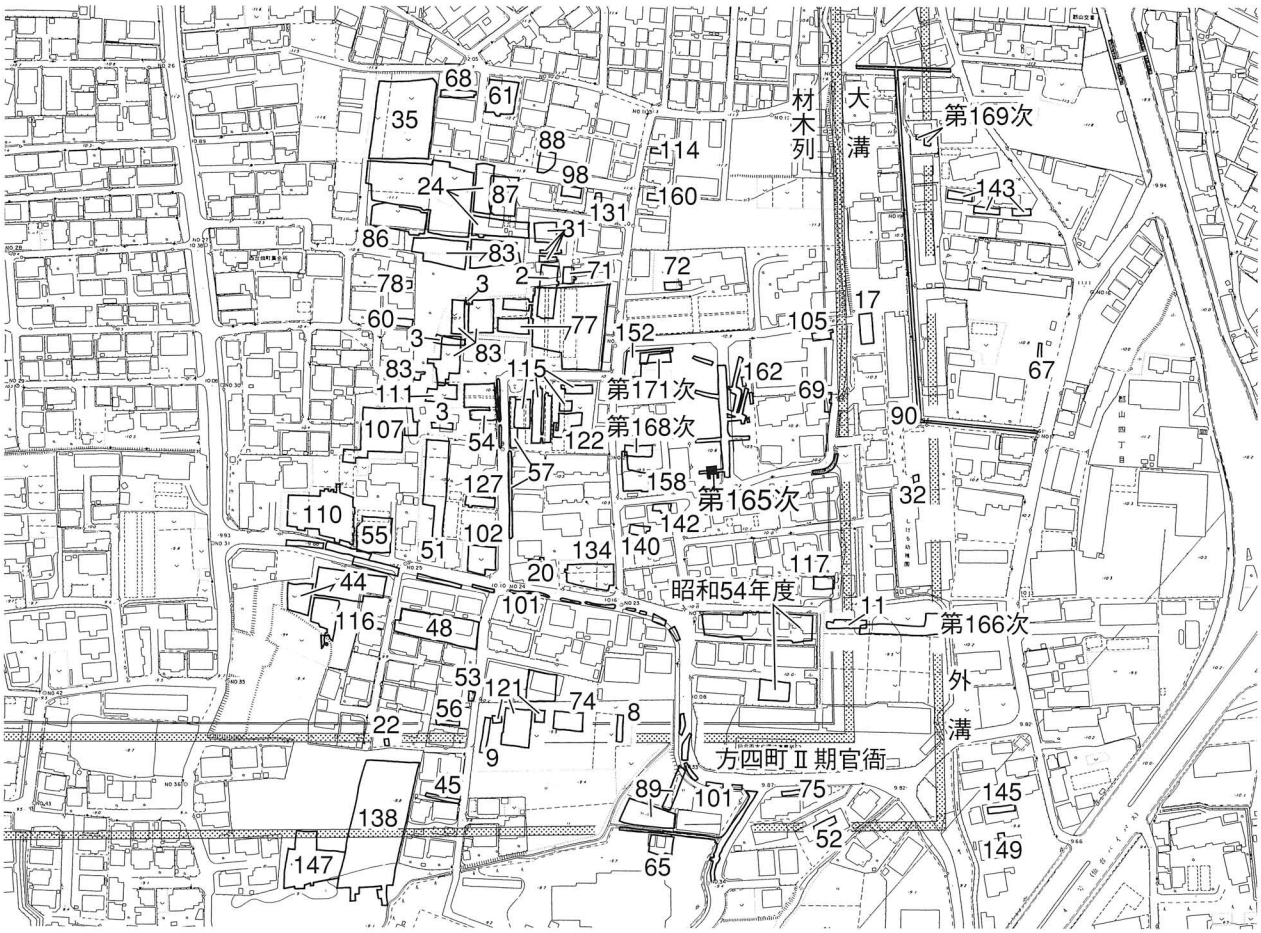
２．調査方法と基本層序

(1)　調査方法

調査区は東西5.5ｍ×南北6.5ｍに設定したが、南東側に一部拡張している。調査面積は約38㎡である。

重機で盛土とⅠ層を除去し、Ⅲ層上面で精査を行った。下層の調査は調査区の制約と周辺における調査成果から実施していない。

遺構実測のための基準杭は調査区の方向に合わせて設定し、後にこの座標値を測量する方法をとった。平面図は基準杭を基に簡易遣り方を組んで１／20で作成した。断面図も１／20で作成している。写真は35㎜モノクロフィルムとリバーサルフィルムを一眼レフカメラで撮影し、補助的にデジタルカメラでも撮影した。



第２図　第165次調査区位置図

(2) 基本層序

基本層序は概ね第162次調査区（註１）と共通と考えられるが、調査区が狭いために対応関係を明確にすることはできなかった。Ⅰ～Ⅳ層まで確認した。

Ⅰ層　10YR４／２灰黄褐色シルト。黒褐色粘土ブロックを少量含む。盛土以前の畑の耕作土である。

Ⅱ層　10YR３／２黒褐色粘土。西部で部分的に確認された。

Ⅲ層　10YR３／２黒褐色粘土。褐色粘土ブロックを多量に含む。

Ⅳ層　10YR４／４褐色粘土。遺構確認面で、第162次調査区のⅢ層に対応すると考えられる。他の調査区でも概ねこの褐色あるいは黄褐色の粘土層上面で遺構を確認している。

３．遺構と遺物

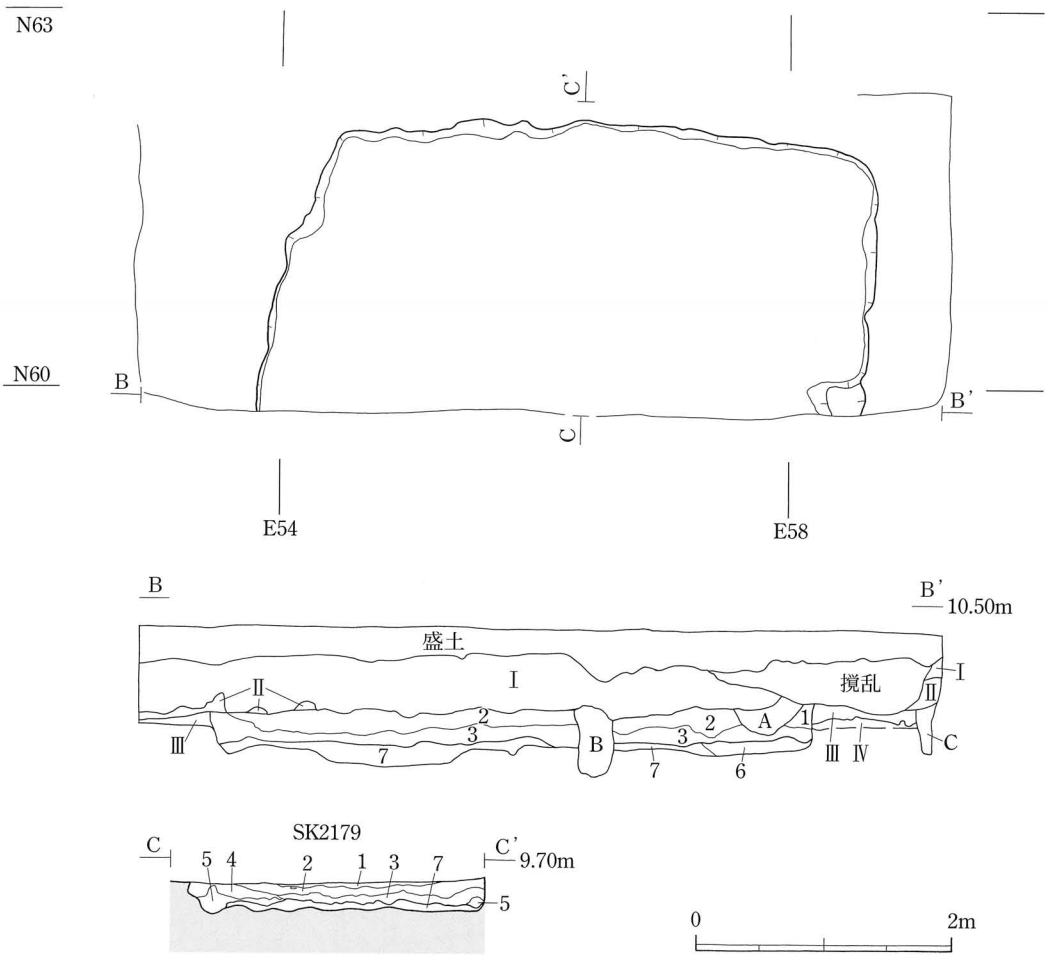
今回の調査では竪穴住居跡１棟、土坑１基、ピット62基を確認した。竪穴住居跡の確認面はⅣ層上面であるが、調査区壁面の観察によると本来はⅢ層上面から掘り込まれていることが判明した。

第３図　第165次調査区全体図

SI2178竪穴住居跡　調査区南壁際に位置する。確認したのは北半部で、南半部は調査区外となっている。規模は東西長約4.8ｍで、主軸方向は明確ではないが北壁の方向からするとE－４°－N前後と推定される。住居跡の東壁、調査区の南壁際にはカマドの北側のソデと考えられる粘土の集積が認められた。住居跡の確認面から床面までの深さは20～25㎝で、床面は住居の掘り方を５～15㎝埋め戻してつくられている。

柱穴などのピットやその他床面上の施設は確認できなかった。堆積土は自然堆積層である。

遺物はカマドの前面を中心として、堆積土下層～床面直上にかけて土師器約700点、須恵器60点、瓦１点、金属製品５点、鉄滓約130点（633ｇ）が出土した。図化できたのは土師器７点、須恵器２点、銅製品１点、平瓦１点である。土師器C－996坏（第５図１）は丸底風平底で体部外面に僅かに段を有し、口縁部は直線的に開いている。



SI2178

層位	色調	性質	混入物・その他
1	10YR３／２　黒褐色	シルト	
2	10YR３／３　暗褐色	シルト質粘土	黒褐色シルトブロック少量、にぶい黄褐色シルト質粘土小ブロック微量、木炭粒微量
3	10YR３／１　黒褐色	粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土小ブロック少量、木炭粒微量
4	10YR３／１　黒褐色	粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土小ブロック多量
5	10YR３／１　黒褐色 10YR５／４　にぶい黄褐色	粘土ブロック 粘土ブロック　混合	
6	10YR３／２　黒褐色	粘土	褐色粘土ブロック多量、（掘り方埋土）
7	10YR４／３　にぶい黄褐色	粘土	灰黄褐色粘土ブロック少量、（掘り方埋土）

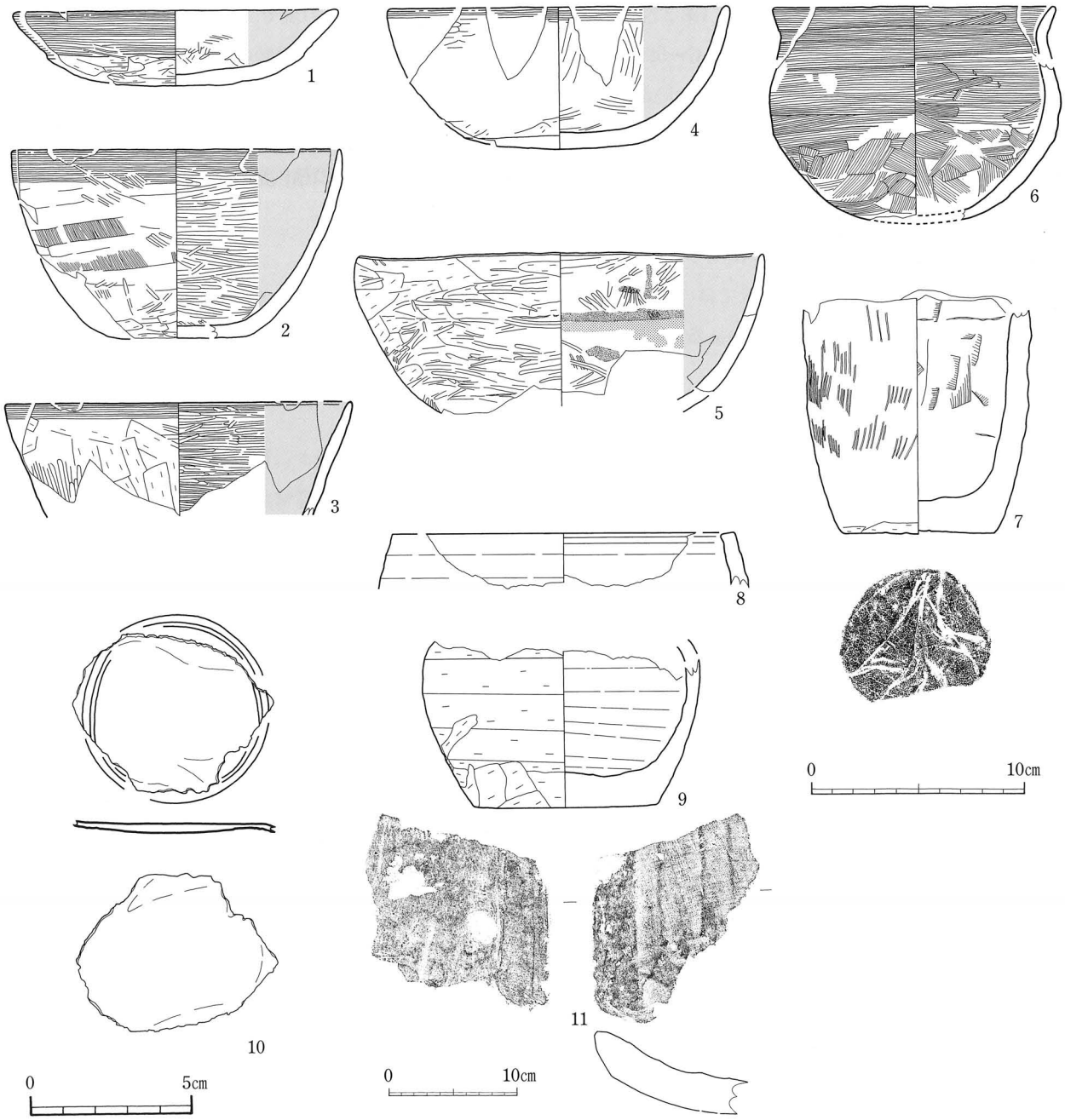
ピット

A	10YR３／２　黒褐色	シルト	
B	10YR２／２　黒褐色	シルト	にぶい黄褐色シルト粒少量
C	10YR４／２　灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルト粒少量

SK2179

層位	色調	性質	混入物・その他
1	10YR２／３　黒褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック少量

第４図　SI2178平面・断面図、SK2179断面図



No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	法量(cm)			調整・特徴	写真図版
					口径	底径	器高		
1	C−996	カマド北脇、最下層	土師器・坏	1／4	(15.2)	(12.0)	3.5	外面口縁部ヨコナデ、体〜底部ヘラナデ、内面ヘラミガキ黒色処理、白針微量	2−1
2	C−997	カマド北脇、最下層	土師器・埦	1／4	(15.2)	(6.0)	8.8	外面口縁部ヨコナデ、体部ハケメ→ヘラナデ→粗いヘラミガキ、底部ヘラケズリ、内面ヘラミガキ黒色処理、白針微量	2−2
3	C−994	下層	土師器・埦	上部1／5	(16.2)			外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ→粗いヘラミガキ 内面ヘラミガキ黒色処理、白針微量	2−3
4	C−995	カマド北部、最下層	土師器・埦	1／3	(16.0)	6.6	8.8	外面口縁部ヨコナデ、体〜底部ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面ヘラミガキ黒色処理、白針微量	2−4
5	C−1001	カマド前面、最下層	土師器・埦	口縁〜体部	(18.8)			口縁〜体部ヘラケズリ→粗いヘラミガキ 内面ヘラミガキ黒色処理、下半部に漆皮膜付着、白針微量	2−5
6	C−998	北壁際、最下層	土師器・鉢	2／5	(13.0)	—	(10.1)	口縁〜体部上半ヨコナデ→体部下半〜底部ヘラナデ	2−6
7	C−999	カマド北脇、最下層	土師器・筒型土器	下部2／5	7.0			外面ハケメ、底部木葉痕、内面ヘラナデ、一部に指頭痕	2−7
8	E−526	北西部、下層	須恵器・？	口縁部	(16.0)			ロクロ調整	2−8
9	E−525	北壁際、最下層	須恵器・壺	下部		8.4		ロクロ調整、体部外面回転ヘラケズリ、下端手持ちヘラケズリ 底部ヘラ切→回転ヘラケズリ	2−9
10	N−128	下層	銅製品・碗？	底部				15．8g十、同心円状の沈線	2−10
11	G−128	床面	平瓦	部分				凸面縄叩き(やや細め・縦位)、ナデ、側面にヘラケズリ 凹面布目痕、部分的にナデ・ヘラケズリ、幅2〜3cmの横骨痕、	2−11

第5図　SI2178出土遺物

C－997・C－994・C－995・C－1001（第５図２～５）はやや大振りで深い器形の椀で、このうちC－1001は内部に漆液を容れていた痕跡が認められた。C－999（第５図７）は筒型の器形を有する粗製の土器である。銅製品Nb－128は周囲が破損して原形を留めてはいないが、片面に同心円状の筋が２～３本認められる。図上復元した結果、この筋は真円を呈していることから円形の容器であると考えられる（註２）。

SK2179土坑　SI2178の北西コーナー近くに位置する。南北65㎝、東西50㎝の楕円形で、深さは約40㎝、壁は急角度で立ち上がっている。底面は平坦で、堆積土は１層である。

遺物は土師器・須恵器が約50点出土したが図化できたものはない。

ピット　隣接する第162次調査区では、このような小規模なピットで構成される掘立柱建物跡を検出しているが、今回は建物跡の柱穴として可能性のあるものは確認できなかった。

４．まとめ

SI2178竪穴住居跡から出土した土師器C－996坏は丸底風平底で体部外面に僅かに段を有し、口縁部は直線的に開くものである。このような器形の坏やC－997椀をはじめとする深い器形の土器はⅡ期官衙の遺構に多く認められている（註３）。このような遺物の様相とSI2178の主軸方向が真北にほぼ直交していることから、SI2178はⅡ期官衙の時期の遺構と考えられる。なお、金属器Nb－128や漆液を容れていたと考えられるC－1001椀などは、この遺構が一般の住居跡とは異なる性格を有していたことも示唆していると考えられる。

（註１）「第162次発掘調査２区」『郡山遺跡25』仙台市文化財調査報告書第284集

（註２）銅製品Nb－128は小栗明彦氏（橿原考古学研究所）に実見していただき、銅碗以外の器種の可能性も指摘されている。

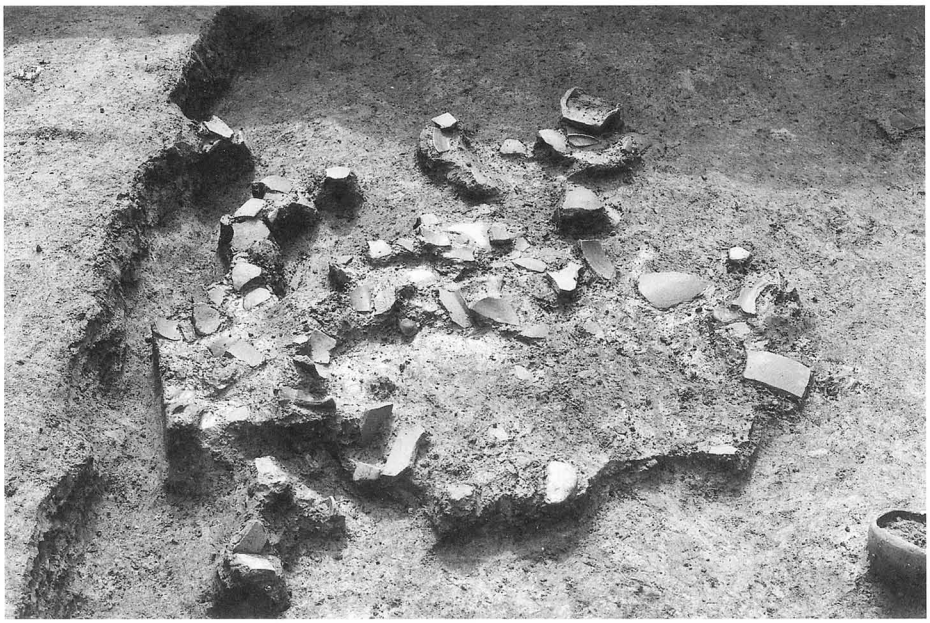
（註３）郡山廃寺東方のSI1121竪穴住居跡（第65次調査）やⅡ期官衙の外郭大溝であるSD35（第43次調査）などから出土している。

出土遺構・層位	土師器	須恵器	中世陶器	瓦	金属製品	その他
堆積土	542	42		1	5	鉄滓126、小玉石３
SI2178堆積土下層	150	17				鉄滓８、小玉石１
床面	1	1				小玉石１
SK2179	46	3	1			鉄滓５
ピット	38				1	鉄滓７
Ⅰ層	3					

表３　第165次調査遺物集計表

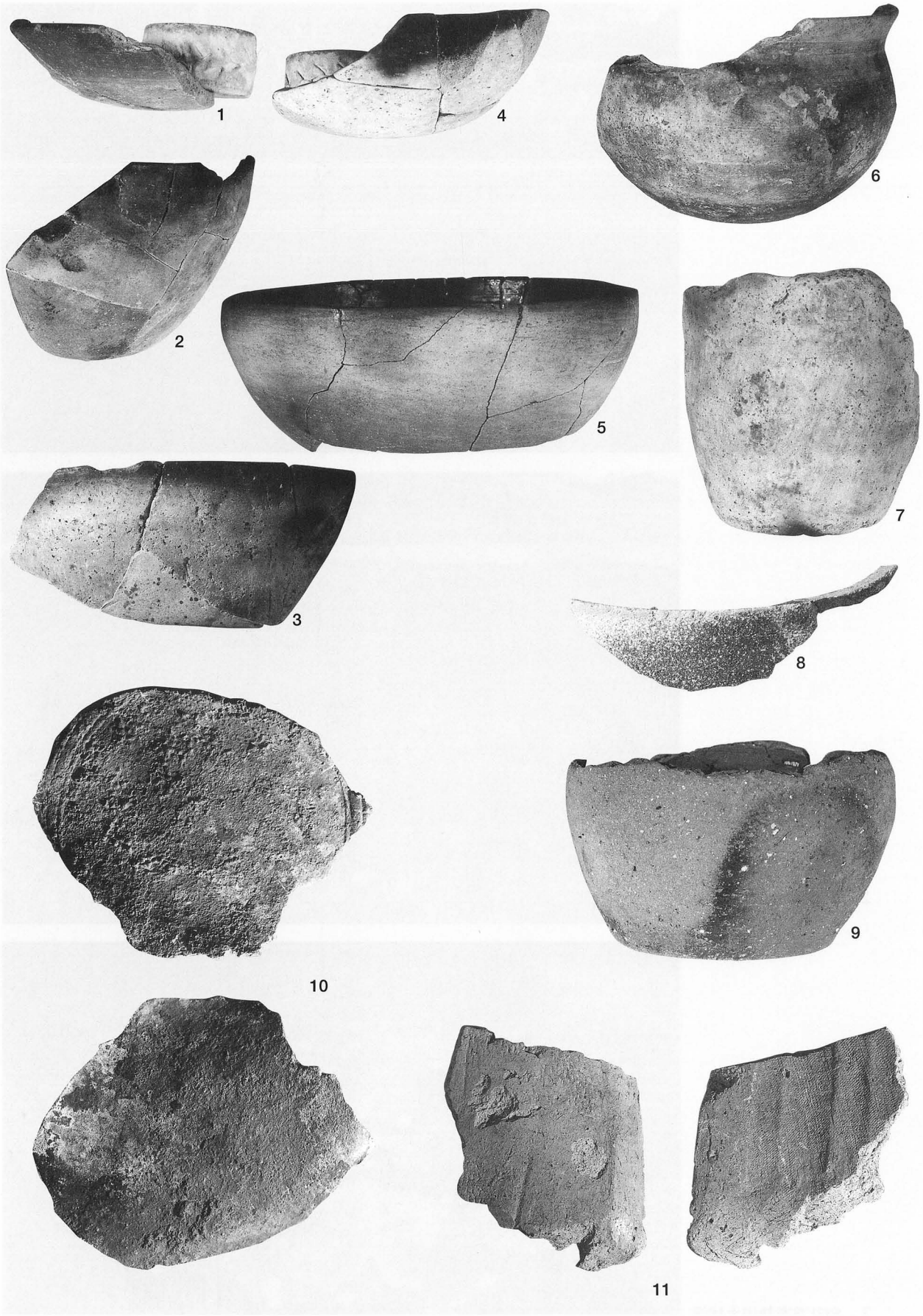
1．調査区全景（西から）

2．SI2178床面検出状況
（北から）



3．SI2178遺物出土状況
（北から）

写真図版１　第165次調査区全景、竪穴住居跡



写真図版２　SI2178出土遺物

Ⅱ．第166次発掘調査

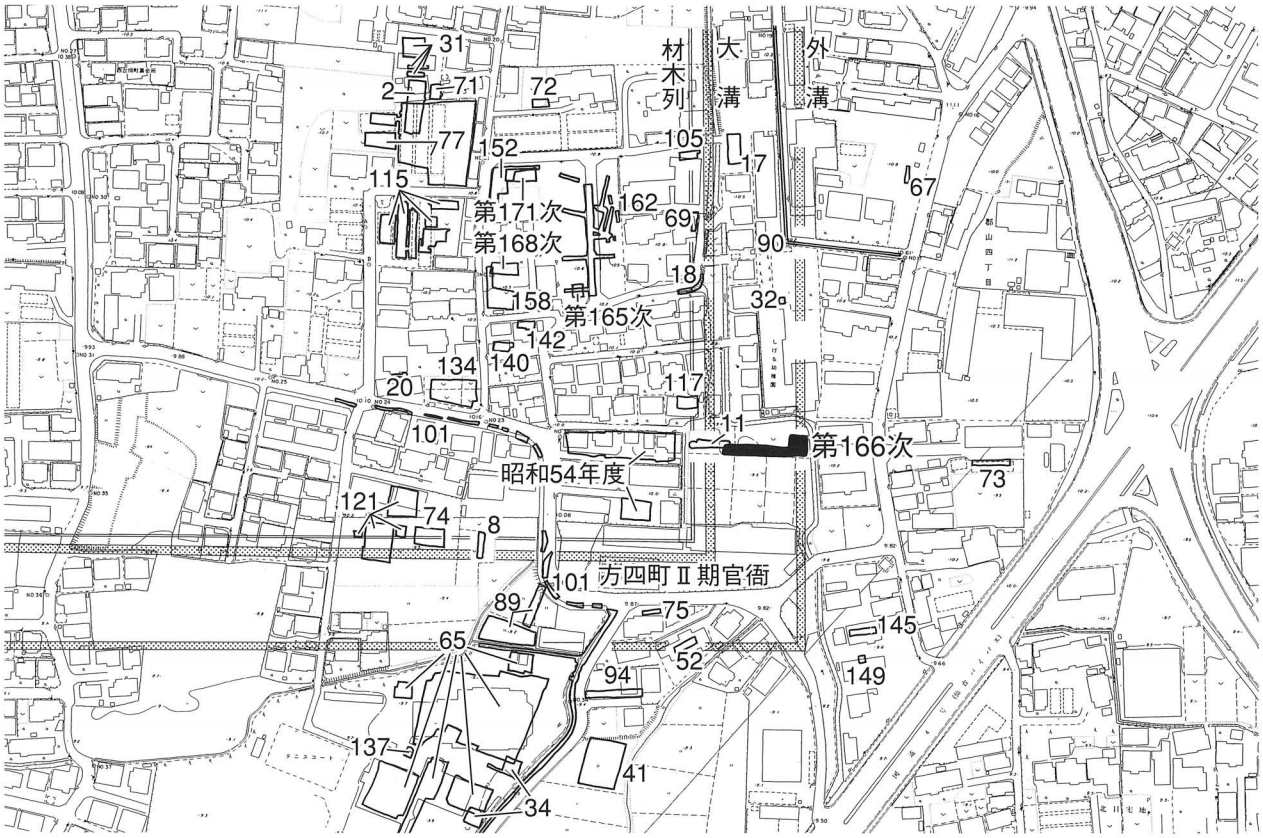
１．調査経過

第166次調査区は郡山三丁目208地内に所在し、昭和56年度に調査した第11次調査区（註１）と一部重複しながら、その東側に位置している。

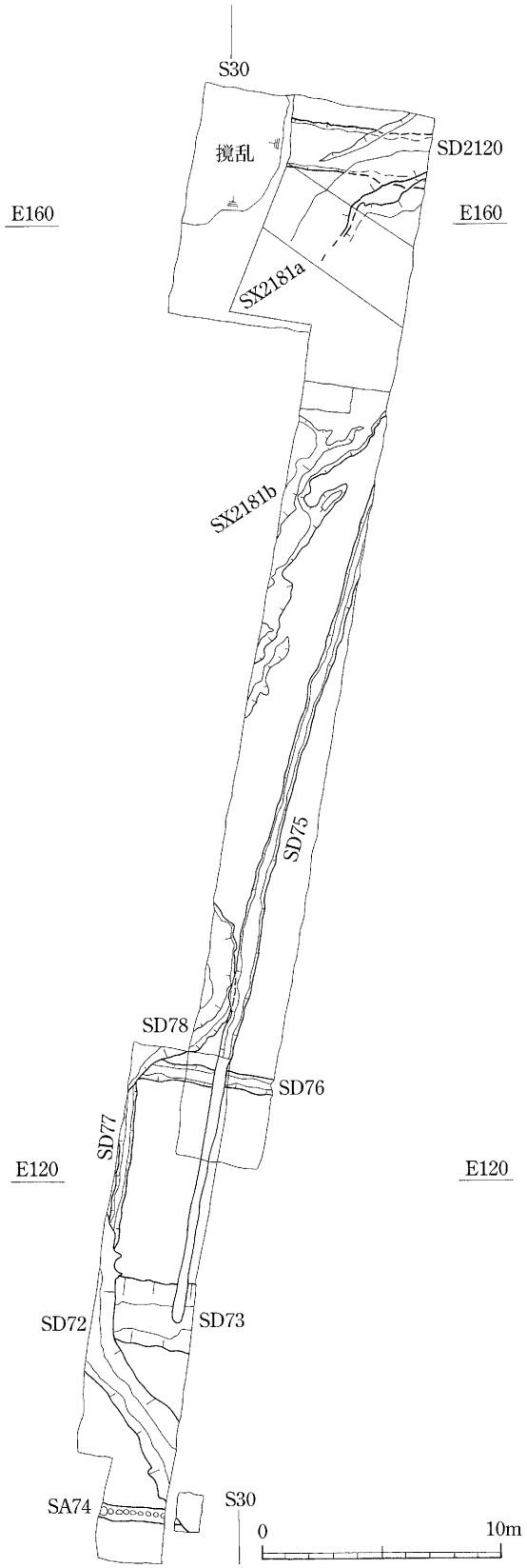
方四町Ⅱ期官衙は材木列と大溝で区画されているが、南辺や西辺では大溝から約50m離れた外側にさらに別の溝（外溝）が囲むことが確認されていた（註２）。今回の調査では南辺や西辺と同様に、東辺でも外溝が存在するか否かを確認することを目的としていた。また、外溝が確認された場合は、南辺の調査では大溝と外溝に挟まれた区域は遺構が希薄な空閑地となっていたので、東部で大溝と外溝の間の状況を検証する必要があった。

昭和56年に実施された第11次調査では方四町Ⅱ期官衙外郭東辺を構成するSA74材木列と、大溝であるSD73溝跡を確認している。今回の調査区はこのSD73溝跡から約50m離れた外溝の通過想定地点に約10×10mの範囲を設定したが、第11次調査区の大溝との間の区域にも幅約４mの調査区を設け遺構の状況の把握につとめた。

調査は５月９日に表土を除去し、５月10日から遺構確認作業を開始した。調査区のほぼ全面に畑の天地返しがなされていたため、天地返しを除去した後に遺構精査を開始した。６月９日に調査区東部で近世の流路跡と考えられる遺構を確認した。なお調査を進めこの流路跡の底面において目的としていた外溝の存在を確認できたのが６月14日である。外溝の確認作業を完了したのは７月６日で、調査を終了したのは７月15日である。この間の７月12日には報道機関へ調査成果を公表している。この後７月15日から20日にかけて埋め戻しと整地作業を行った。



第６図　第166次調査区位置図



第７図　第11次・166次調査区全体図
（左が北）

２．調査方法と基本層序

(1)　調査方法

調査の第１目的である外溝の想定地点ではできるだけ面積の確保に努めたが、この箇所は「郡山堀」と呼ばれる用水路が調査区の北側から東側に向かって回りこんで流れているため、用水路に近い東側については十分な面積を確保することができなかった。調査面積は219㎡である。

重機でⅠ層を除去し、Ⅱ層上面で精査を行った。調査区のほぼ全面に畑の天地返しがなされていたため、天地返しを除去した後に遺構精査を開始した。この時点で確認できた遺構は第11次調査で確認されていた溝跡３条の延長部分のみであったが、畑の天地返しが深いため遺構面の凹凸が激しく（写真図版３－２）、遺構検出作業に著しく支障となる状況であった。そこで溝跡３条の精査終了後、天地返しの間に残った基本層Ⅱ層を掘り下げて遺構確認面をほぼ平坦にした後に、再度遺構確認作業を実施している。

遺構実測のための基準杭は調査区の方向に合わせて設定し、後にこの座標値を測量する方法をとった。平面図は基準杭を基に簡易遣り方を組んで１／20で作成した。断面図も１／20で作成している。写真は35㎜モノクロフィルムとリバーサルフィルムを一眼レフカメラで撮影し、補助的にデジタルカメラでも撮影した。

(2)　基本層序

確認した基本層序はⅠ～Ⅱ層までで、Ⅰa～Ⅰe層が現代の畑の耕作土、Ⅱ層上面が遺構確認面である。

Ⅰa層　10YR４／３にぶい黄褐色シルト。にぶい黄褐色粘土ブロックを微量含む。

Ⅰb層　10YR４／３にぶい黄褐色砂質シルト。

Ⅰc層　10YR４／２灰黄褐色粘土質シルト。天地返し溝の上層の堆積土。

Ⅰd層　10YR４／２灰黄褐色粘土質シルト。褐色粘土ブロックを少量含む。天地返し溝の下層の堆積土。

Ⅰe層　10YR４／２灰黄褐色粘土。天地返し溝の最下層の堆積土。部分的に確認している。

Ⅱ層　10YR５／４にぶい黄褐色粘土。上面が遺構確認面であるが、天地返し溝による撹乱が激しい。

３．遺構と遺物

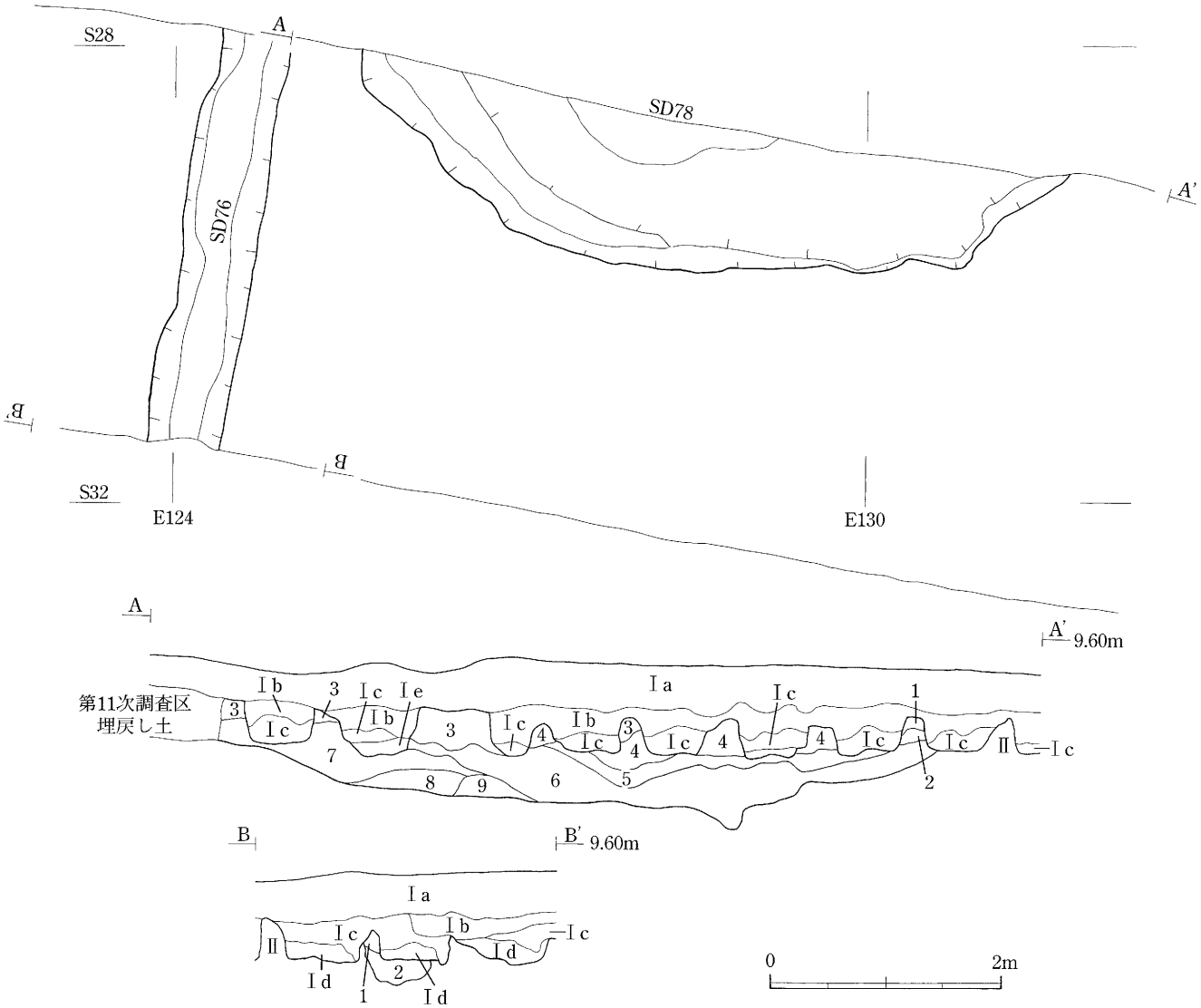
今回の調査では溝跡４条、自然流路と考えられる遺構２を

確認した。

SD75溝跡　西端部から調査区南東方向に横断している溝跡で、第11次調査区で確認された溝跡の延長部分である。上幅30～80㎝、底面幅20～60㎝、深さ10～20㎝である。断面形は「U」字形で、壁は急角度に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。方向はW－８°－Nで、検出した長さは24ｍである。堆積土は灰黄褐色の粘土層である。

遺物は土師器３点、須恵器２点、中世陶器１点が出土したが図化はできなかった。

SD76・SD78溝跡を切っている。



SD76

層位	色調	性質	混入物・その他
1	2.5Y４／２　暗灰黄色	粘土質シルト	
2	2.5Y４／２　暗灰黄色	粘土	部分的に、にぶい黄褐色粘土が細かい互層状に入る

SD78

層位	色調	性質	
1	10YR５／３　にぶい黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色シルトブロック少量
2	10YR５／４　にぶい黄褐色	粘土	斑文状の灰黄褐色粘土少量
3	10YR５／４　にぶい黄褐色	細砂	
4	10YR４／２　灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色砂質シルトブロック少量
5	10YR５／３　にぶい黄褐色	砂質シルト	部分的に褐色粘土が層状に入る
6	2.5Y５／２　暗灰黄色	細砂	灰黄褐色粘土ブロック多量
7	10YR５／２　灰黄褐色	粘土	やや色調の薄い粘土ブロック少量
8	10YR５／３　にぶい黄褐色 2.5Y５／２　暗灰黄色	粗砂 シルト　互層	
9	2.5Y４／２　暗灰黄色	粘土	

第８図　SD76・78平面・断面図

SD76溝跡　調査区西部を南北方向に横断している溝跡で、第11次調査区で確認された溝跡の延長部分である。

上幅55～70㎝、底面幅20～40㎝、深さ約50㎝である。断面形は「U」字形で、壁は急角度に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。方向はN－３°－Eで、検出した長さは3.6ｍである。堆積土は２層に分層できるが、下層は細かな互層となっているので水成堆積と考えられる。

遺物は出土しなかった。

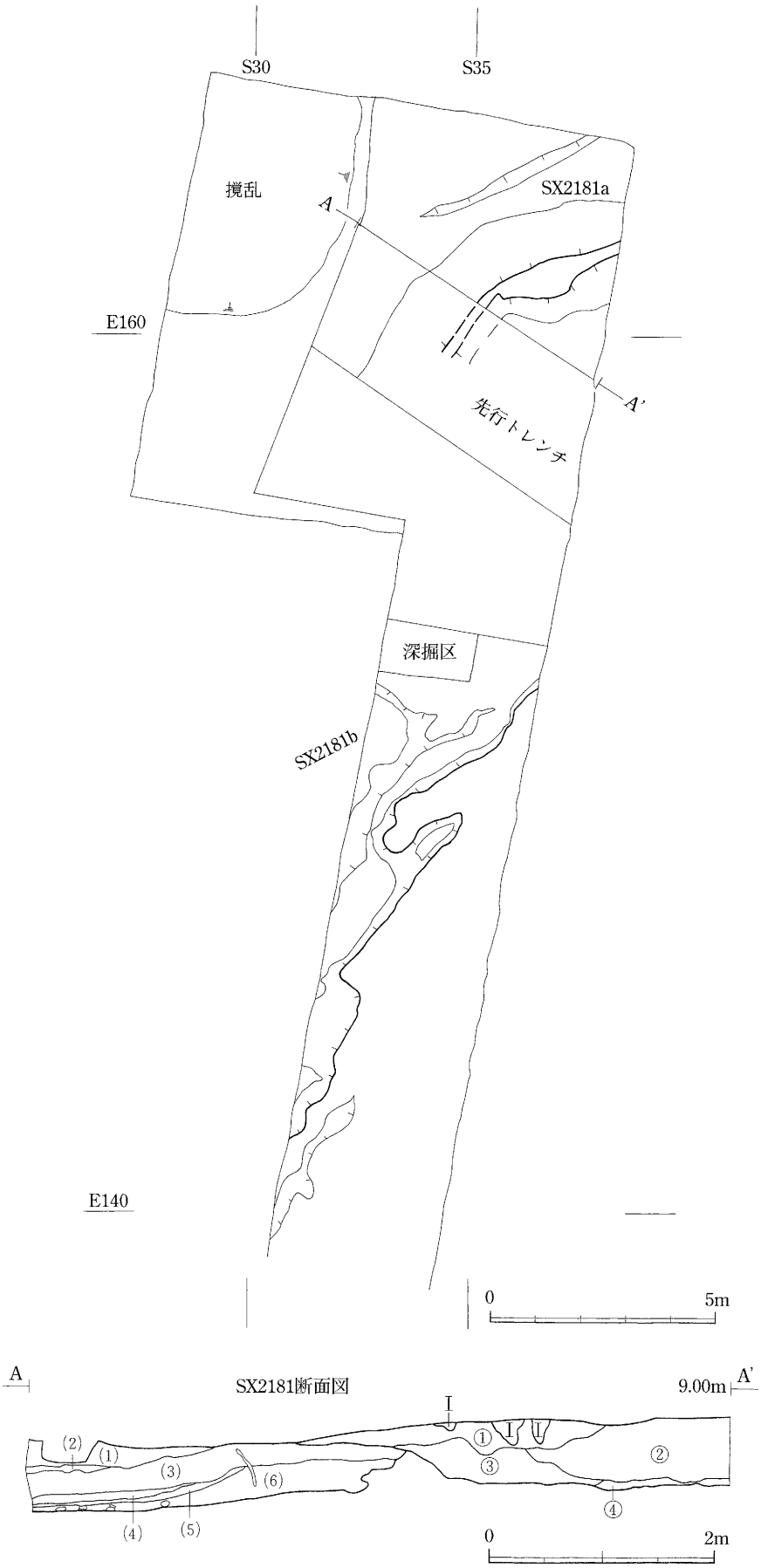
SD75・SD78溝跡に切られている。

SD78溝跡　調査区西部の北壁際で部分的に確認されているのみであるが、第11次調査区で確認された溝跡の延長部分と考えられる。幅は不明であるが、深さ70～90㎝である。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが部分的に凹凸が認められる。堆積土は互層となっている箇所があるので基本的に水成堆積と考えられるが、砂層も認められることから比較的水量が豊富であった可能性がある。

遺物は土師器５点で、図化はできなかった。

SD75溝跡に切られている。なお、今回の調査区では重複関係にはないが、第11次調査ではSD76溝跡を切っている。

SX2181性格不明遺構　調査区のほぼ東半部を占めている遺構で、状況からは自然流路と考えられるが、詳細が不明であるので一応性格不明遺構としている。



第９図　SX2181平面・断面図（左が北）

SX2181a

層位	色調	性質	混入物・その他
(1)	10YR5／4 にぶい黄褐色	細砂	灰黄褐色粘土ブロック少量
(2)	10YR4／2 灰黄褐色	粘土	
(3)	2.5Y5／3 黄褐色 10YR4／2 灰黄褐色	細砂 粘土 } 互層	
(4)	10YR3／2 黒褐色	泥炭質粘土	植物遺体少量
(5)	10YR4／2 灰黄褐色	粘土	植物遺体微量
(6)	2.5Y5／2 暗灰黄色 2.5Y5／2 暗灰黄色 10YR4／3 にぶい黄褐色	細砂 砂 粗砂 } 互層	
(7)	10YR4／2 灰黄褐色 10YR5／2 灰黄褐色	粘土 粗砂 } 互層	

SX2181b

層位	色調	性質	混入物・その他
①	10YR6／2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄斑多量
②	10YR4／4 褐色 10YR5／4 にぶい黄褐色 10YR5／3 にぶい黄褐色	細砂 シルト 粗砂 } 粗い互層	
③	2.5Y5／3 黄褐色	細砂	部分的に黄褐色粗砂が層状に入る
④	10YR4／2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック少量、礫少量

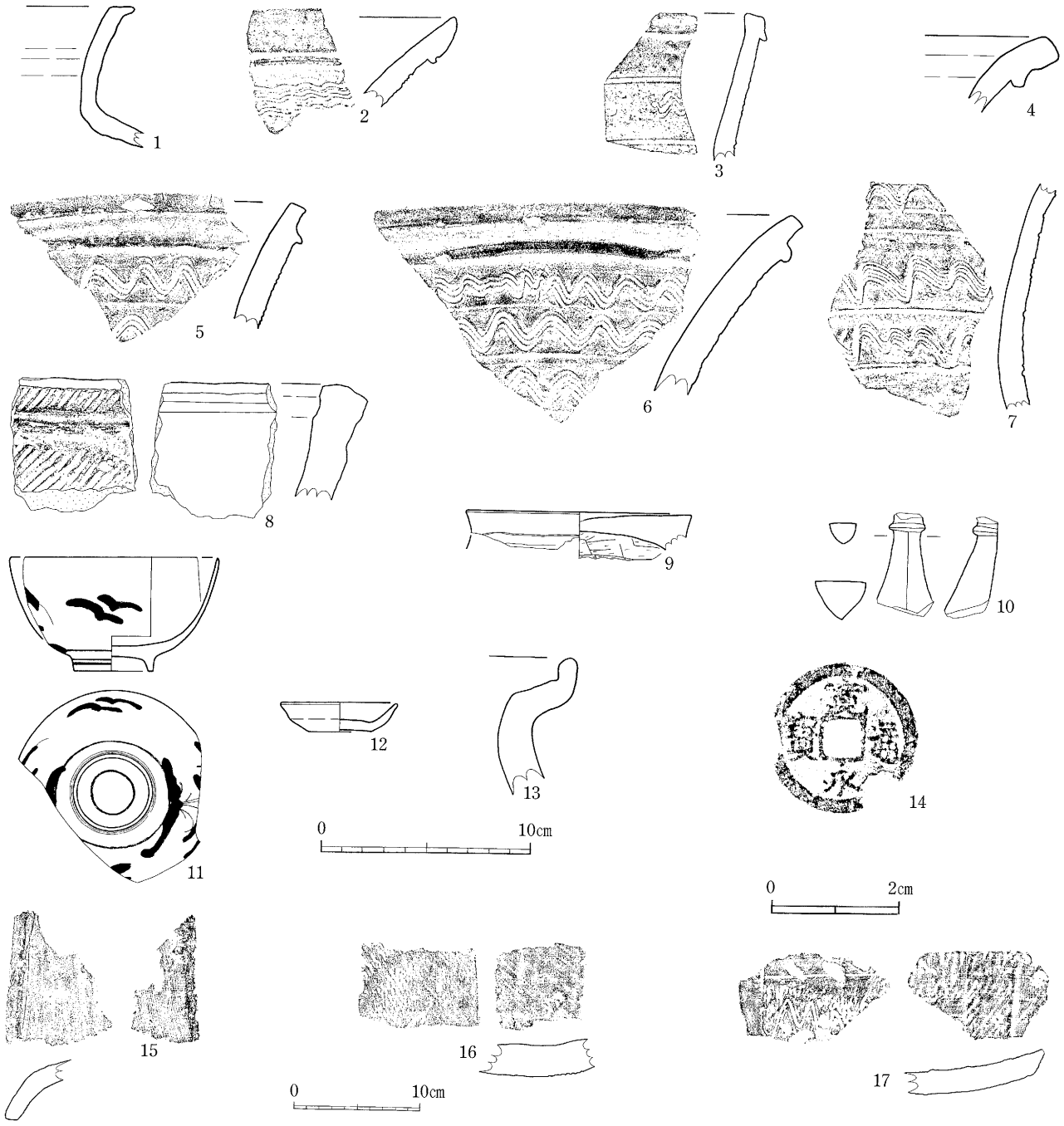
前述したように、Ⅰ層を除去した後にⅡ層(にぶい黄褐色粘土)上面で遺構の確認作業を行ったが、調査区の東半部では基本層Ⅱ層は北東側に向かって落ち込んでいき、Ⅱ層上には灰黄褐色細砂が堆積している状況であった。この灰黄褐色細砂上では特に遺構は認められず、西半部同様に天地返しが掘り込まれている状況であった(写真図版4－1)。この段階で外溝は確認できなかったが、この層の堆積時期によってはその下層に外溝が存在することも考えられた。そこで下層調査のトレンチを設定して精査した結果、調査区北部から南東方向にかけて大きな溝状の窪みが存在することが判明し、さらに精査を進めた結果、その堆積土中には近世の遺物が含まれることから、近世の流路であることが判明した。重複関係からSX2181aとSX2181bに大別される。なお、この2時期の流路の下層で目的としていた方四町Ⅱ期官衙の外溝となるSD2120溝跡を確認している。

SX2181a　調査区北東部の撹乱によって北側の上端が確認できなかったが、上幅は5m以上と推定される。底面幅は0.5～1.5m、深さ約80cmである。断面形は浅い皿形で、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。方向は北西から南東方向であるが、調査区南東部ではやや南に方向を変えている。検出した長さは約8mである。底面近くには礫が大量に認められたが、堆積土の大部分は細砂や粘土を主とする互層であり、一部には泥炭質粘土も認められることから水流は比較的緩やかであったと考えられる。

遺物は土師器、須恵器などの土器類が約380点の他、木製品が90点以上出土したが、土師器や須恵器の大部分は重複関係にあるSD2120溝跡を削平して入り込んだ可能性があり、須恵器ではSD2120溝跡出土のものと同一個体と考えられるものも多い。図化できたのは須恵器5点、中世陶器1点、磁器1点、木製品36点である(第10～12図)。須恵器E－519甕は口縁部直下に凸帯が巡り、その下に波状文とロクロ目状の浅い沈線が施されているが、同様の文様の甕はSD2120溝跡やSX2181bからも出土している。E－502甕は破損した甕の底部内面を砥石に転用したもので、体部の破断面までも完全に磨面となっている。E－501蹄脚円面硯はSX2181a底面からの出土であるので、本来はその直下に位置するSD2120溝跡の堆積土中の遺物であると考えられる。J－13碗は図化できた遺物のなかでは最も新しい時期のもので、概ねSX2181aの埋没年代を示していると考えられる。第11・12図は木製品である。単独では年代が確定できないものが多いが、三引両文のL－28杯や漆塗りで無歯型のL－23下駄などが含まれることから、大部分が近世初頭の所産と考えられる。

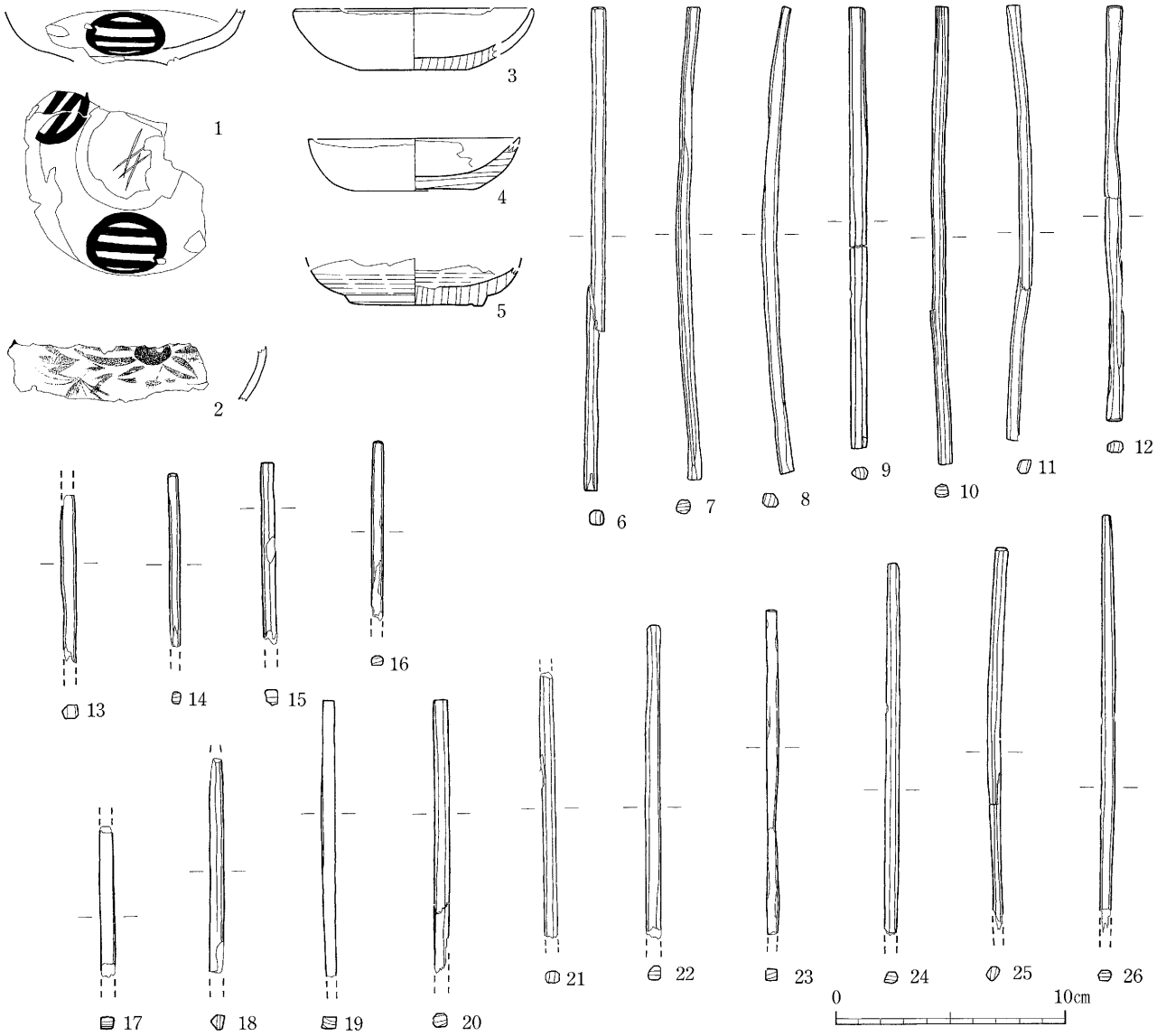
SD2120溝跡を切り、SX2181bに切られている。

SX2181b　調査区東部を斜めに横断している。北側の肩は堆積土が類似するSX2181aと重複しているため不明瞭であるが、上幅約6m、底面幅約4m、深さ約70cmである。断面形は浅い皿形で、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。方向は蛇行しているため不明瞭であるが、ほぼ北西から南東方向で、調査区南東部では南に方向を変えている。検出した長さは約10mである。堆積土は砂を主とする互層であることから、水量が豊富で流れも早かったと考えられる。



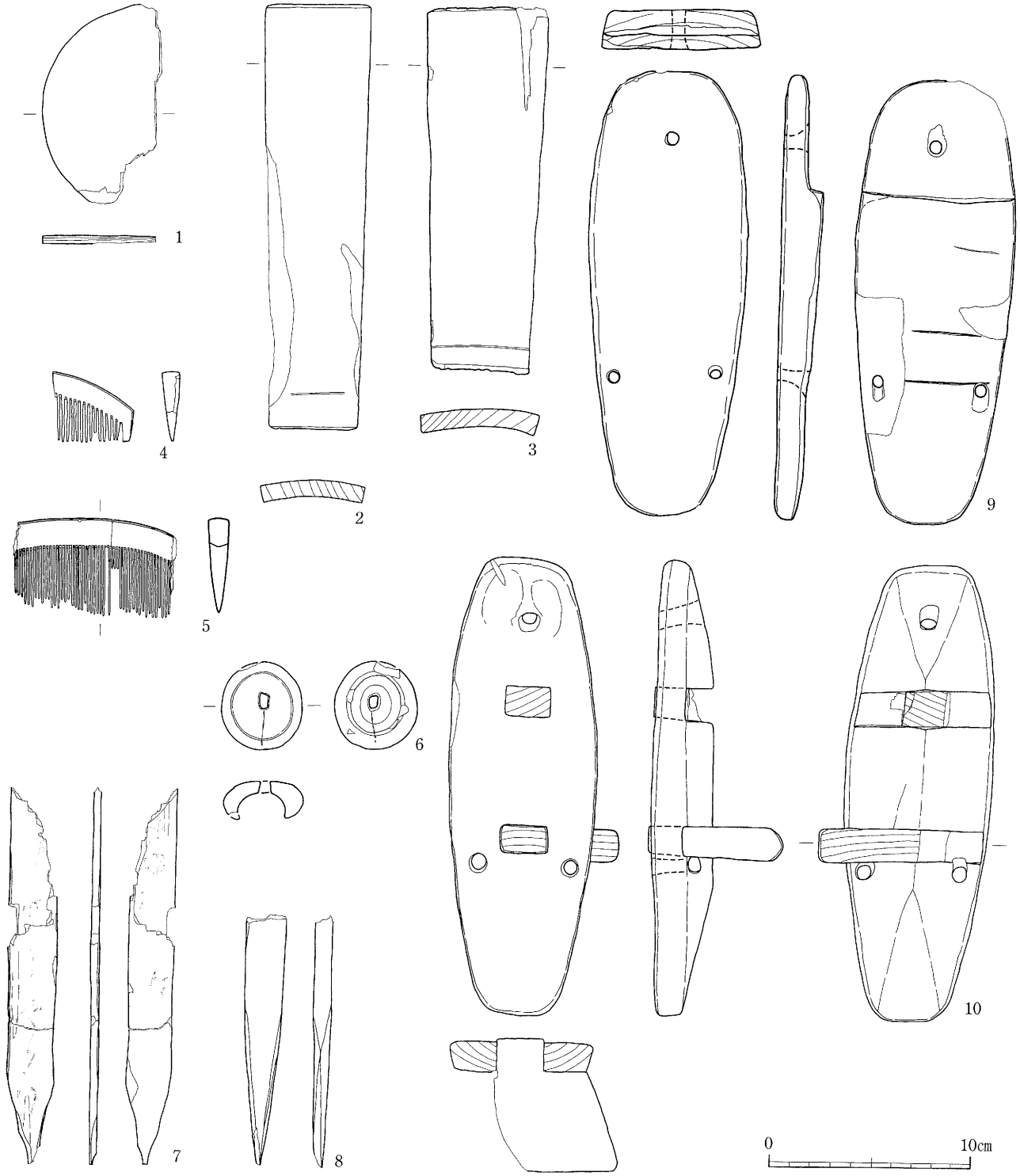
No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	調整・特徴	写真図版
1	E－506	SX2181a	須恵器・甕	口縁～頸部１／５	ロクロ調整	7－1
2	E－516	SX2181b	須恵器・甕	口縁部小片	ロクロ調整、口縁直下に波状文	7－2
3	E－509	SX2181a・底面	須恵器・甕	口縁部小片	ロクロ調整、口縁部に凸帯、波状文と沈線	7－3
4	E－521	SX2181b	須恵器・甕	口縁部小片	ロクロ調整、口縁部に幅広の凸帯	7－4
5	E－523	SX2181b	須恵器・甕	口縁部小片	ロクロ調整、口縁部直下に凸帯１条、凸帯下に波状文とロクロ目状の浅い沈線	7－5
6	E－519	SX2181a	須恵器・甕	口縁部小片	ロクロ調整、口縁部直下に凸帯１条、凸帯下に波状文とロクロ目状の浅い沈線	7－6
7	E－514	SX2181b	須恵器・甕	頸部小片	ロクロ調整、波状文と沈線	7－7
8	E－522	SX2181b	須恵器・甕？	口縁部小片	外面平行叩き、内面に被熱痕跡	7－8
9	E－502	SX2181a・底面	須恵器・甕	底部１／４	底部内面を砥石に転用	7－9
10	E－501	SX2181a・底面	須恵器・蹄脚円面硯	脚部一箇所のみ	上部に凸帯(内面を除く)、断面三角形、上下面剥離、内面に自然釉付着	7－10
11	J－13	SX2181a	磁器(肥前)・碗	１／２	口径(9.8cm)、底径3.5cm、器高5.5cm、畳付露胎、17世紀	7－11
12	Ia－1	SX2181b	土師質土器・小皿	ほぼ完形	口径5.5cm、底径2.9cm、器高1.4cm、ロクロ調整、底部回転糸切無調整 口縁部にタール状の付着物、灯明皿として使用	7－12
13	Ic－1	SX2181a	陶器(在地)・甕	口縁部小片	13世紀後半～14世紀前半	7－13
14	Nb－127	SX2181b	銅製品・銭貨	ほぼ完形	径2.4cm、1.8g十、古寛永通貨	7－14
15	F－103	SX2181b	丸瓦	凸面：ナデ、側面ヘラケズリ、凹面：布目痕、側面ヘラケズリ、厚さ1.5cm		7－15
16	G－126	SX2181b	平瓦	凸面：縄叩き(細め・斜位)、縄目つぶれ、凹面：糸切痕、布目痕、厚さ2.5cm		7－16
17	G－127	SX2181b	軒平瓦	顎部：縄叩き(細め・斜位)、ナデ、波形沈線、凹面：糸切痕、布目痕、幅３cmの模骨痕、厚さ1.8cm		7－17

第10図　SX2181出土遺物(1)



No.	登録No.	遺構・層位	種別	遺存度	法量(cm)			調整・特徴	写真図版
					口径	底径	器高		
1	L－28	SX2181a	木製品・漆器杯？	1／2				外面：黒色地＋暗赤褐色漆文様(体部に三引両・底部に「＃」) 内面：暗赤褐色漆、椀蓋の可能性あり	8－1
2	L－25	SX2181a	木製品・漆器椀	体部小片				外面：黒色地＋暗赤褐色漆文様(草花？)、内面：暗赤褐色漆	8－2
3	L－26	SX2181a	木製品・漆器皿	3／4	10.4	4.6	2.7	外面：暗赤褐色漆(大部分剥離)、内面：暗赤褐色漆(大部分剥離)	8－3
4	L－27	SX2181a	木製品・漆器皿	4／5	9.3	5.3	2.3	外面：暗赤色漆(大部分剥離)、内面：暗赤色漆	8－4
5	L－29	SX2181a	木製品・挽物皿	体部～底部		5.9		ロクロ挽	8－5
					長さ	幅	厚さ		
6	L－45	SX2181a	木製品・箸	完形	21.4	0.6	0.6	折れ	8－6
7	L－44	SX2181a	木製品・箸	完形	20.8	0.6	0.6	やや湾曲	8－7
8	L－43	SX2181a	木製品・箸	完形	20.5	0.7	0.6	湾曲	8－8
9	L－38	SX2181a	木製品・箸	完形	19.4	0.7	0.5	折れ	8－9
10	L－34	SX2181a	木製品・箸	完形	20.1	0.6	0.6	一部割れ	8－10
11	L－46	SX2181a	木製品・箸	完形	19.2	0.6	0.6	折れ	8－11
12	L－33	SX2181a	木製品・箸	完形	18.2	0.7	0.5	折れ	8－12
13	L－42	SX2181a	木製品・箸	中央部1／3	7.4＋	0.7	0.6		—
14	L－37	SX2181a	木製品・箸	1／3	7.6＋	0.5	0.6		—
15	L－52	SX2181a	木製品・箸	1／3	7.7＋	0.6	0.7		—
16	L－36	SX2181a	木製品・箸	1／3	7.8＋	0.5	0.4		—
17	L－39	SX2181a	木製品・箸	中央部1／3	6.7＋	0.6	0.5		—
18	L－35	SX2181a	木製品・箸	中央部1／2	9.5＋	0.6	0.6		—
19	L－49	SX2181a	木製品・箸	3／5	12.2＋	0.6	0.5		8－18
20	L－48	SX2181a	木製品・箸	3／5	12.1＋	0.7	0.6		8－19
21	L－40	SX2181a	木製品・箸	中央部1／2	11.7＋	0.5	0.5		—
22	L－50	SX2181a	木製品・箸	2／3	13.8＋	0.7	0.6		8－17
23	L－32	SX2181a	木製品・箸	2／3	14.3＋	0.6	0.5		8－16
24	L－41	SX2181a	木製品・箸	3／4	16.4＋	0.6	0.5		8－15
25	L－51	SX2181a	木製品・箸	3／4	16.8＋	0.6	0.6		8－14
26	L－47	SX2181a	木製品・箸	9／10	18.4＋	0.5	0.4		8－13

第11図　SX2181出土遺物(2)



No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	法量(cm)			調整・特徴	写真図版
					長さ	幅	厚さ		
1	L－54	SX2181a	木製品・曲物	底板１／２	径(11.2)		0.35		9－1
2	L－19	SX2181a	木製品・桶	側板	21.3	5.3	0.8	外面下部に箍の痕跡	9－2
3	L－20	SX2181a	木製品・桶	側板	18.4	6.0	1.0	外面下部に箍の痕跡	9－3
4	L－53	SX2181a	木製品・櫛	１／３	4.0＋	3.5＋	0.9	歯の根元に朱色の線描	9－4
5	L－31	SX2181a	木製品・櫛	中央部１／２	7.9＋	5.0＋	1.1		9－5
6	L－24	SX2181a	木製品・蓋？	ほぼ完形	径4.4		1.9	中央部に方形(６×９㎜)の穿孔	9－6
7	M－4	SX2181a	木製品・呪符木簡	下部	19.0＋	2.3＋	0.4	両面墨書、片面に符牒、その他判読不能	9－7
8	M－5	SX2181a	木製品・木簡？	下部	12.7＋	2.0＋	0.9	文字は未確認	9－8
9	L－23	SX2181a	木製品・無歯下駄	ほぼ完形	22.3	8.0	2.0	表・側面に朱色漆痕跡(大部分剥離)	9－9
10	L－18	SX2181a	木製品・差歯下駄	差歯の大部分欠損	22.9	7.4	3.1 高さ6.6		9－10

第12図　SX2181出土遺物(3)

遺物は土師器、須恵器などの土器類が約300点出土したが、SX2181aと同様に土師器や須恵器の大部分は重複関係にあるSD2120溝跡から削平されて入り込んだ可能性があり、須恵器はSD2120出土のものと同一個体と考えられるものも多い。図化できたのは須恵器５点、土師質土器１点、銭貨１点、瓦３点である(第10図)。土師質土器Ia－１小皿と銭貨Nb－127寛永通寶が概ねSX2181bの埋没年代を示す資料と考えられる。

SD2120溝跡、SX2181aを切っている。

SD2120溝跡　調査区東端部に位置する南北方向の溝跡で、SX2181a・2181bの底面で確認した。上半部のほとんどをSX2181a・bによって削平されているが、調査区南壁際でSX2181aとSX2181bの間隔がやや広がっているために両者の間に中州状の部分が形成されており、この部分と重複する溝跡西壁付近の堆積土のみは比較的よく遺存していた。上幅2.0～2.3m、底面幅1.6～1.7m、深さ約１mであるが、本来の深さはもっと深く、上幅も3.5m程度はあったと推定される。断面形は逆台形を呈し、壁は急に立ち上がっているが、南端付近の西壁上部は大きく開いている。ただし壁の上部は大部分が削平されているため上半部の状況は明らかではない。底面はほぼ平坦である。方向はN－１°－Eであるが、検出した長さが5.5mと短いので角度については若干の誤差を含んでいる可能性はある。堆積土は褐灰色の粘土を主とする自然堆積層である。

第11次調査で確認されていた方四町Ⅱ期官衙外郭東辺の大溝であるSD73溝跡とこのSD2120溝跡との間隔は、溝跡の心々で49.3m、溝の上端間の間隔は46.0mである。

遺物は土師器、須恵器約200点で、大部分は堆積土が比較的よく遺存していた南端部西壁際から出土した。図化できたのは須恵器９点である(第14図)。E－500坏蓋は内面端部にカエリを有している。E－508甕は頚部中位に低い凸帯、E－510甕は口縁直下に低い凸帯を巡らし、凸帯の上下あるいは下に波状文を巡らすものであるが、E－510甕は波状文の間にロクロ目状の浅い沈線が認められる点がE－511と共通するので、同一個体の可能性がある。E－515・517・512甕は波状文と明瞭な沈線が施されているがE－515と517は細かくやや乱雑な波状文である。E－513甕は頚部の小片であるがやや厚めの接合部となっている。

SX2181a、SX2181bに切られている。

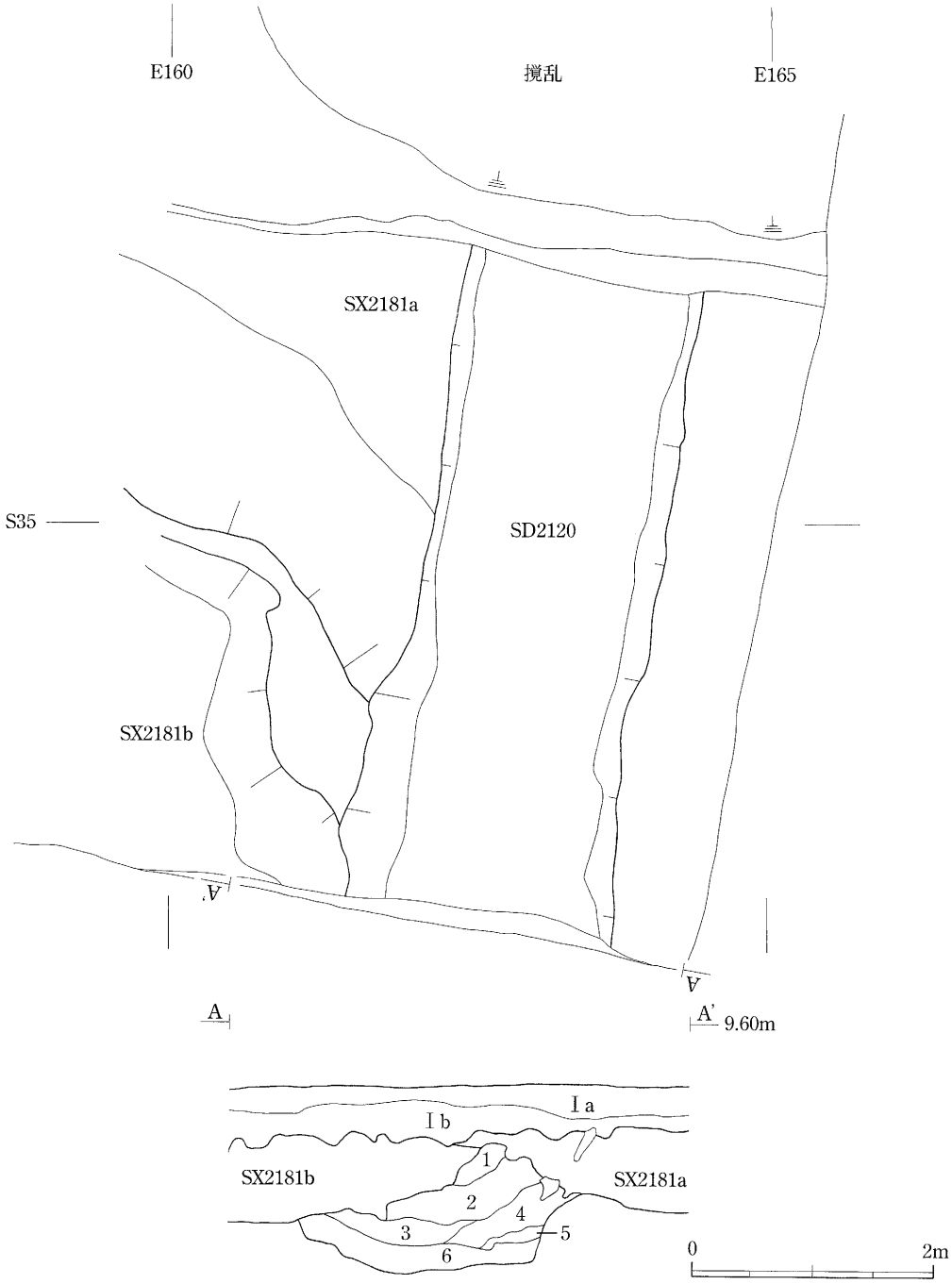
４．まとめ

SD2120溝跡が発見された結果、方四町Ⅱ期官衙の東辺においても南辺や西辺と同様に、材木列と大溝で区画されたさらに外側を外溝が囲むことが確認された。SD2120溝跡と外郭東辺の大溝であるSD73溝跡との間隔は、溝跡の心々で49.3m、溝の上端間で46.0mであり、官衙南辺と同じ状況であることが明らかとなった(註３)。また、調査区の幅が狭いため断定はできないが、SD2120溝跡とSD73溝跡との間では官衙に係わる遺構は確認できなかったので、南辺と同じく大溝と外溝に挟まれた区域は遺構が希薄な空閑地となっていることが想定される。

E－501蹄脚円面硯は、硯部、脚部、台脚部を別々に作って結合するタイプであり、蹄脚円面硯の中では古い様相を呈するとされている(註４)。同様のものは奈良県明日香村の飛鳥池遺跡などから出土しており、E－501と細部の形態が類似する遺物も認められる(註５)。E－501蹄脚円面硯はⅡ期官衙と飛鳥地方との深い関連性を示す遺物と言えよう。なお、E－508・510～512・515・517のような須恵器大甕は第11次調査区西側の官衙内部(昭和54年度調査区)から出土している。

遺構層位	土師器	須恵器	赤焼土器	土師質土器	中世陶器	近世陶器	磁器	金属製品	瓦	木製品
SD75	3	2		1						
SD78	5			1						
SX2181a	217	146	1		4	4	3	3	1	漆器11、挽物１、曲物５、箸25、櫛２、桶４、木簡２、下駄７、杭２、板材・角材30、棕櫚(？)縄１、用途不明２
SX2181b	181	102	2	1	6	2		1	7	柄１
SD2120	60	139								
Ⅰ層	179	18	15		4	11		17		

表４　第166次調査遺物集計表



層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR４／２　灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック微量、黒褐色粘土ブロック微量
2	10YR４／１　褐灰色	粘土	木炭粒微量
3	10YR４／１　褐灰色	粘土	黒褐色粘土ブロック少量、にぶい黄褐色粘土ブロック少量
4	10YR３／２　黒褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック少量
5	10YR４／１　褐灰色	粘土	にぶい黄橙色粘土ブロック多量
6	10YR４／１　褐灰色	粘土	オリーブ黒色粘土ブロック多量

第13図　SD2120平面・断面図

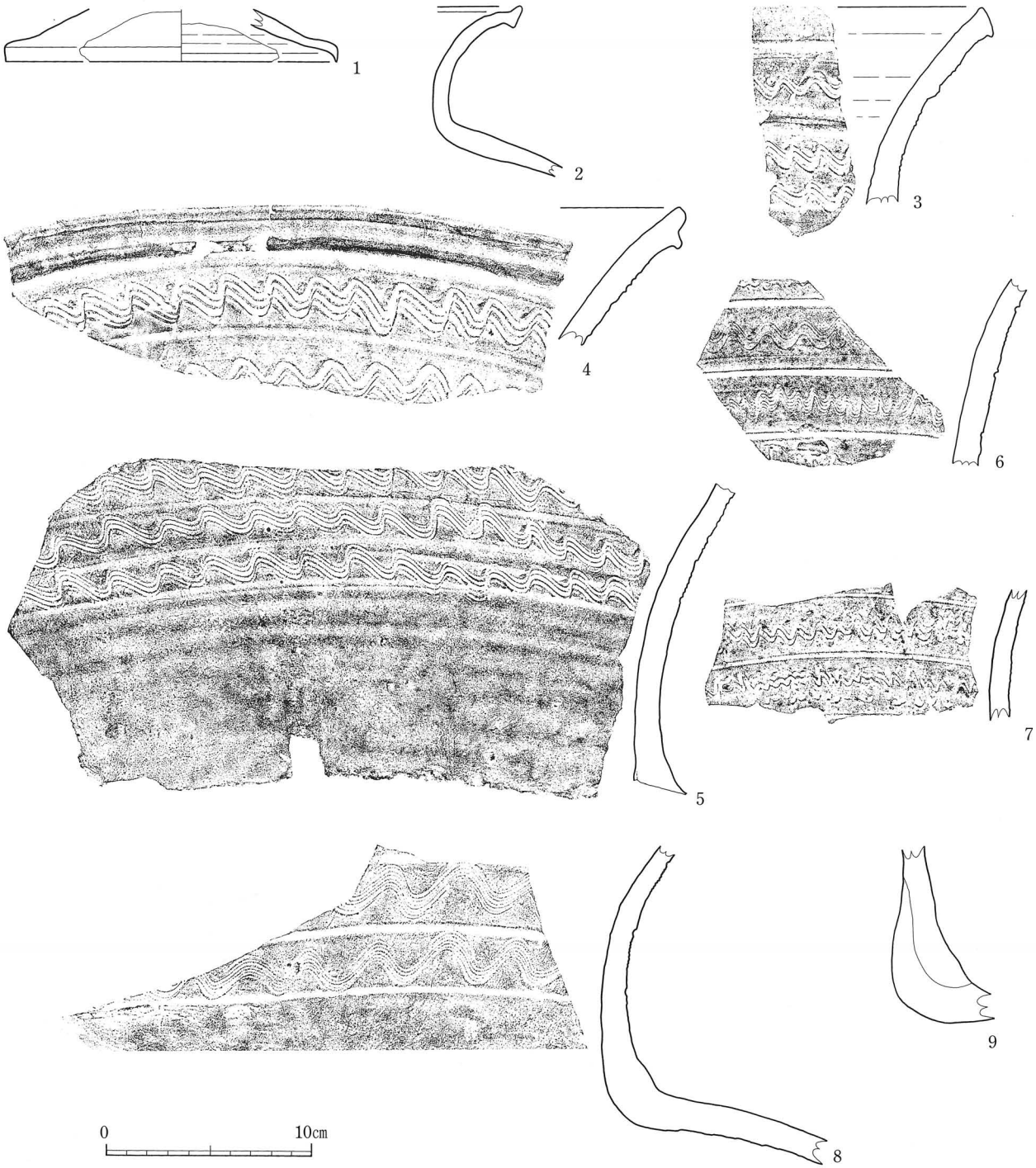
(註１)「第11発掘調査」『郡山遺跡Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第38集

(註２)外溝は、これまで方四町Ⅱ期官衙の南辺では第124次調査と第138次調査、西辺では西台畑遺跡の３地点において確認されている。

(註３)外郭大溝と外溝など、外郭の構造については第４章でまとめた。

(註４)神野・川越：2003「平城京出土の陶硯」

(註５)村松恵司氏、神野恵氏、渡辺文彦氏(奈良文化財研究所)に実見していただき、御教示を得た。

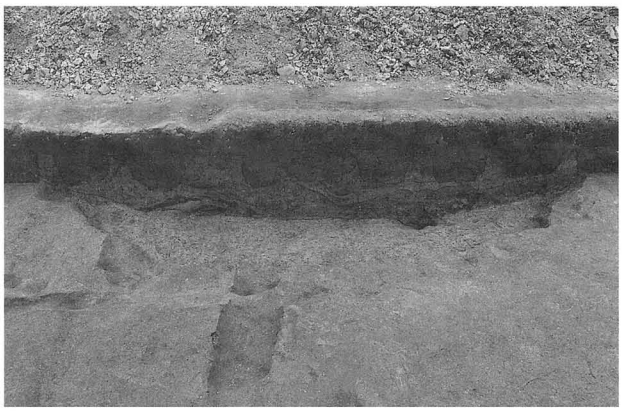


No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	調整・特徴	写真図版
1	E－500	SD2120	須恵器・坏蓋	下部1／4	口径(17.0cm)、ロクロ調整	6－1
2	E－507	SD2120	須恵器・甕	口縁～体部小片	ロクロ調整、体部外面平行叩き	6－2
3	E－508	SD2120・4層	須恵器・甕	口縁部小片	ロクロ調整、頸部中位に低い凸帯1条、凸帯の上下に波状文	6－3
4	E－510	SD2120・4層	須恵器・甕	口縁～頸部1／10	ロクロ調整、口縁部直下に凸帯1条、凸帯下に波状文とロクロ目状の浅い沈線	6－4
5	E－511	SD2120	須恵器・甕	頸部1／4	ロクロ調整、波状文とロクロ目状の浅い沈線	6－5
6	E－515	SD2120・4層	須恵器・甕	頸部小片	ロクロ調整、波状文と沈線	6－6
7	E－517	SD2120・SX2181a	須恵器・甕	頸部小片	ロクロ調整、波状文と沈線	6－7
8	E－512	SD2120・4層	須恵器・甕	頸部1／4	ロクロ調整、波状文と沈線	6－8
9	E－513	SD2120・4層	須恵器・甕	頸部小片		6－9

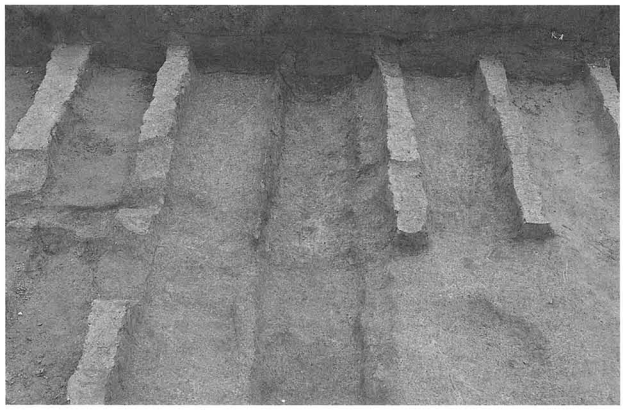
第14図　SD2120出土遺物

１．調査区西部全景（西から）

２．SD75と調査区中央部（東から）



３．SD78完堀状況（南から）



４．SD76完堀状況（北から）

３．SD76断面（北から）

写真図版３　第166次調査区西部全景、溝跡

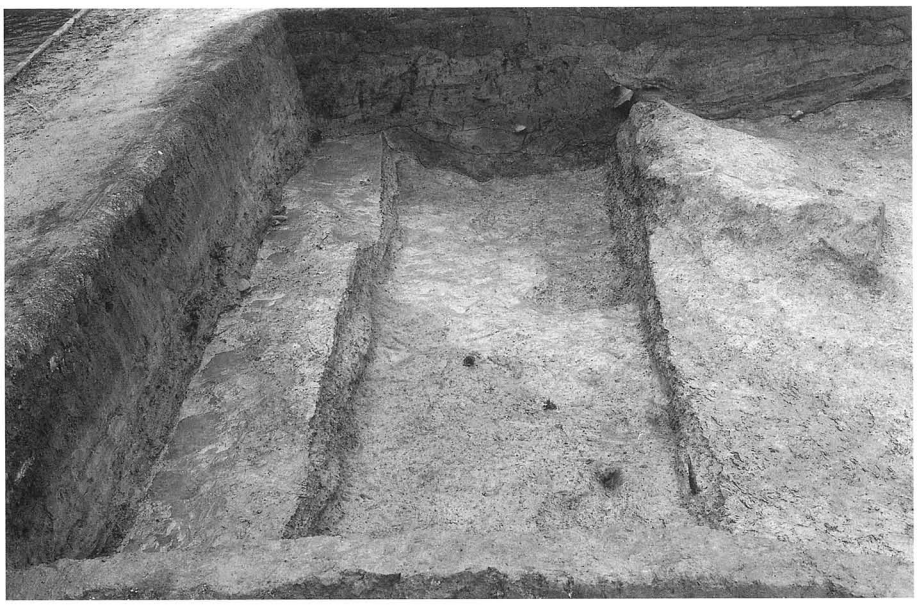
1．調査区東部全景（西から）

2．SX2181b西部
（北から）

3．SD2120確認状況
（北から）

写真図版４　第166次調査区東部全景、溝跡他

1．SD2120完堀状況（南から）



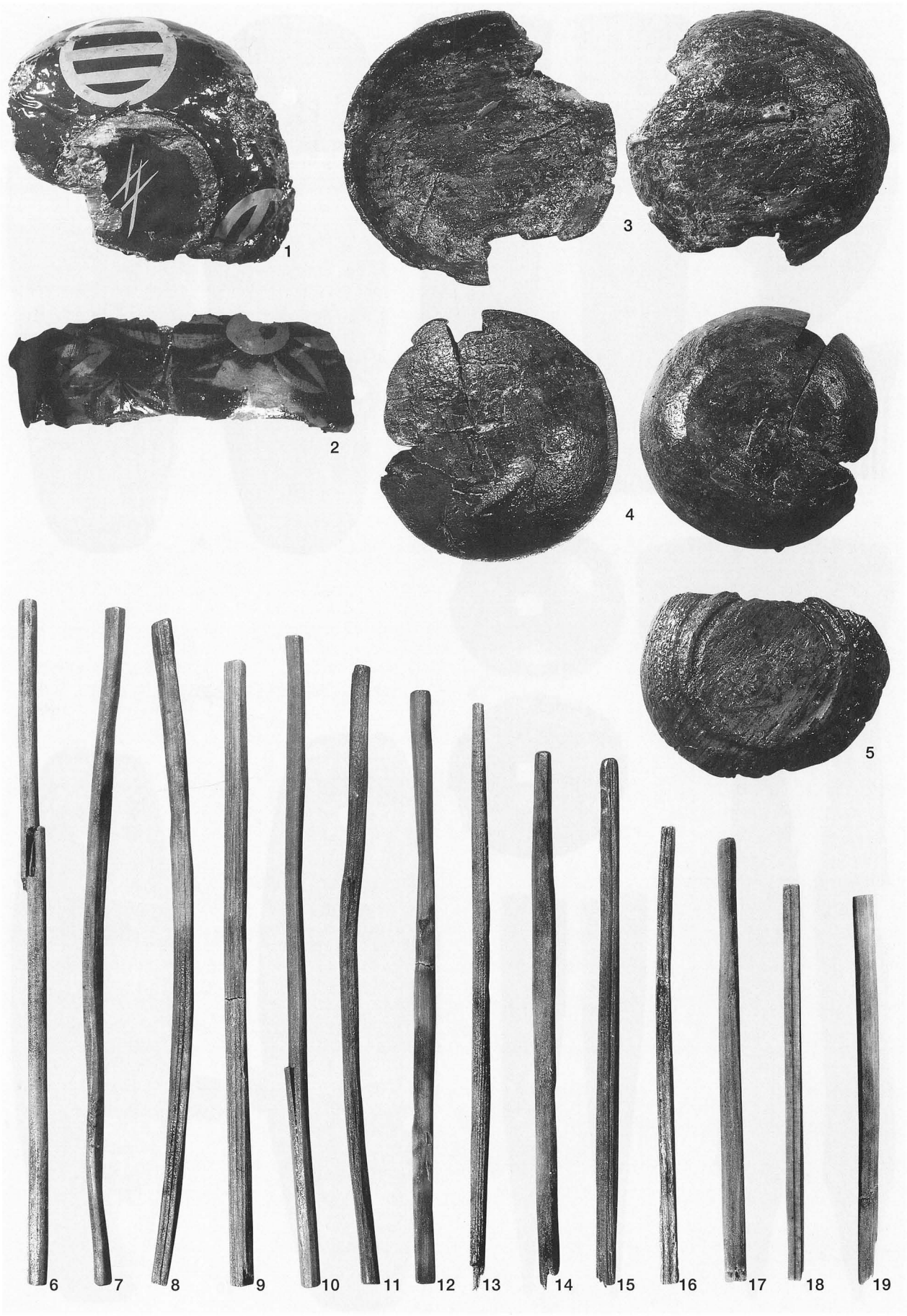
2．SI2120完堀状況
（北から）

3．SD2120断面
（北から）

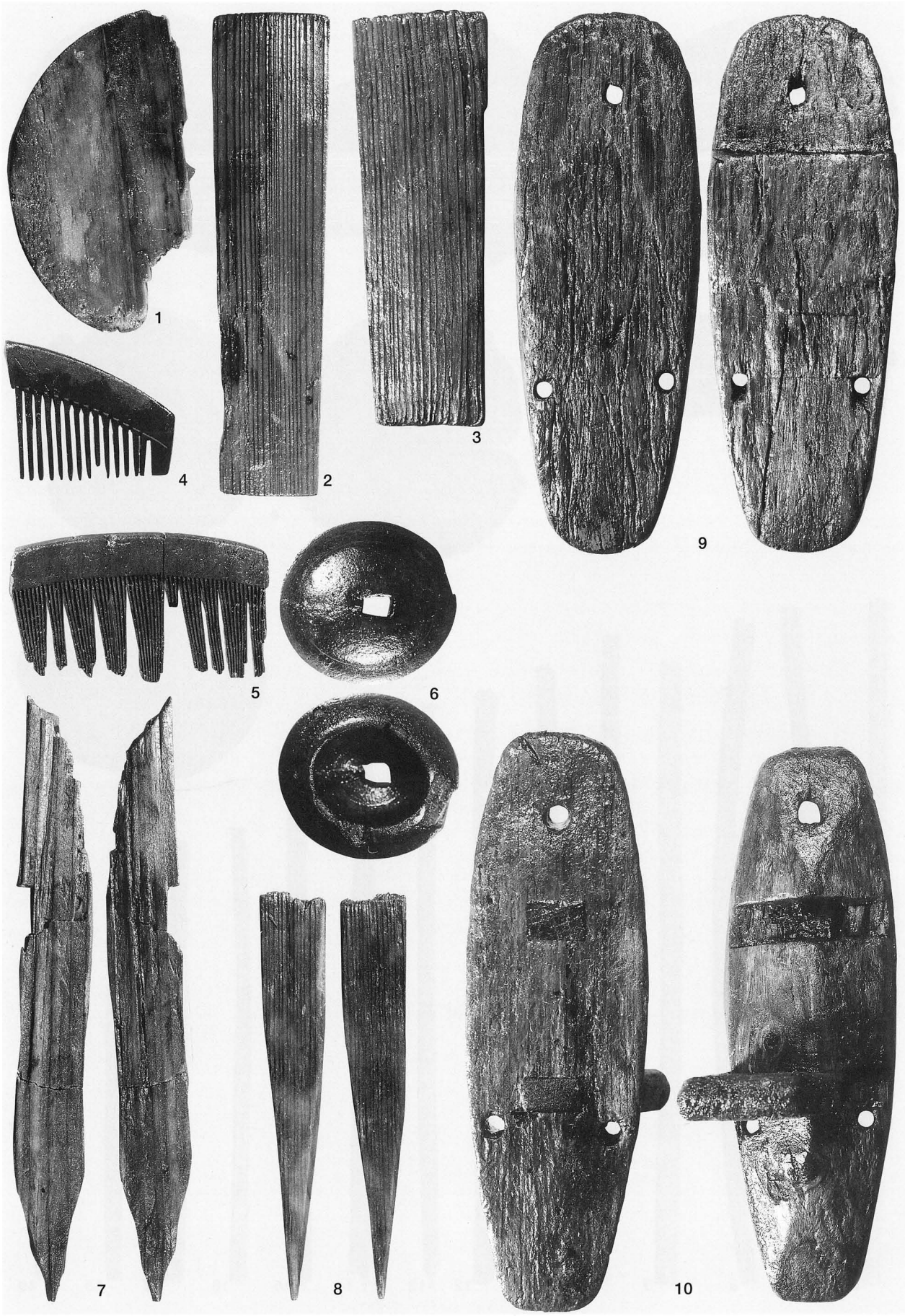
写真図版５　外溝跡

写真図版６　SD2120出土遺物

写真図版７　SX2181出土遺物(1)



写真図版８　SX2181出土遺物(2)



写真図版９　SX2181出土遺物(3)

Ⅲ．第168次発掘調査

１．調査経過

第168次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成17年５月30日付で仙台市太白区郡山３丁目24－８齋藤捷衛氏より、仙台市太白区郡山３丁目１番における住宅建築に伴う発掘届が提出され、住宅の基礎工事によって遺構が破壊されると想定されたため、調査を実施することとした。

調査区は昨年度調査した第158次調査区（拡張部分）の北東部に隣接する。Ⅰ期官衙中枢部の正面と推定される部分にあたるため、中枢部から外側への通路状遺構やそれに伴う遺構が検出される可能性も考えられた。

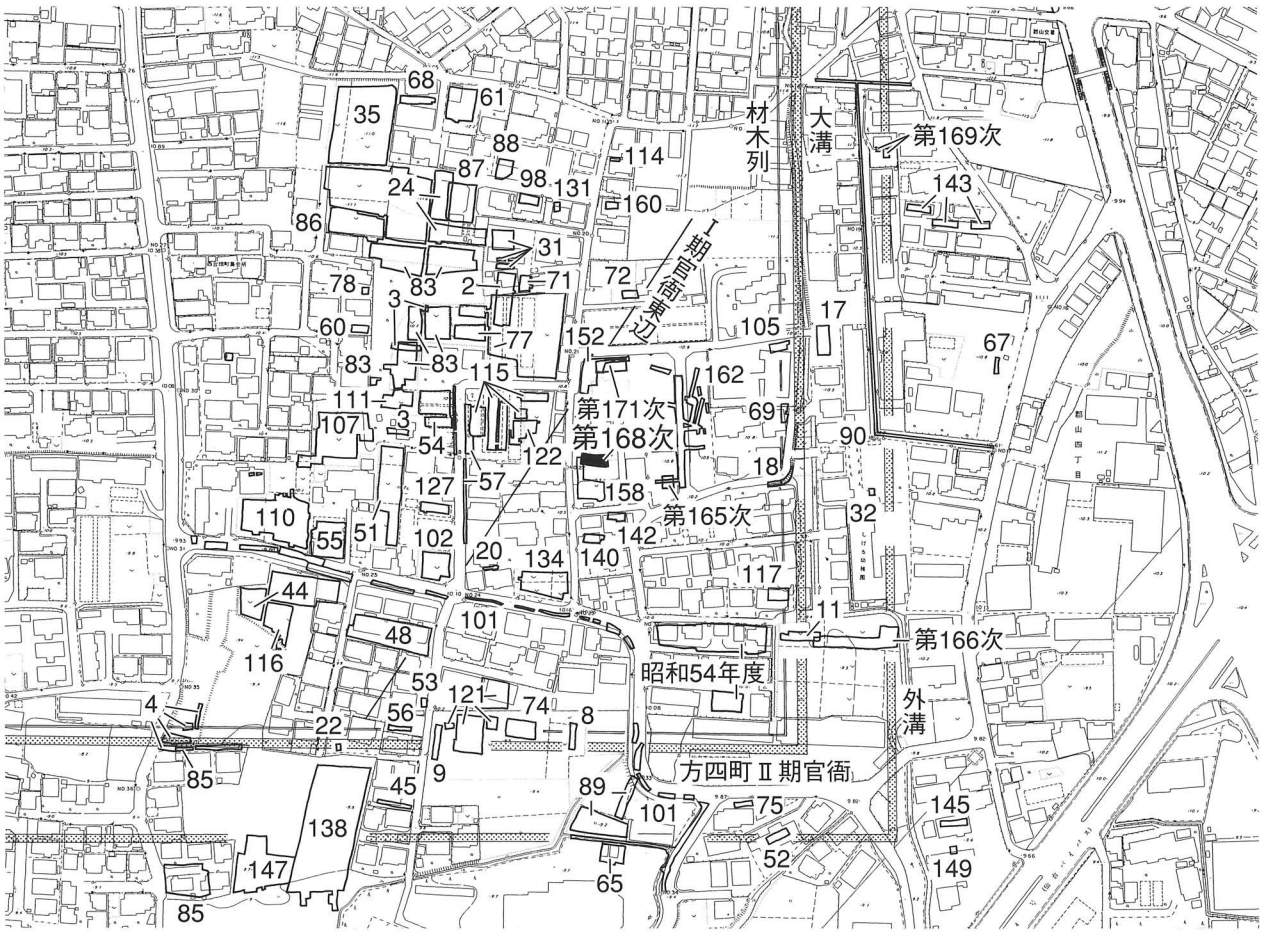
調査は６月20日に表土を除去し、翌日の６月21日～７月11日まで実施した。遺構は溝跡３条とピット19基を検出したが、Ⅰ期官衙に関連すると考えられる遺構を確認することはできなかった。７月14日に埋め戻しと整地作業を行った。

２．調査方法と基本層序

(1) 調査方法

調査区は建物建築予定部分に南北約６ｍ×東西約15ｍの長方形（約90㎡）で設定した。

重機により表土およびⅠ・Ⅱ層を除去し、Ⅲ層上面で人力による遺構検出作業を行った。周辺での調査成果から、下層の調査は実施していない。



第15図　第168次調査区位置図

遺構実測のための基準杭は郡山遺跡に設置された任意の座標軸に合わせて設定し、平面図はこの基準杭を基に簡易遣り方を組んで１／20で作成した。断面図も１／20で作成している。写真は35㎜モノクロフィルムとリバーサルフィルムを一眼レフカメラで撮影し、補助的にデジタルカメラでも撮影した。

(2)　基本層序

Ⅰ～Ⅲ層まで確認したが、Ⅰ層はさらに２層に細分している。

Ⅰ層　現代の畑の耕作土で、２層に細分している。

Ⅰa層　10YR３／３暗褐色シルト質粘土。現耕作土上部。

Ⅰb層　10YR３／３暗褐色粘土質シルト。にぶい黄褐色シルトブロックをわずかに含む。現耕作土下部。

Ⅱ層　10YR２／２黒褐色粘土質シルト。下部ににぶい黄褐色シルトブロックを少量含む。旧表土と思われる。

Ⅲ層　10YR３／３暗褐色粘土質シルト。上部に黒褐色シルトブロックを少量含む。

３．遺構と遺物

今回の調査では溝跡３条とピット19基を確認した。遺構の確認面はⅢ層上面であるが、調査区壁面の観察によるとⅡ層上面から掘り込まれている遺構もみられた。

SD2152溝跡　調査区南半部で検出された東西方向の溝跡である。調査区西端部において第158次調査で検出したSD2152溝跡の延長部であることが確認された。Ⅲ層上面で検出されており、掘り込み面もⅢ層上面である。上幅約140㎝、底面幅約50㎝、深さ約60㎝で、断面は逆台形に近い。底面はほぼ平坦である。方向はＥ－11°－Ｎで、検出した長さは約15.0ｍである。堆積土は４層で砂を主とし、自然堆積層と考えられる。なお第168次調査の東側約40ｍの地点で実施した第162次調査１区(註１)において検出されたSD2176と方向・規模・断面形・堆積土など共通する点がみられるため、延長部分である可能性もある。

遺物は１層から土師器片が３点出土したのみである。

SD2182溝跡に切られている。

SD2182溝跡　調査区南壁から南北方向に延び、北側で途切れている溝跡である。Ⅲ層上面で検出したが、調査区南壁の観察でⅡ層上面から掘り込まれていることが確認された。検出面の上幅約40㎝、底面幅約30㎝、深さ約10㎝で、断面は舟形を呈する。底面はほぼ平坦である。方向はＮ－３°－Ｗで、検出した長さは約2.8ｍである。堆積土は１層で、暗褐色粘土質シルトである。

遺物は出土しなかった。

SD2152溝跡を切っている。

SD2183溝跡　調査区北壁から南北方向に延び、南側で途切れている溝跡である。Ⅲ層上面で検出したが、調査区北壁の観察でⅡ層上面から掘り込まれていることが確認された。検出面の上幅約40㎝、底面幅約30㎝、深さ約10㎝で、断面は舟形を呈する。底面はほぼ平坦である。方向はＮ－12°－Ｗで、検出した長さは約2.5ｍである。堆積土は１層で、暗褐色粘土質シルトである。

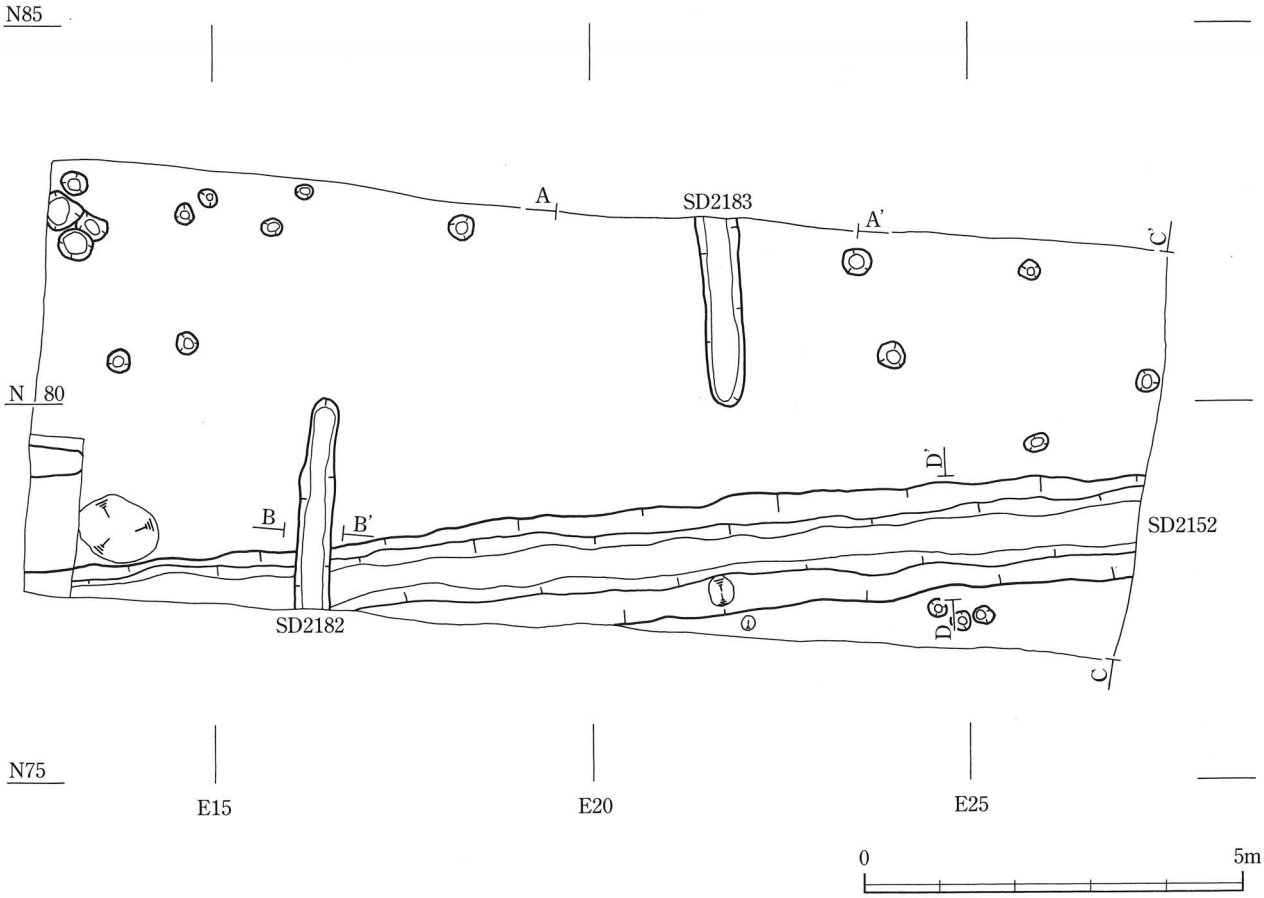
遺物は土師器片が２点出土したのみである。

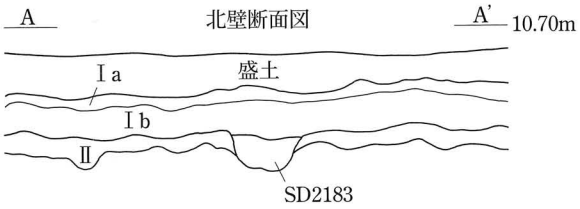
ピット　Ｐ１～19まで検出した。確認面はいずれもⅢ層上面である。柱痕跡が確認されたものはない。いずれも詳細な性格や年代は不明である。

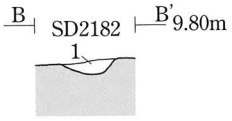
遺物はP12から土師器片が１点出土したのみである。

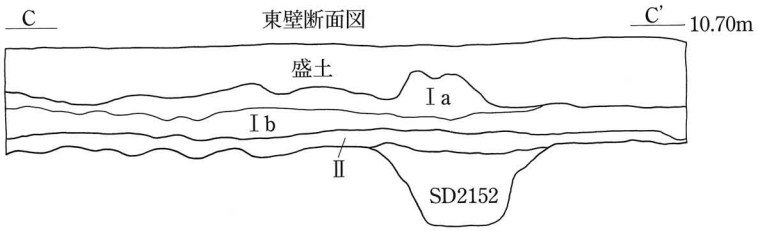
４．まとめ

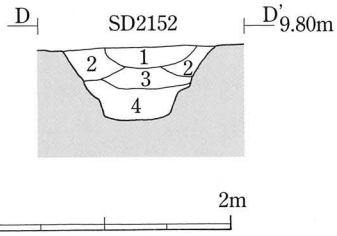
今回確認した遺構は溝跡３条、ピット19基である。











SD2152

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 2／3　黒褐色	粘土	暗褐色シルトブロック微量
2	10YR 2／3　黒褐色	粘土	暗褐色シルトブロック少量
3	10YR 3／4　暗褐色	砂	灰黄褐色シルトブロック少量、酸化鉄斑多量
4	10YR 5／2　灰黄褐色	砂	暗褐色シルトブロック少量、酸化鉄斑多量

SD2182

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3／3　暗褐色	粘土質シルト	下部ににぶい黄褐色シルトブロック少量

SD2183

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR 3／3　暗褐色	粘土質シルト	下部ににぶい黄褐色シルトブロック少量

第16図　第168次調査平面・断面図

これらの遺構からはほとんど遺物が出土しなかったため、遺物から時期を確定することは困難である。しかしSD2182溝跡とSD2183溝跡は掘り込み面がⅡ層上面であることと堆積土が基本層Ⅰb層とほぼ同質であることから、現代の畑耕作に関わる比較的新しい溝跡と推定される。またSD2152溝跡(註２)については、時期を特定できるような遺物が出土していないため時期を限定することは難しいであろう。

調査区はⅠ期官衙中枢部の東辺に設置されたSB1795(註３)のほぼ正面にあたる。そのため中枢部から外側への通路状遺構やそれに伴う遺構が検出される可能性も考えられたが、該当する遺構を確認することはできなかった。

(註１)「第162次発掘調査１区」『郡山遺跡―第162次１区・第164次発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第288集

(註２)「第158次発掘調査」『郡山遺跡25』仙台市文化財調査報告書第284集　2005．3

(註３)「第122次発掘調査」『郡山遺跡ⅩⅨ』仙台市文化財調査報告書第234集　1999．3

１．調査区全景
（東から）

２．調査区東壁断面

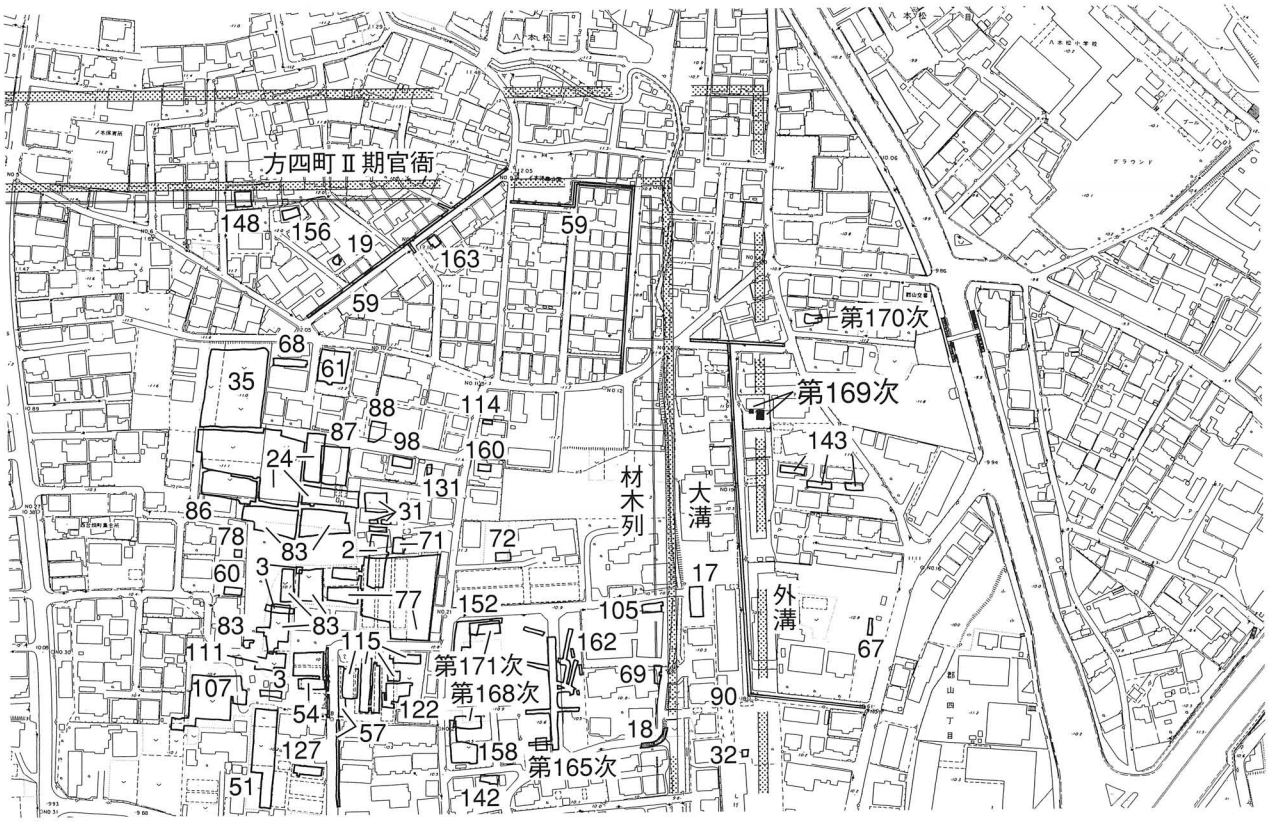
写真図版10　第168次調査区全景、断面

Ⅳ．第169次発掘調査

1．調査経過

第169次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成17年６月20日付で仙台市太白区根岸町12－13－203中村朋之氏より、仙台市太白区郡山４丁目229－12における住宅建築に伴う発掘届が提出された。住宅の基礎工事によって遺構が破壊されると想定されたため、調査を実施することとした。

調査箇所は方四町Ⅱ期官衙の北東側で、大溝の外側約50ｍの位置にあたり、住宅建築予定部分の東部で外溝が検出される可能性があった。そのため調査区は住宅建築予定部分の東端に東西３ｍ×南北５ｍで設定した。７月25日に表土を除去して遺構確認を試みたが、撹乱が現地表下約210㎝にまで及んでいた。調査箇所の西側の状況を確認するため、住宅建築予定部分の西側に東西２ｍ×南北２ｍの調査区を設定して、表土の除去を行ったが同様に撹乱が深い状況であり、当調査箇所では遺構を確認できる土層が既に削平されていると考えられた。したがって遺構は失われていると考えられ、調査を終了して埋め戻しと整地作業を行った。



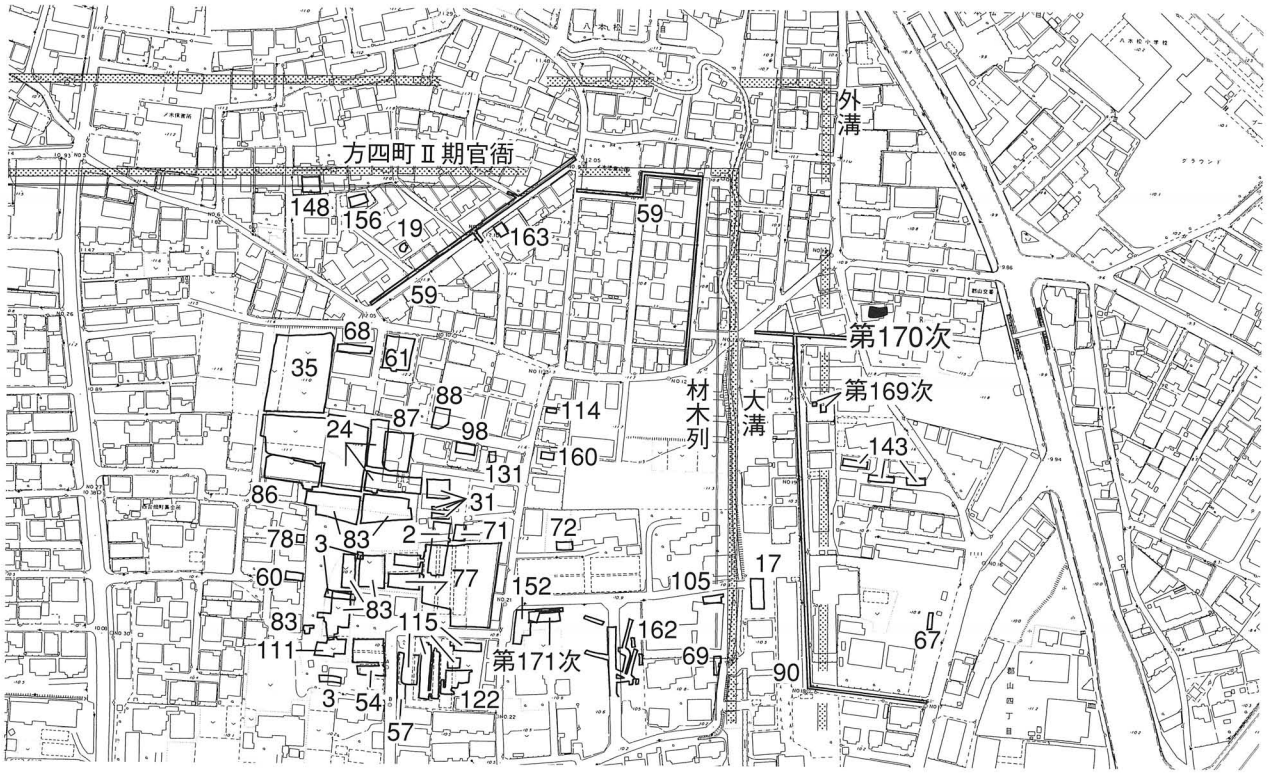
第17図　第169次調査区位置図

東側の調査区北壁

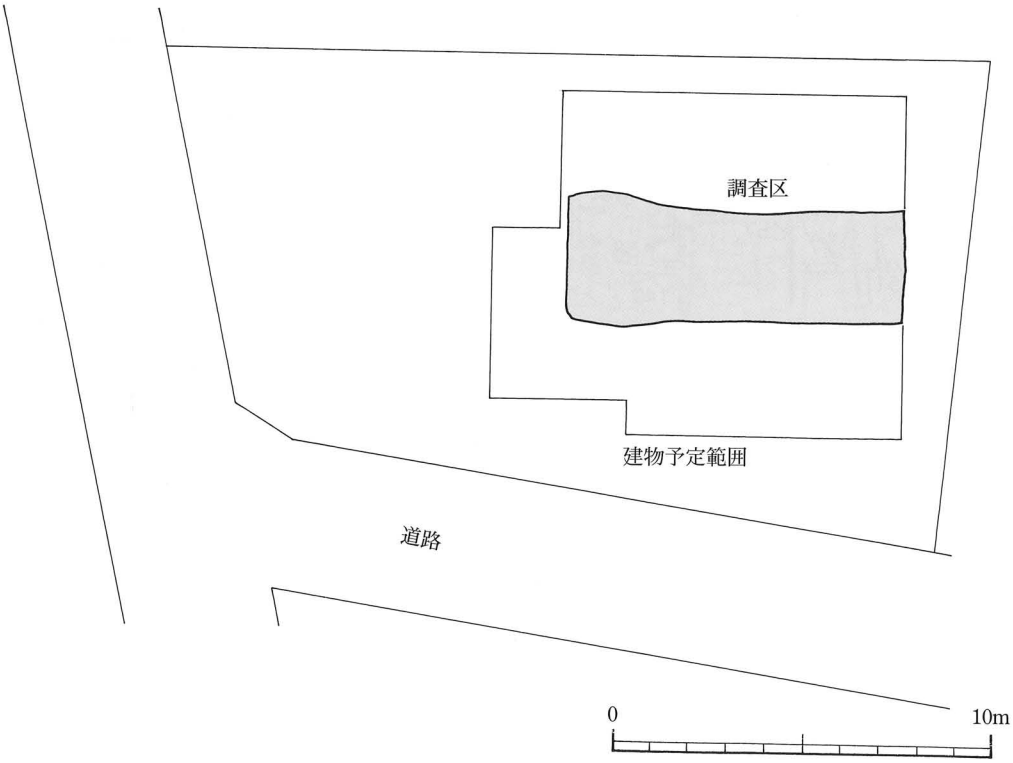
Ⅴ．第170次発掘調査

１．調査経過

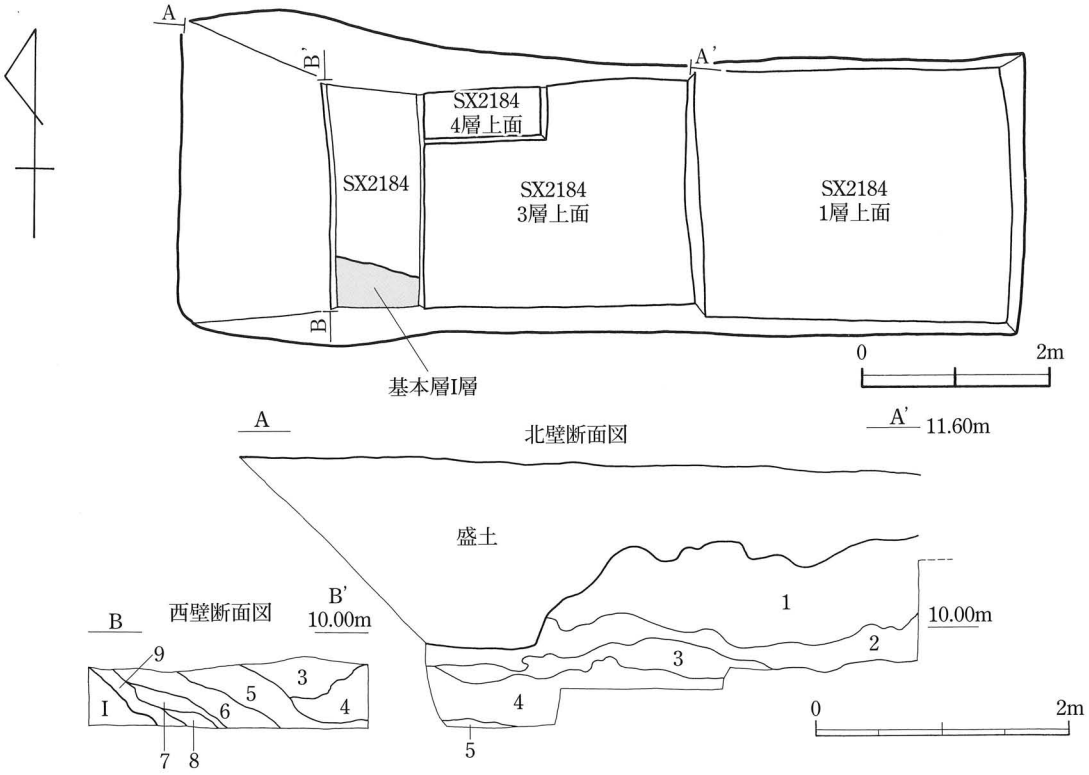
第170次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成17年７月14日付で仙台市太白区郡山４丁目８－９渡辺武弘氏より、仙台市太白区郡山４丁目146-１における住宅建築に伴う発掘届が提出された。住宅の基礎工事によっ



第18図　第170次調査区位置図



第19図　第170次調査区設定図



SX2184

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR４／６　褐色	シルト質粘土	斑状の酸化鉄少量、褐灰色シルトブロック少量
2	10YR３／４　暗褐色	シルト	褐色シルトブロック少量
3	10YR４／４　褐色	シルト	
4	10YR５／２　灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑・マンガン斑少量
5	10YR４／４　褐色	細砂	
6	10YR４／４　褐色	細砂	黒褐色シルト粒少量
7	10YR４／３　にぶい黄褐色	細砂	黒褐色シルト粒少量
8	10YR４／３　にぶい黄褐色	細砂	
9	10YR３／２　黒褐色	シルト	にぶい黄褐色シルト粒少量

第20図　第170次調査平面・断面図

て遺構が破壊されると想定されたため、調査を実施することとした。

調査箇所は方四町Ⅱ期官衙の北東側で、大溝の外側約75ｍの位置にあたる。

調査は８月１日に表土を除去し、８月３日まで実施した。遺構は性格不明遺構１基を検出したが、官衙に関連する遺構を確認することはできなかった。８月３日に調査を終了して埋め戻しと整地作業を行った。

２．調査の方法と基本層序

(1)　調査方法

調査区は建物建築予定部分に南北約３ｍ×東西約９ｍの長方形(約27㎡)で設定した。

重機により表土を除去したところ、表土直下でこれまで遺構が検出されていた基本層が検出されなかったため、調査区西部をさらに掘り下げた。その結果、調査区南西部において現地表下約210㎝で遺構の掘り込みを示す基本層を検出し、調査区全体が東西方向の落ち込み(SX2184)の中に位置していることが確認された。敷地が狭く土を置く場所を確保できなかったため、また安全確保の問題から、これ以上の調査区拡張および追跡調査は実施しなかった。

遺構実測のための基準杭は調査区の方向に合わせて設定した。平面図は基準杭を基に簡易遣り方を組んで１／20

で作成した。断面図も１／20で作成している。写真はデジタルカメラでのみ撮影した。

(2)　基本層序

確認された基本層はⅠ層のみであるが、本来はこの上面が通常の遺構検出面である。表土層や、その直下で認められる旧耕作土は失われていると考えられる。

Ⅰ層　10YR４／３にぶい黄褐色粘土。

３．遺構と遺物

今回の調査では性格不明遺構１基を確認した。

SX2184性格不明遺構　調査区のほぼ全域が含まれていたものと考えられる。調査区西壁の断面から堆積土が南から北にかけて傾斜していることが確認されており、遺構の正確な規模などは不明であるが、東西方向の溝跡(堀跡)である可能性も考えられる。堆積土は９層に分けられた。

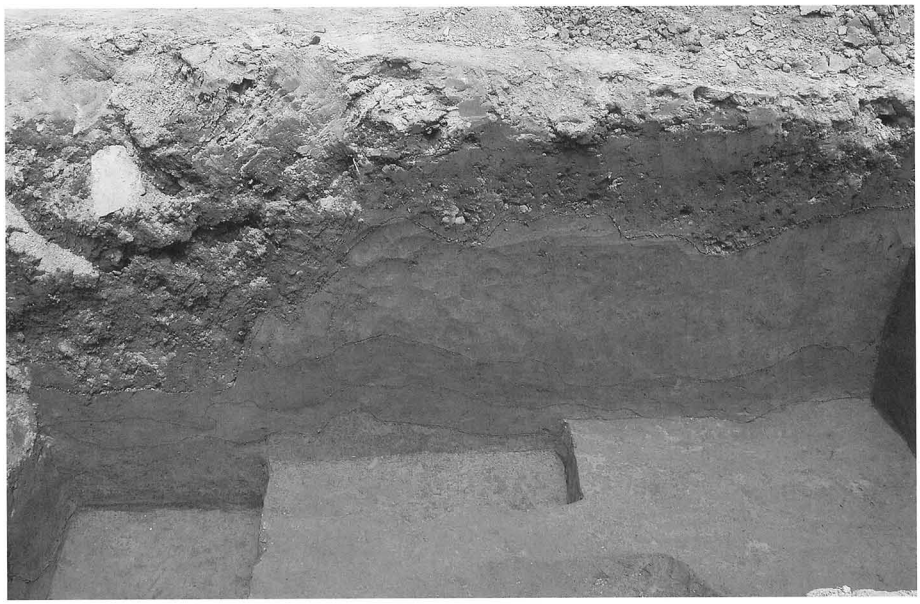
遺物は土師器片が４点出土したのみである。

４．まとめ

今回確認した遺構は性格不明遺構１基である。この遺構からほとんど遺物が出土しなかったため、遺物から時期を確定することはできない。規模などから郡山遺跡東部に隣接する北目城跡に関連する堀跡である可能性も考えられる。具体的な性格などについては今後の周辺部における調査を待って検討していきたい。

調査風景

1．調査区全景（西から）



2．調査区北壁断面
（西半部）

3．調査区西壁断面
（下部）

写真図版11　第170次調査区全景、断面

Ⅵ．第171次発掘調査

１．調査経過

第171次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成17年12月６日付で仙台市太白区諏訪町12－71オークエステート203齋藤長昭氏より、仙台市太白区郡山３丁目２－１の一部における住宅建築に伴う発掘届が提出された。住宅の基礎工事によって遺構が破壊されると想定されたため、調査を実施することとした。

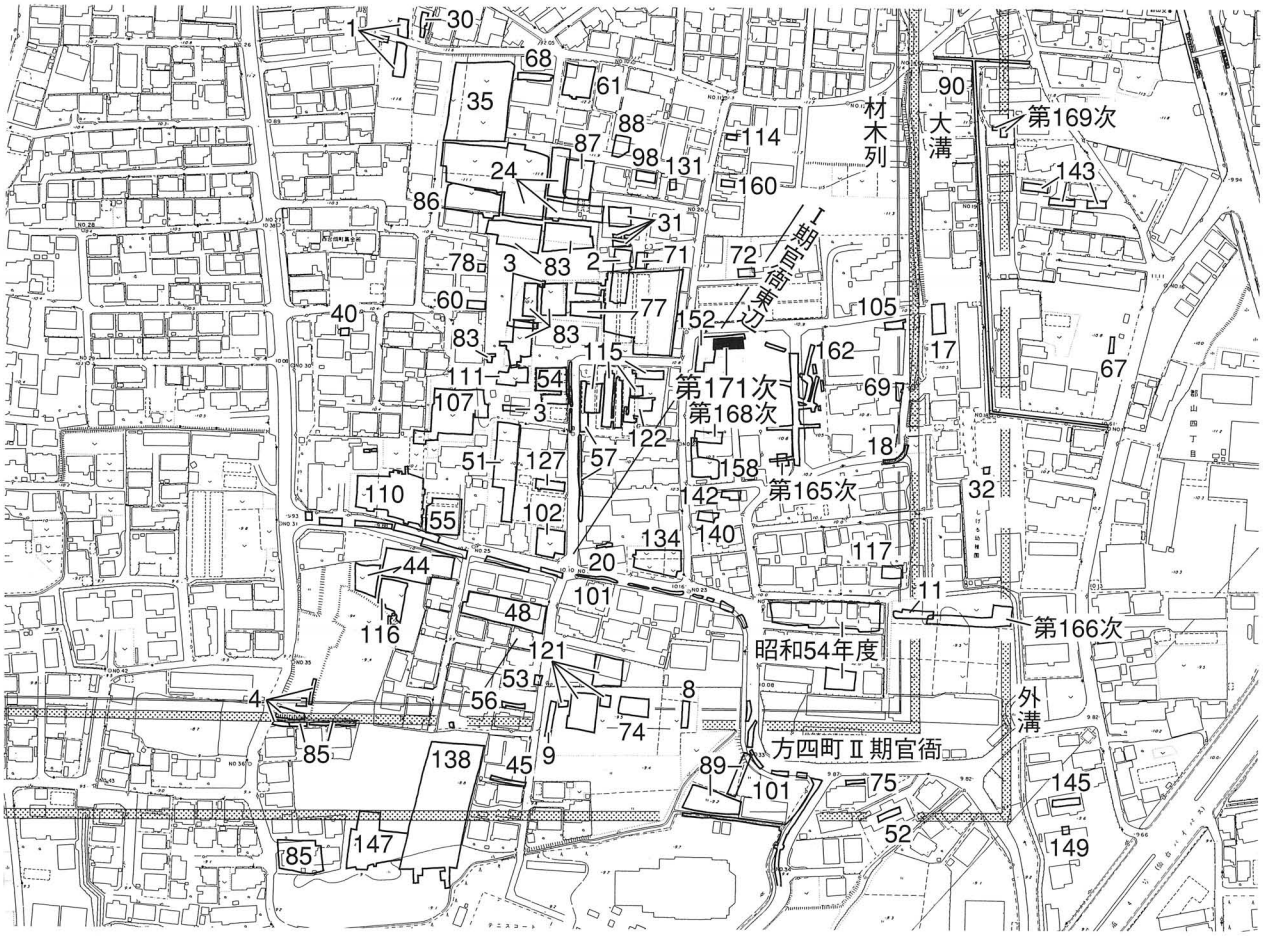
この付近は板塀や一本柱列によって90ｍ×120ｍの範囲に区画されたⅠ期官衙中枢部の前面（東面）に位置している。またこの地点では平成15年に第152次調査（範囲確認調査）が行われており、材木列２列、一本柱列１列、溝跡８条、性格不明遺構１基、ピット数基などが検出されている。

今回の第171次調査は、第152次調査で検出された材木列や一本柱列、溝跡などの追加調査と第152次調査では調査されなかった箇所（住宅建築予定部分の南東部）での発掘調査を目的として実施した。平成18年１月10日に表土を除去し、翌１月11日から遺構の検出作業を開始した。１月25日に調査を終了し、１月27日に埋め戻しと整地作業を行った。なお埋め戻しの際に調査区南東部壁沿いで検出されたSD2125溝跡の上幅を確認するため一部調査区を拡張した。拡張区での遺構の掘り下げは行わなかった。

２．調査方法と基本層序

(1)　調査方法

調査区は建物建築予定部分に東西17ｍ×南北６ｍの長方形（約102㎡）で設定し、埋め戻しの際に南東部の南側を



第21図　第171次調査区位置図

東西1.5m×南北3m(約4.5㎡)の範囲で拡張した。拡張後の面積は約106.5㎡である。

重機により表土およびⅠ～Ⅲ層を除去し、Ⅳ層上面で遺構検出作業を行った。周辺での調査成果から、下層に遺構は存在していないので、これより下層を対象とした調査は実施していない。

遺構実測のための基準杭は調査区の方向に合わせて設定し、後日この座標値を測量する方法をとった。平面図はこの基準杭を基に簡易遣り方を組んで1／20で作成した。断面図も1／20で作成している。写真は35mmモノクロフィルムとリバーサルフィルムを一眼レフカメラで撮影し、補助的にデジタルカメラでも撮影した。

(2) 基本層序

Ⅰ～Ⅳ層まで確認したが、それぞれさらに細分している。

Ⅰ層　現代の畑耕作土および盛土からなる。

Ⅰa層　10YR3／4暗褐色シルト質砂。現畑耕作土。

Ⅰb層　10YR4／3にぶい黄褐色砂。山砂による盛土。

Ⅱ層　盛土が行われる前の古い耕作土で7層に細分される。

Ⅱa層　10YR4／2灰黄褐色シルト質粘土。酸化鉄を含む。

Ⅱb層　10YR3／3暗褐色シルト。

Ⅱc層　10YR3／3暗褐色シルト質粘土。黒褐色シルトを多量に、にぶい黄褐色粘土を少量含む。

Ⅱd層　10YR3／4暗褐色シルト。

Ⅱe層　10YR3／3暗褐色シルト質粘土。黒褐色シルト・にぶい黄褐色粘土を少量含む。

Ⅱe′層　10YR3／3暗褐色シルト質粘土。にぶい黄褐色粘土を微量含む。Ⅱe層下部。調査区南部にのみ見られる。

Ⅱf層　10YR5／6黄褐色シルト質粘土。暗褐色粘土を少量含む。

Ⅱg層　10YR5／6黄褐色シルト質粘土。暗褐色シルトを少量含む。

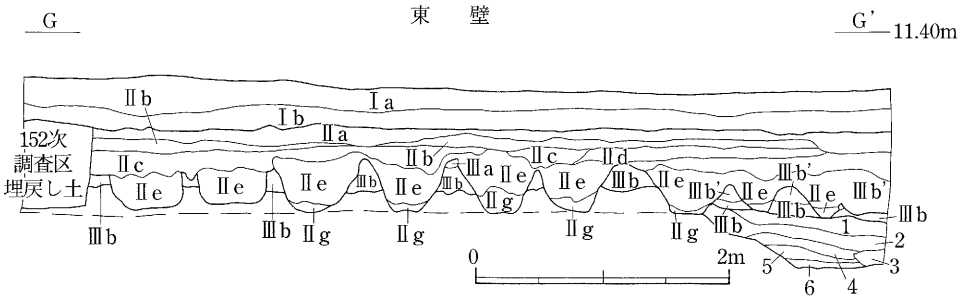
Ⅲ層　耕作により下層の基本層や遺構の堆積土が攪拌したものであり、3層に細分される。

Ⅲa層　10YR2／2黒褐色シルト。

Ⅲb層　10YR3／3暗褐色シルト質粘土。にぶい黄褐色粘土を少量含む。

Ⅲb′層　10YR3／3暗褐色シルト質粘土。にぶい黄褐色粘土を微量含む。Ⅲb層上部。調査区南部にのみ見られる。

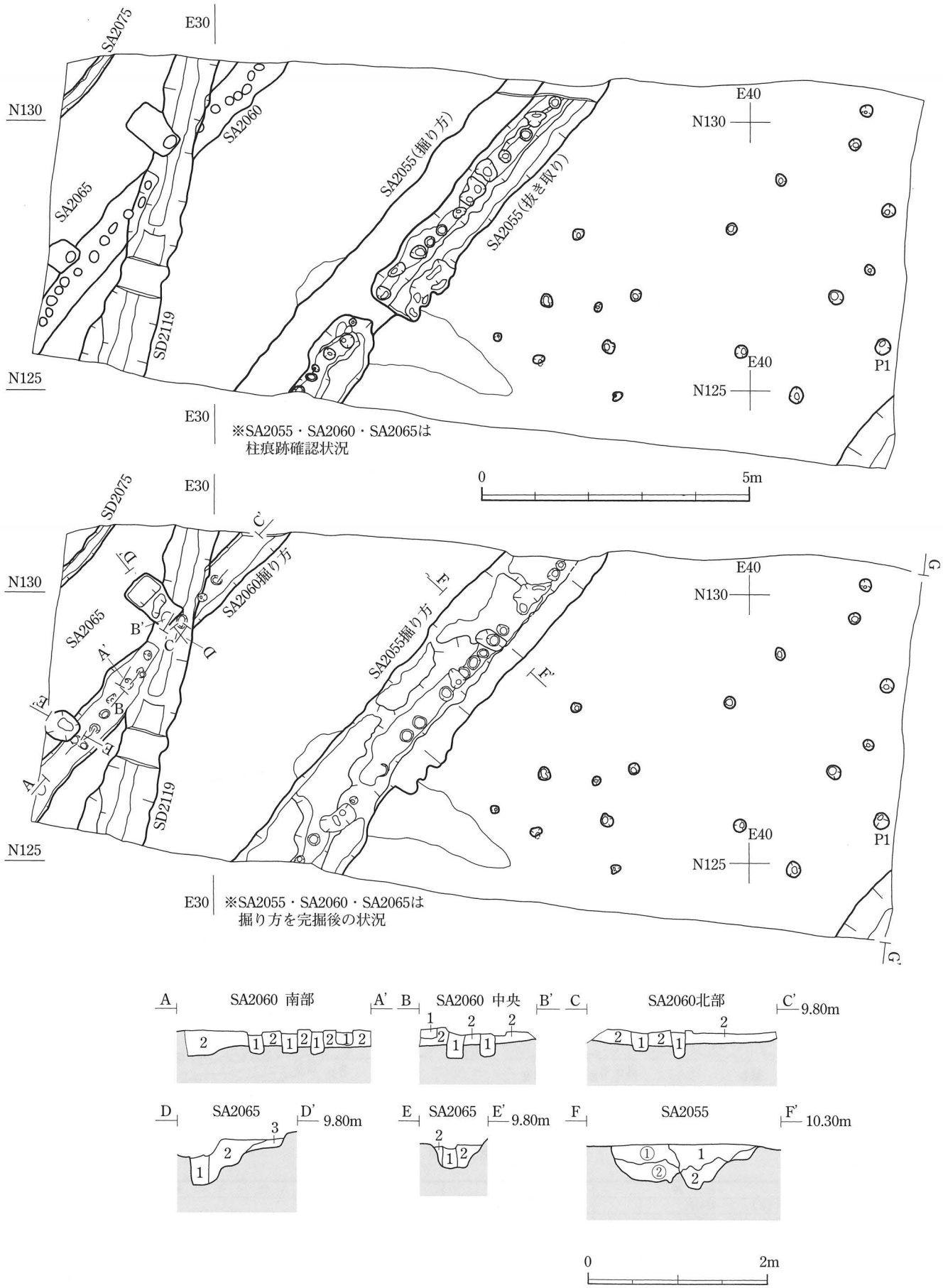
Ⅳ層　10YR4／3にぶい黄褐色シルト質粘土。今調査の遺構確認面である。



第22図　調査区断面図

SD2125

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR2／3　黒褐色	粘土質シルト	
2	10YR4／2　灰黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒微量
3	10YR4／2　灰黄褐色	粘土質シルト	褐色シルト少量、マンガン粒微量
4	10YR4／3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色シルト少量、マンガン粒微量
5	10YR4／4　褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルト微量、マンガン粒微量
6	10YR3／4　暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒微量



第23図　第171次調査平面・断面図

SA2055

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR4／4　褐色 10YR4／2　灰黄褐色	シルト 粘土質シルト　ブロックの混合	黒褐色粘土質シルトブロック微量、抜き取りの埋土
2	10YR4／4　褐色 10YR3／2　黒褐色 10YR4／2　灰黄褐色	粘土質シルト 粘土質シルト シルト　ブロックの混合	抜き取りの埋土
①	10YR4／4　褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルトブロック微量、掘り方埋土
②	10YR4／4　褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルトブロック多量、掘り方埋土

SA2060

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR4／2　灰黄褐色	粘土	褐色シルト質粘土粒微量、柱痕跡
2	2.5Y4／3　オリーブ褐色	シルト質粘土	暗灰黄色シルト質粘土ブロック多量、掘り方埋土

SA2065（E－E'）

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	2.5Y3／2　黒褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土質シルト粒微量、柱痕跡
2	10YR5／4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロック多量、掘り方埋土

SA2065（D－D'）

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR3／2　黒褐色	粘土	褐色粘土質シルトブロック少量、黒褐色粘土ブロック微量、柱痕跡
2	10YR5／4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロック多量、掘り方埋土
3	10YR5／4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロック少量、掘り方埋土

3．遺構と遺物

今回の調査では材木列２列と一本柱列１列、溝跡３条、ピット18基を確認した。遺構の確認面はすべてⅣ層上面である。

SA2055材木列　調査区中央部やや東寄りを北東から南西に縦断する材木列である。第152次調査でも長さ約1.9ｍを検出したが、今回の調査では南側の延長部分を検出した。

上幅約100㎝の溝状の抜き取り底面において、直径15～40㎝程の柱の抜き取り痕跡が確認された。溝状の抜き取りおよび柱の抜き取り痕跡は、一部途切れる箇所があるもののほぼ連続して確認された。この溝状の抜き取りは材木列掘り方の東側に寄っており、深さは30～40㎝程で、材木列掘り方よりも深く抜き取られた箇所もある。

材木列の掘り方は上幅約120㎝、深さは30～60㎝程である。東壁は直立気味に、西壁は緩やかに立ち上がる。方向はＮ－34°－Ｅで、確認した長さは約7.5ｍである。抜き取りが掘り方底面まで及んでいない箇所では、掘り方の底面近くの東壁沿いに並ぶ状態で柱痕跡が確認されたが、抜き取りが底面まで及んでいる箇所では、柱痕跡は残存していない。確認された柱痕跡の直径は15～25㎝程である。

堆積土は掘り方埋土、抜き取りともに２層である。

遺物は抜き取りからハケメ調整の土師器甕の小片１点が出土している。

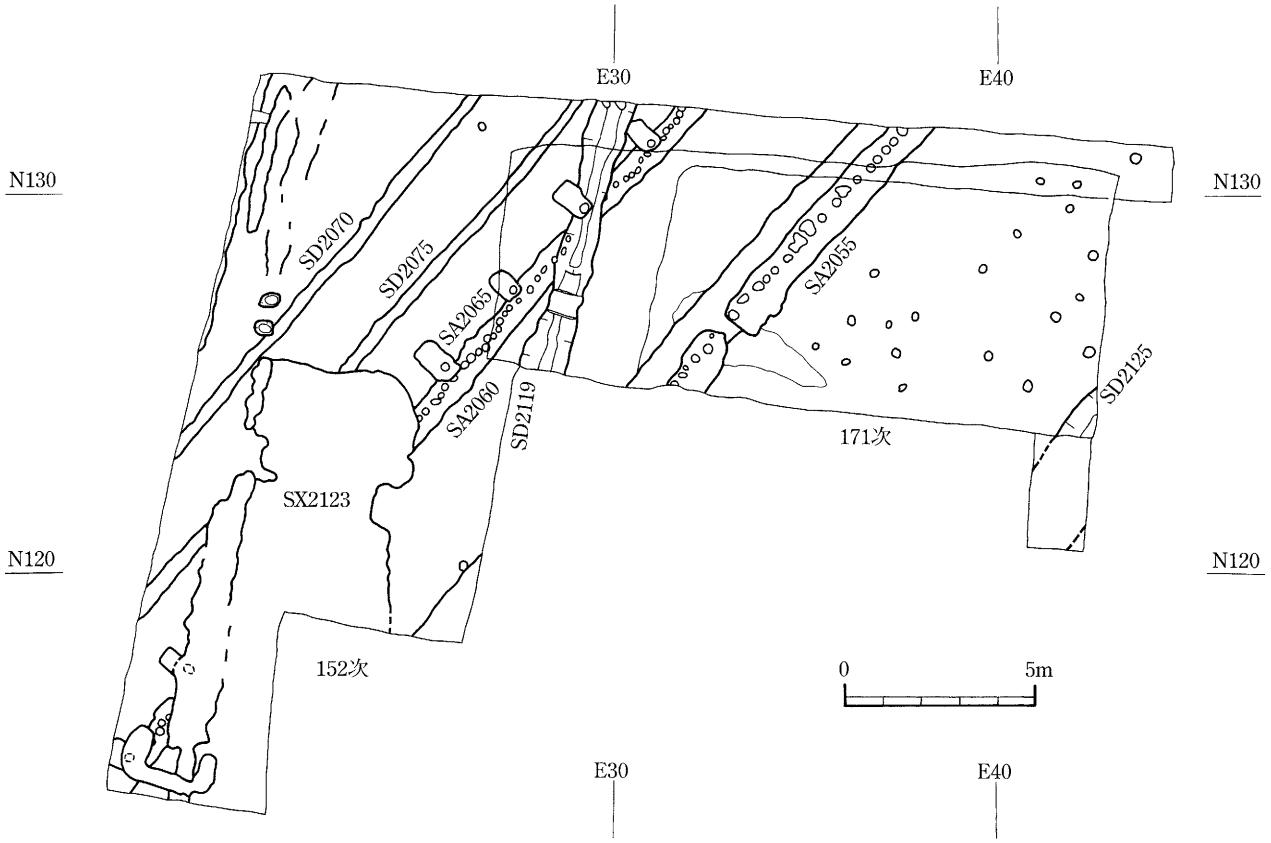
SA2060材木列　調査区中央部やや西寄りを北東から南西に縦断する材木列である。第152次調査では柱痕跡の検出までであったため、今回の調査ではその下層の掘り方底面までの調査を行った。上幅50～60㎝程の掘り方とそのほぼ中央に直径約20㎝の柱痕跡が連続して確認された。柱痕跡は掘り方底面よりも５～15㎝程下にくい込んでいる。材木列の方向はＮ－34°－Ｅで、確認した長さは約6.4ｍである。掘り方の深さは20～30㎝程である。

遺物は出土していない。

SA2065一本柱列、SD2119溝跡に切られている。

SA2065一本柱列　調査区中央部やや西寄りを北東から南西に縦断する一本柱列である。今回の調査区内では１間分の柱穴を確認した。第152次調査では柱痕跡の検出までであったため、今回の調査ではその下層の掘り方底面までの調査を行った。北側の柱穴は掘り方が一辺約60×約100㎝の長方形で、西から段掘り状に掘られ、最深部で約50㎝の深さがある。南側の柱穴は掘り方が一辺約60×約50㎝の長方形で、断面はＵ字形を呈し、最深部の深さは約30㎝である。方向はＮ－31°－Ｅで、柱間寸法は約280㎝である。堆積土は北側の柱穴が３層、南側の柱穴が２層である。

ともに遺物は出土していない。



第24図　第152次・171次調査全体図

SA2060材木列を切り、SD2119溝跡に切られている。

SD2075溝跡　調査区西部で確認された北東から南西方向の溝跡である。第152次調査で精査が終了している箇所に相当するため、今回は特に再精査は行わなかった。

SD2119溝跡　調査区中央部やや西寄りを北から南に縦断する溝跡である。第152次調査で精査が終了している箇所に相当するため、今回は特に再精査は行わなかった。

SA2060材木列、SA2065一本柱列を切っている。

SD2125溝跡　調査区南東部の壁沿いで検出された溝跡である。第152次調査では検出されておらず、今回の調査で新たに検出された遺構である。Ⅳ層上面で確認されており、調査区東壁の観察では掘り込み面もⅣ層上面と考えられる。上幅約230㎝、底面幅は不明、深さ約45㎝で、断面は逆台形を呈すると思われる。壁は緩やかに立ち上がる。検出した長さが約３ｍと短いため方向は確定しがたいが、概ねSA2055に平行する。堆積土は６層で、堆積土の最上部に基本層Ⅲ層が流入している。

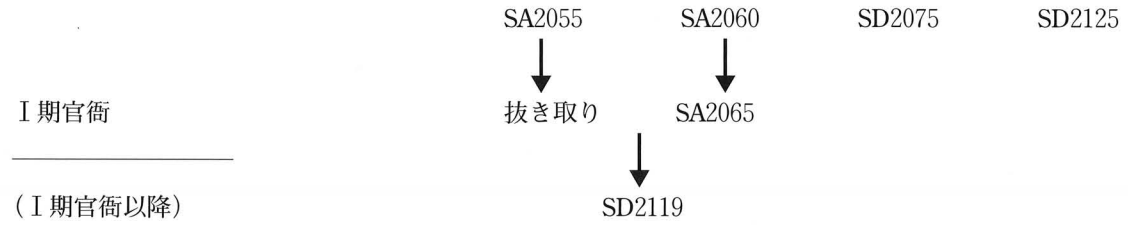
遺物は出土していない。

ピット　Ｐ１～18まで検出した。確認面はいずれもⅣ層上面である。柱痕跡が確認されたものはない。いずれも詳細な性格や年代は不明である。

遺物はＰ１から土師器片が１点出土したのみである。

４．まとめ

今回確認した遺構は材木列２列と一本柱列１列、溝跡３条、ピット18基である。確認された遺構は周辺の調査成果とあわせて考えれば以下のようになる。なお並列関係は必ずしも同時性を示すものではない。



確認された遺構はⅠ期官衙とそれ以降のものである。SD2119溝跡については方向や形態からⅡ期官衙の遺構と捉えることもできるが、第152次調査で出土した遺物からは官衙より新しい時期の溝跡であると考えられる。

Ⅰ期官衙に含まれる遺構の新旧については、SA2060材木列とSA2065一本柱列を除いて重複がないため明らかにすることは難しい。ただSA2055材木列とSA2060材木列の位置関係からは同時に存在することは考えがたく、新旧があると見られる。なおSA2055材木列に関して、一部溝状の抜き取りおよび柱痕跡が途切れている箇所が見られるが、材木列が途切れていたと考えるよりは、柱が浅くて抜き取りを深く掘る必要がなかったものと考えられる。SA2065一本柱列についてはSA2060材木列を切っているためⅠ期官衙内の別時期の遺構とも考えられるが、SA2060材木列の存続期間中における補修などの可能性も考えられる。SD2075に関しては、Ⅰ期官衙内の道路状遺構を形成していた可能性が考えられている(註１)。またSD2125溝跡は、検出した長さが短いもののSA2055材木列とほぼ平行し、心々で約9.5ｍ離れている。同じ東辺で約300ｍ南の第138次調査区においても、材木列と平行する溝跡が存在することから、Ⅰ期官衙の東辺は材木列と溝により区画される可能性も出てきた(註２)。

(註１)「第152次発掘調査」『郡山遺跡24』仙台市文化財調査報告書第269集　2004．3

(註２)「第138次発掘調査」『郡山遺跡22』仙台市文化財調査報告書第258集　2002．3

出土遺構・層位	土師器	陶器	磁器
SA2055	1		
P1	1		
Ⅰ層		3	9

表５　第171次調査遺物集計表

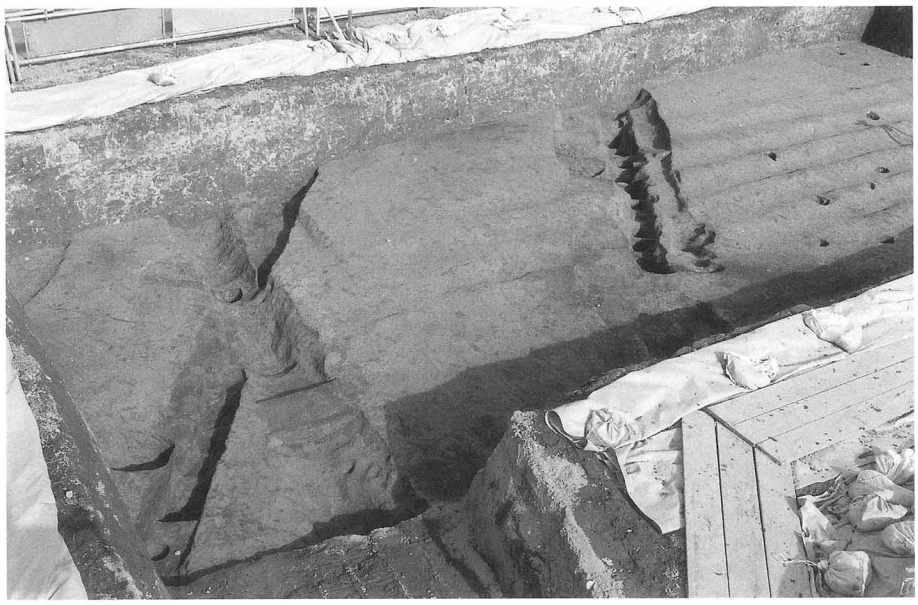
材木列調査風景

1．SA2055・2060材木列、SA2065一本柱列確認状況（東から）

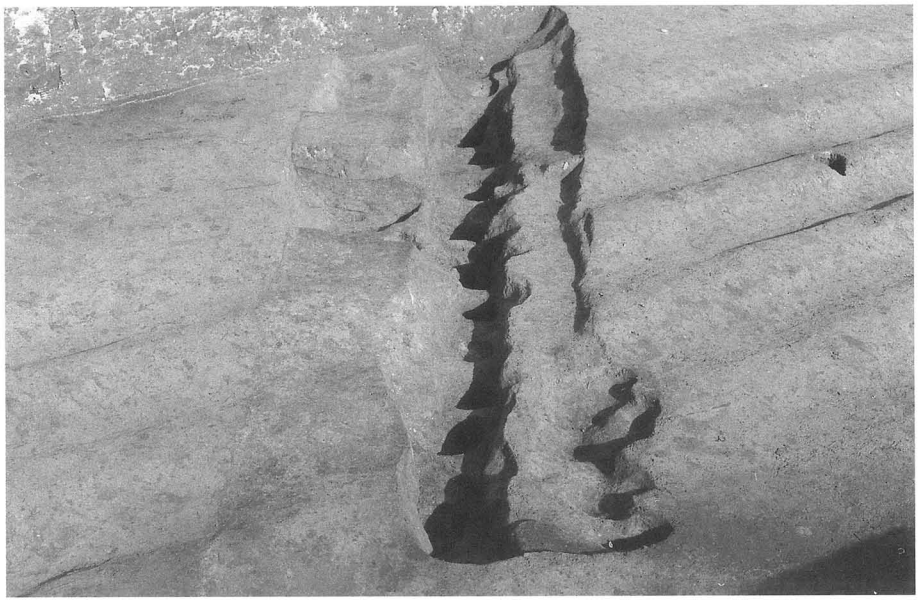
2．SA2055・2060材木列、SA2065一本柱列確認状況（南西から）

3．SA2055材木列断面（南西から）

写真図版12　材木列(1)



1．SA2055・2060材木列、
SA2065一本柱列全景
（南西から、SA2055は抜き取り完掘状況）



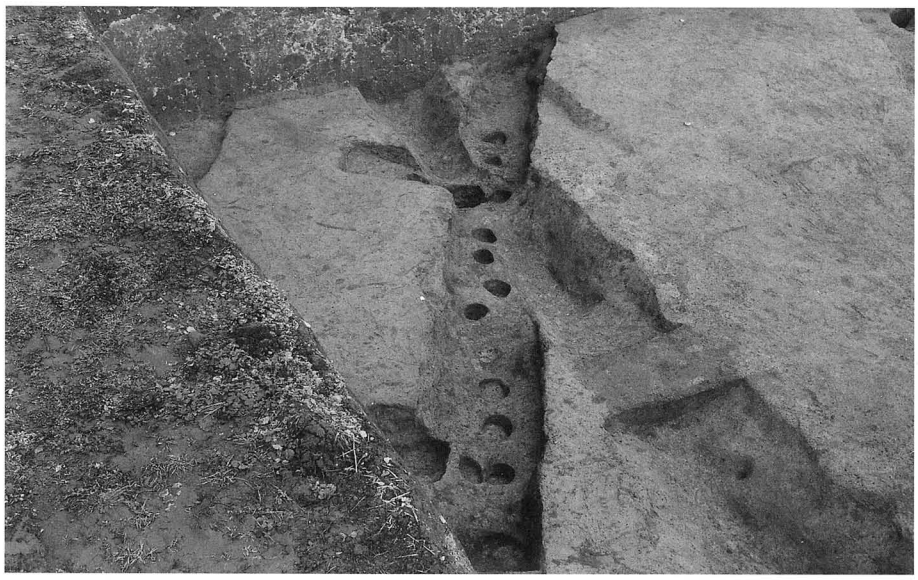
2．SA2055材木列抜き取り
完掘状況（南西から）

3．SA2055材木列抜き取り底面（中央部）

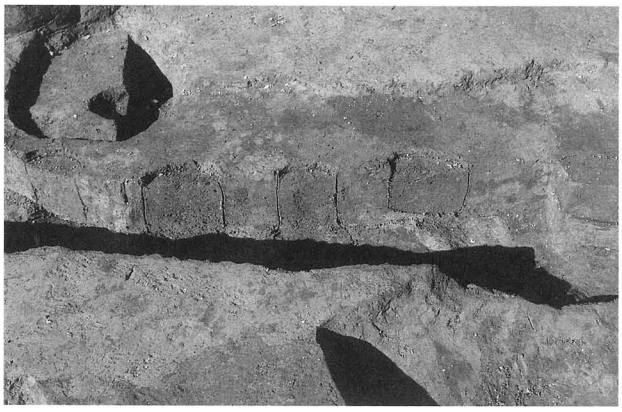
4．SA2055材木列抜き取り底面（南部）

写真図版13　材木列(2)

1．SA2055材木列完掘状況（南西から）



2．SA2060材木列完掘状況（南西から）

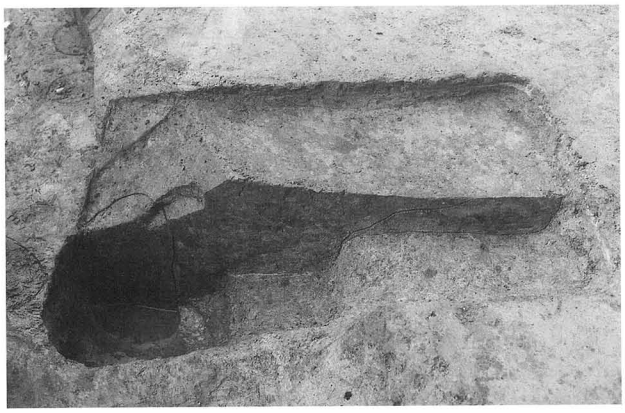


3．SA2060材木列断面（南東から、南部）

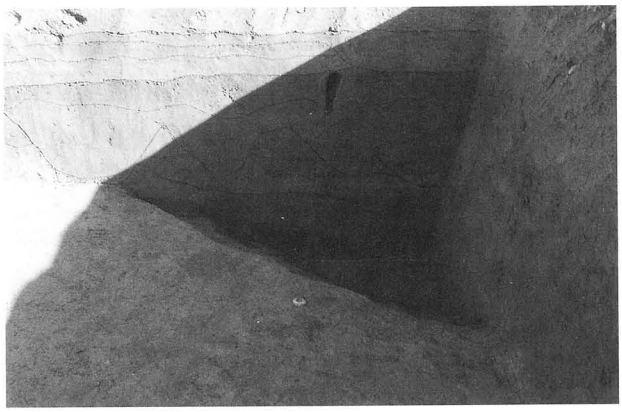
4．SA2060材木列断面（南東から、中央部）

写真図版14　材木列(3)

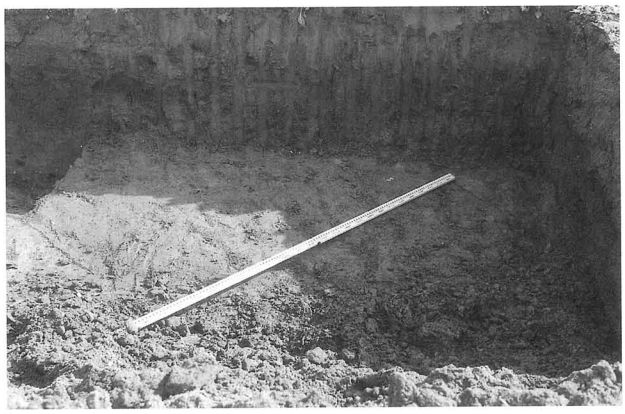
1．SA2065一本柱列断面（南側柱穴、北東から）



1．SA2065一本柱列断面（北側柱穴、北東から）



3．SA2025溝跡完掘状況（西から）



4．南東拡張区SD2125溝跡確認状況（拡張区、西から）

5．調査区東壁断面

写真図版15　一本柱列、溝跡他

第３章　陸奥国分尼寺跡ほか

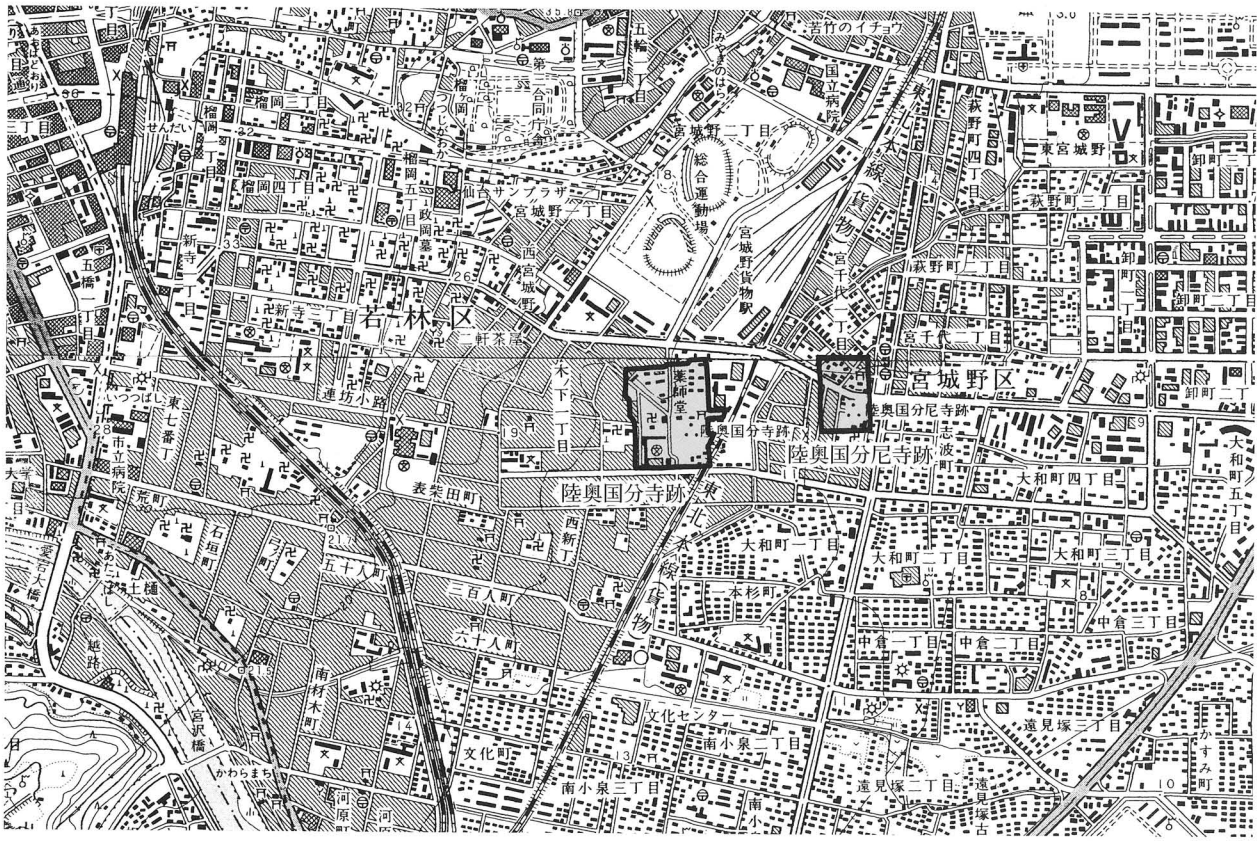
Ⅰ．陸奥国分尼寺跡第11次調査

１．調査経過

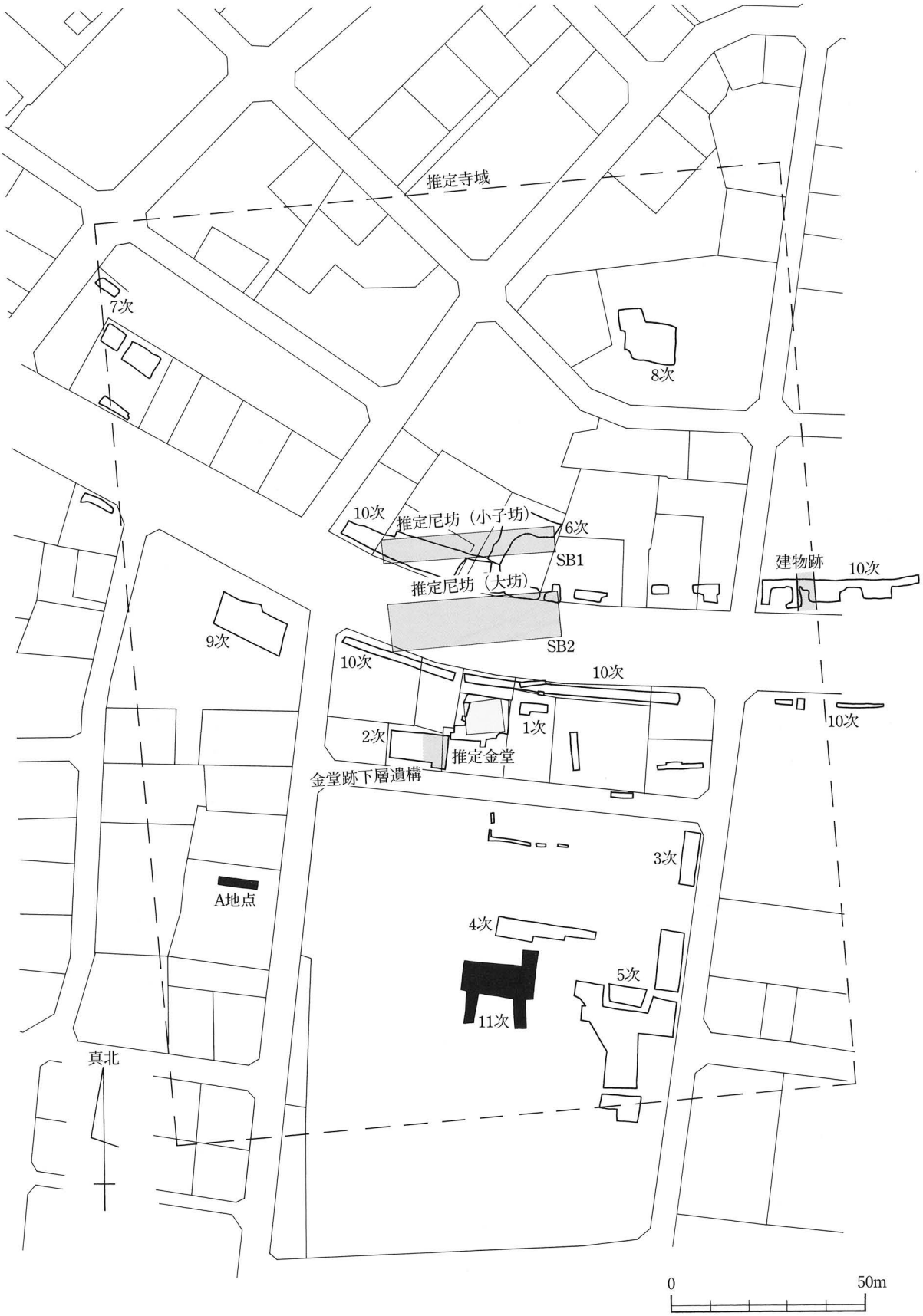
陸奥国分尼寺跡は若林区白萩町と宮城野区宮千代に所在する。昭和39年から平成16年まで第１次～10次にわたる発掘調査が行われており、伽藍配置は未確定ながらも、寺域の中心部で確認された建物跡は大きく２時期に分けられることが明らかとなってきた。９世紀後半頃と考えられているⅡ期は金堂跡と推定されている小規模な礎石建物跡があるのみで詳細は不明であるが、創建期段階とされるⅠ期は推定寺域中軸線上のやや北寄りに長大な掘立柱建物跡２棟があり（註１）、その南側に位置するⅡ期の金堂の下層にも講堂跡の可能性がある建物跡が確認されている。

現在の曹洞宗国分尼寺は、陸奥国分尼寺跡推定寺域の中央から南寄りにかけて位置しているが、その本堂は陸奥国分尼寺跡の推定中軸線上に位置し、第Ⅰ期の遺構配置からすると、講堂の南側にある金堂跡かさらに南側の中門跡と重複する位置関係が考えられた。この本堂の建替え工事が平成18年度中に予定されていた。本堂の建築工事は遺構面に影響を与えない工法を採用するが、陸奥国分尼寺跡に係わる重要な遺構が存在する可能性があるため、現本堂の解体終了後に陸奥国分尼寺跡の範囲確認調査を実施することとした。

調査は８月22日に表土を除去し、８月25日から遺構確認作業を開始した。遺構の精査は９月１日から開始したが、古代の陸奥国分尼寺跡に係わる遺構は確認できなかった。なお敷地南半の状況を確認するため９月13日に調査区南東部と南西部を南側に拡張した。遺構の精査を終了したのは９月22日で、26日に実測基準点の測量を実施し、28日に埋め戻しと現状復旧を行ってすべての作業を終了した。



第25図　陸奥国分寺跡・国分尼寺跡位置図



第26図　陸奥国分尼寺跡全体図

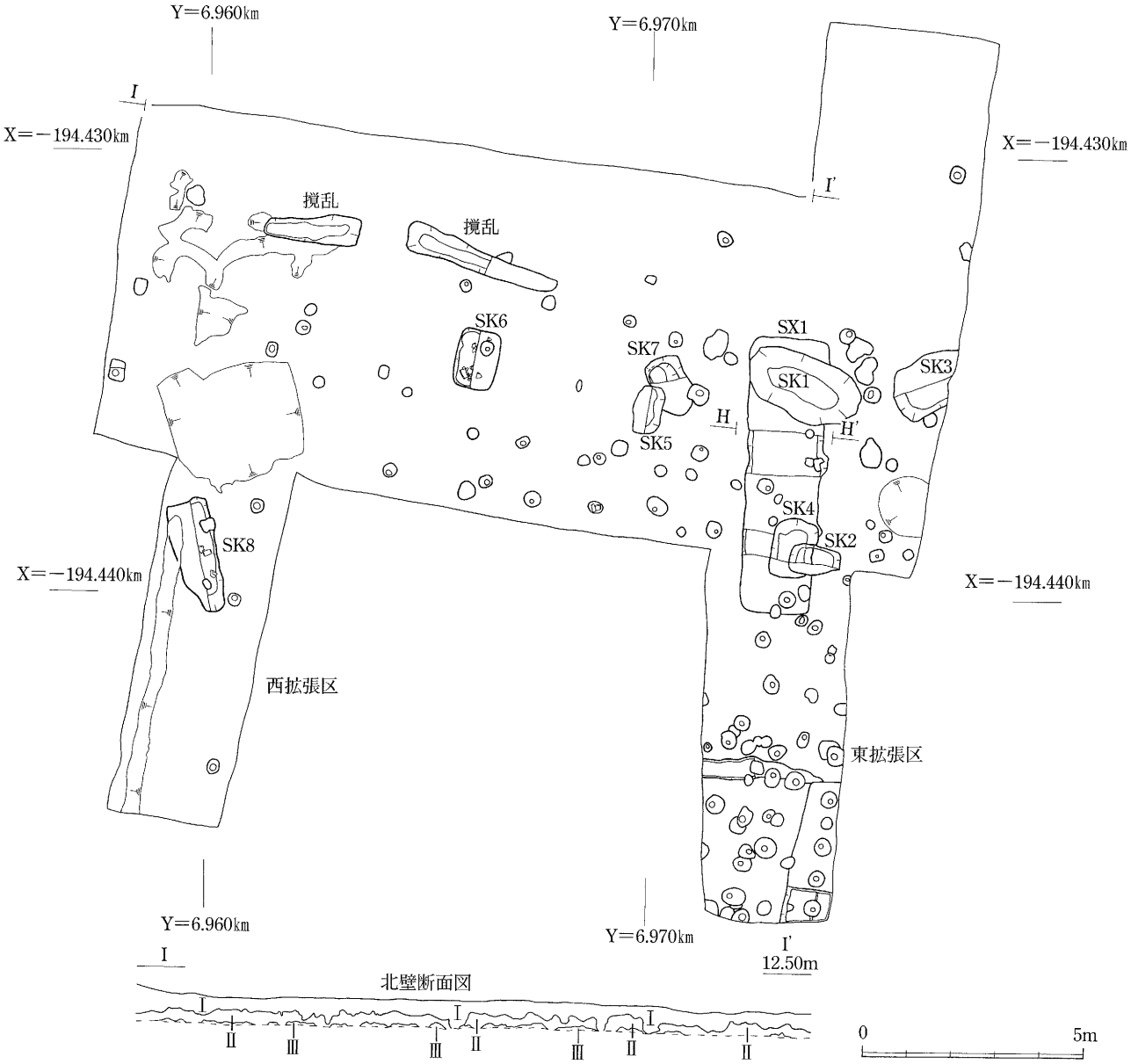
２．調査方法と基本層序

(1)　調査方法

本堂建築予定地に東西19m、南北８m、北東部が北に４m張り出す「L」字形の調査区を設定して調査を開始したが、後に調査区南東部と南西部をそれぞれ幅約３m、長さ８mの範囲で拡張している。拡張後の調査面積は215㎡である。

重機でⅠ・Ⅱ層を除去し、Ⅲ層上面で精査を行った。拡張区ではⅡ層上面で遺構を確認できたが、やや不明瞭であったためⅢ層上面まで掘り下げた後に精査を行った。なお、遺構は完掘せずに保存することを前提とし、基本的に土坑などは断面の確認までとし、柱穴などのピットは柱痕跡を確認するまでに留めることとしている。

遺構実測のための基準杭は調査区の方向に合わせて設定し、後にこの座標値を測量する方法をとった。平面図は基準杭を基に簡易遣り方を組んで１／20で作成した。断面図も１／20で作成している。写真は35㎜モノクロフィルムとリバーサルフィルムを一眼レフカメラで撮影し、補助的にデジタルカメラでも撮影した。



第27図　陸奥国分尼寺跡第11次調査平面・断面図

⑵　基本層序

確認した基本層序はⅠ～Ⅲ層までである。

Ⅰ層　10YR３／２黒褐色シルト。砂粒を少量、褐色シルト粒を微量含む。

Ⅱ層　10YR２／２黒褐色粘土質シルト。暗褐色シルトブロックを少量含む。旧表土と推定されるが、部分的に攪拌されている。

Ⅲ層　10YR３／３暗褐色粘土質シルト～シルトで、層上面が遺構確認面である。部分的に木の根や人為的な攪乱が認められるが、遺存状況は比較的良好である。

３．遺構と遺物

今回の調査では掘立柱建物跡６棟(註２)、柱列跡１条、土坑８基、性格不明遺構１基、その他のピット約60を確認した。

SB１掘立柱建物跡　西拡張区から東拡張区にまたがって位置すると考えられる。建物内部の大部分が両拡張区間の未調査部分に相当するため不明瞭な点が残るが、桁行６間(総長12.2m、柱間寸法1.8～2.1ｍ)、梁行３間以上(総長6.05m以上、柱間寸法1.9～2.2ｍ)の東西棟と考えられ(註３)、北と東に１間分の張り出し(北が1.2m、東は1.75m)がある。方向は北桁行と考えたN１W１(P63)―N１E１(P65)の方向でW－８°－N(東梁行はN－８°－E)である。柱穴掘り方は西側拡張区に位置するP63・61・60が径28～32㎝の楕円形、その他が径30～40㎝の円形あるいは楕円形であるが、P105のみは一辺25～30㎝の歪んだ方形である。柱痕跡は直径12～15㎝の円形である。

遺物は柱穴の確認面から土師器７点、須恵器１点、瓦14点などが出土した。なお、西拡張区南部に位置するP60の確認面からは、上から順にF－１八葉重弁蓮華文軒丸瓦(第30図１)、扁平な川原石、漆器？(漆膜のみ)、扁平な川原石、漆器の順に重なって出土している。このP60では柱痕跡が確認できていないので、これらは建物廃絶後のある時期に柱穴を利用して埋納されたものと推定される。漆器は遺存状況が悪く、図化はできなかった。

SX１性格不明遺構を切っている。SB２・３・５・６掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

SB２掘立柱建物跡　東拡張区に位置するが、部分的な確認であるため不明な点が多い。桁行は不明であるが(柱間寸法1.9ｍ)、梁行２間(総長3.4m、柱間寸法1.65～1.75ｍ)の東西棟と考えられ、西梁行から１間目に間仕切りと考えられるP99・97の柱穴がある。方向は西梁行でN－８°－Eである。柱穴掘り方は直径30～40㎝の円形、あるいは径30～40×50㎝の楕円形である。柱痕跡は直径10～15㎝の円形である。

遺物は柱穴の確認面から土師器３点、瓦１点が出土した。図化できたものはない。

SB１・５・６掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

SB３掘立柱建物跡　調査区中央に位置する。桁行５間(総長9.9m、北桁行の柱間寸法1.9～2.0ｍ、南桁行の柱間寸法1.65～2.5ｍ)、梁行２間(総長4.4m、西梁行の柱間寸法2.2m、東梁行の柱間寸法1.95～2.45ｍ)の東西棟である。建物をほぼ東西方向に２分割する位置にP47・44が位置しており、間仕切りの柱穴である可能性がある。方向は北桁行でW－10°－N(東梁行はN－10°－E)である。柱穴掘り方は径25～35㎝の円形あるいは楕円形であるが、西梁行中央のP53は一辺25×35㎝の隅円方形で、北東隅のP25は他のピットと重複しているため大きさは不明瞭である。柱痕跡は直径10～13㎝の円形であるが、P53は径10×15㎝の楕円形である。

遺物は柱穴の確認面から土師器10点、須恵器９点、瓦20点が出土した。図化できたのは平瓦G－９(第30図10)のみである。

SK６土坑を切っている。SB１・４掘立柱建物跡、SK５・７土坑と重複しているが新旧関係は不明である。

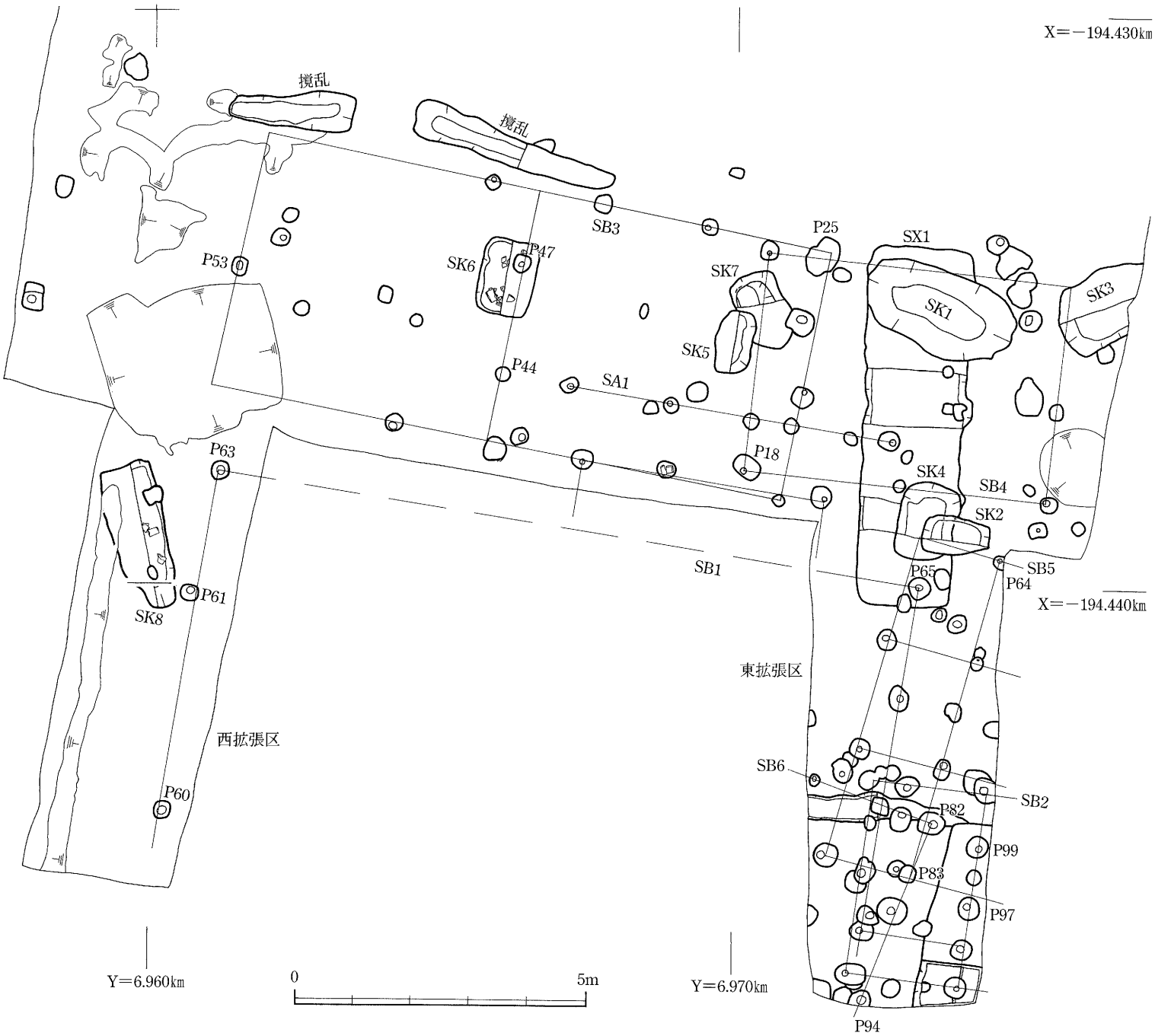
SB４掘立柱建物跡　調査区東側に位置する。桁行２間(総長5.2m、柱間寸法2.5～2.7ｍ)、梁行２間(総長3.8m、柱間寸法1.6～2.2m)の小規模な東西棟であるが、さらに東側に延びる可能性も考えられる。方向は南桁行でW－

５°－N(東梁行はN－５°－E)である。柱穴掘り方は径20～30㎝の円形あるいは楕円形であるが、南西隅のP18はやや大きく、径35×50㎝の隅円方形である。柱痕跡は直径８～10㎝の円形である。

遺物は柱穴の確認面から土師器２点、瓦３点が出土した。図化できたものはない。

SX１性格不明遺構を切り、SK３土坑に切られている。SB３掘立柱建物跡、SA１柱列跡、SK１・４土坑と重複しているが新旧関係は不明である。

SB５掘立柱建物跡　東拡張区に位置するが、部分的な確認であるため建物規模は不明である。東西１間以上(柱間寸法1.5ｍ)、南北３間(総長5.7m、柱間寸法1.8～1.95m)の総柱建物跡である。方向はN１W２(P64)－N４W２(P83)でN－15°－Eである。柱穴掘り方は径20～40㎝の円形あるいは楕円形である。柱痕跡は直径10～12㎝の円形である。



第28図　SB１～６、SA１平面図

遺物は柱穴の確認面から土師器１点、須恵器２点、瓦６点が出土した。図化できたものはない。

SK２・４土坑に切られている。SB１・２・６掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

SB６掘立柱建物跡　東拡張区に位置するが、部分的な確認であるため建物規模は不明である。東西１間以上(柱間寸法2.1ｍ)、南北２間以上(総長3.3m以上、柱間寸法1.65m)で、方向はN１E１(P82)－N３E１(P94)でN－20°－Eである。柱穴掘り方は径40～50㎝の楕円形であるが西側のP111は径20㎝の円形である。柱痕跡は直径12～15㎝の円形である。

遺物は柱穴の確認面から土師器１点、瓦３点が出土した。図化できたものはない。

SB１・２・５掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

SA１一本柱列　調査区南部に位置する東西方向の一本柱列で、３間分を確認した。総長5.6m、柱間寸法は1.7～2.0ｍ、方向はW－９°－Nである。柱穴掘り方は径25～40㎝の円形あるいは楕円形で、柱痕跡は直径10～12㎝の円形である。柱筋はSB１掘立柱建物跡の北側張り出しから1.1～1.2ｍ離れており、位置関係からSB１の遮蔽施設である可能性がある。

遺物は柱穴の確認面から土師器６点、須恵器１点、瓦２点が出土した。図化できたものはない。

SX１性格不明遺構を切っている。SB３・４掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

SK１土坑　調査区東部に位置し、南北1.45ｍ、東西2.65ｍの楕円形である。深さは30㎝で、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は２層で、人為的に埋め戻された可能性がある。主軸方向はW－24°－Nである。

遺物は土師器16点、土師質土器６点、近世の陶磁器22点、瓦59点、金属製品２点が出土した。図化できたものはない。

SX１性格不明遺構を切っている。SB４掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

SK２土坑　調査区南東部～東拡張区に位置し、南北0.7ｍ、東西1.15ｍのやや歪んだ長方形である。深さは35㎝で、壁はやや急角度に立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は３層で、底面に木炭層、２層中に焼土や木炭粒が認められた。主軸方向はW－９°－Nである。

遺物は瓦２点が出土したが、図化はできなかった。

SB５掘立柱建物跡、SK１・４土抗、SX１性格不明遺構を切っている。

SK３土坑　調査区東壁際に位置する。南北1.1m、東西1.5m以上で、楕円形と推定される。深さは50㎝で、壁は急角度に立ち上がる。底面はやや凹凸がある。堆積土は４層で、自然堆積層と推定される。主軸方向はE－20°－Nである。

遺物は瓦２点で、丸瓦F－５が図化できた(第30図５)。

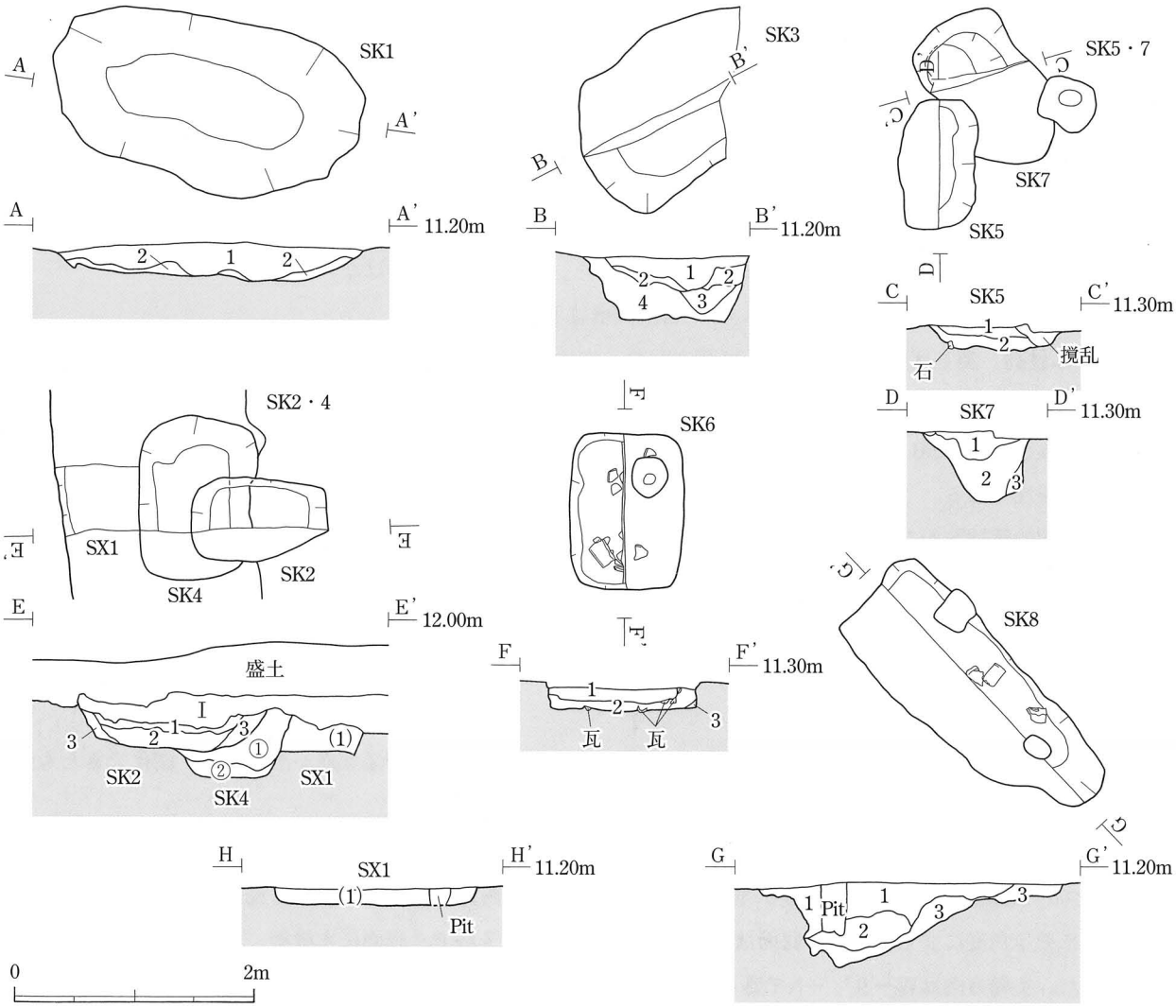
SB４掘立柱建物跡を切っている。

SK４土坑　調査区南東部～東拡張区に位置する。南北1.4m、東西1.0mの隅円方形である。深さは50㎝で、壁は急角度に立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は２層で、人為的に埋め戻されている。主軸方向はN－９°－Eである。

遺物は土師器５点、瓦７点が出土したが、図化はできなかった。

SB５掘立柱建物跡、SX１性格不明遺構を切り、SK２土坑に切られている。SB４掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

SK５土坑　調査区東部に位置する。南北1.1m、東西0.6mの楕円形である。深さは20㎝で、壁は比較的急角度に立ち上がる。底面はやや凹凸がある。堆積土は２層で、焼土ブロックや木炭粒を含んでいる。主軸方向はN－９°－Eである。



第29図　SK１～８、SX１断面図

遺物は出土しなかった。

SK７土坑を切っている。SB３掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

SK６土坑　調査区中央部に位置する。南北1.3m、東西1.0mの長方形である。深さは25㎝で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は３層である。主軸方向はN－８°－Eである。

遺物は土師器30点、瓦66点が出土した。平瓦G－11が図化できた(第30図８)。

SB３掘立柱建物跡に切られている。

SK７土坑　調査区東部に位置する。南北1.4m、東西0.8mのやや歪んだ楕円形である。深さは60㎝で、壁は急角度に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は３層で、人為的に埋め戻されている可能性がある。主軸方向はN－23°－Wである。

遺物は土師器15点、瓦７点が出土し、刻印のある平瓦G－10が図化できた(第31図２)。

SK５土坑に切られている。SB３・４掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

SK８土坑　西拡張区に位置する。南北2.5m、東西1.0mのやや歪んだ長方形である。深さは70㎝で、壁は比較的急角度に立ち上がる。底面は南壁際が最も深く、北に向かって徐々に浅くなる。堆積土は３層で、人為的に埋め戻されている可能性がある。主軸方向はN－18°－Wである。

SK 1

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR３／２　黒褐色	シルト	にぶい黄褐色粘土粒少量
2	10YR３／２　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土ブロック少量

SK 3

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR２／２　黒褐色	シルト	
2	10YR２／２　黒褐色	シルト	にぶい黄褐色シルト粒少量
3	10YR２／２　黒褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック少量
4	10YR２／２　黒褐色	シルト	

SK 5

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR３／３　暗褐色	シルト	下部に焼土ブロック少量
2	10YR２／２　黒褐色	粘土質シルト	褐色シルト粒、焼土粒微量

SK 7

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR３／２　黒褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック微量
2	10YR３／２　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルトブロック多量
3	10YR４／３　にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルトブロック少量

SK 2
SK 4

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR５／４　にぶい黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック少量
2	10YR３／２　黒褐色	粘土	焼土粒・木炭粒少量、底面に木炭層(厚約５㎜)
3	10YR４／４　褐色	粘土	
①	10YR３／３　暗褐色	粘土	褐色シルト粒多量
②	10YR３／２　黒褐色	粘土	褐色粘土ブロック・径10～30㎜の礫多量

SK 6

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR２／２　黒褐色	粘土質シルト	褐色シルト粒少量
2	10YR２／２　黒褐色	粘土質シルト	褐色シルト粒微量
3	10YR２／２　黒褐色	粘土質シルト	褐色シルトブロック多量

SK 8

層位	色　調	性　質	混入物・その他
1	10YR４／３　にぶい黄褐色	シルト	褐色シルトブロック、黒褐色シルトブロック少量
2	10YR２／２　黒褐色	粘土質シルト	
3	10YR４／３　にぶい黄褐色	シルト	褐色シルトブロック、黒褐色シルトブロック多量

SX 1

層位	色　調	性　質	混入物・その他
(1)	10YR２／２　黒褐色	シルト	にぶい黄褐色粘土粒少量

遺物は土師器32点、須恵器１点、赤焼土器26点、近世の陶器１点、瓦51点が出土した。図化できたのは赤焼土器D－１坏(第33図１)、丸瓦F－６(第30図４)、平瓦G－14・13(第30図６・７)、砥石に転用された平瓦G－５(第31図１)である。

SX１性格不明遺構　調査区南東部～東拡張区に位置する。南北6.3m、東西1.7mの長方形である。深さは15㎝で、壁は急角度に立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は１層で、人為的に埋め戻されている。主軸方向はN－１°－Eである。

遺物は土師器10点、須恵器１点、中世陶器１点、瓦98点、金属製品１点が出土した。図化できたのは在地産の中世陶器Ⅰｃ－２鉢(第33図３)、偏行唐草文軒平瓦G－２(第30図３)である。

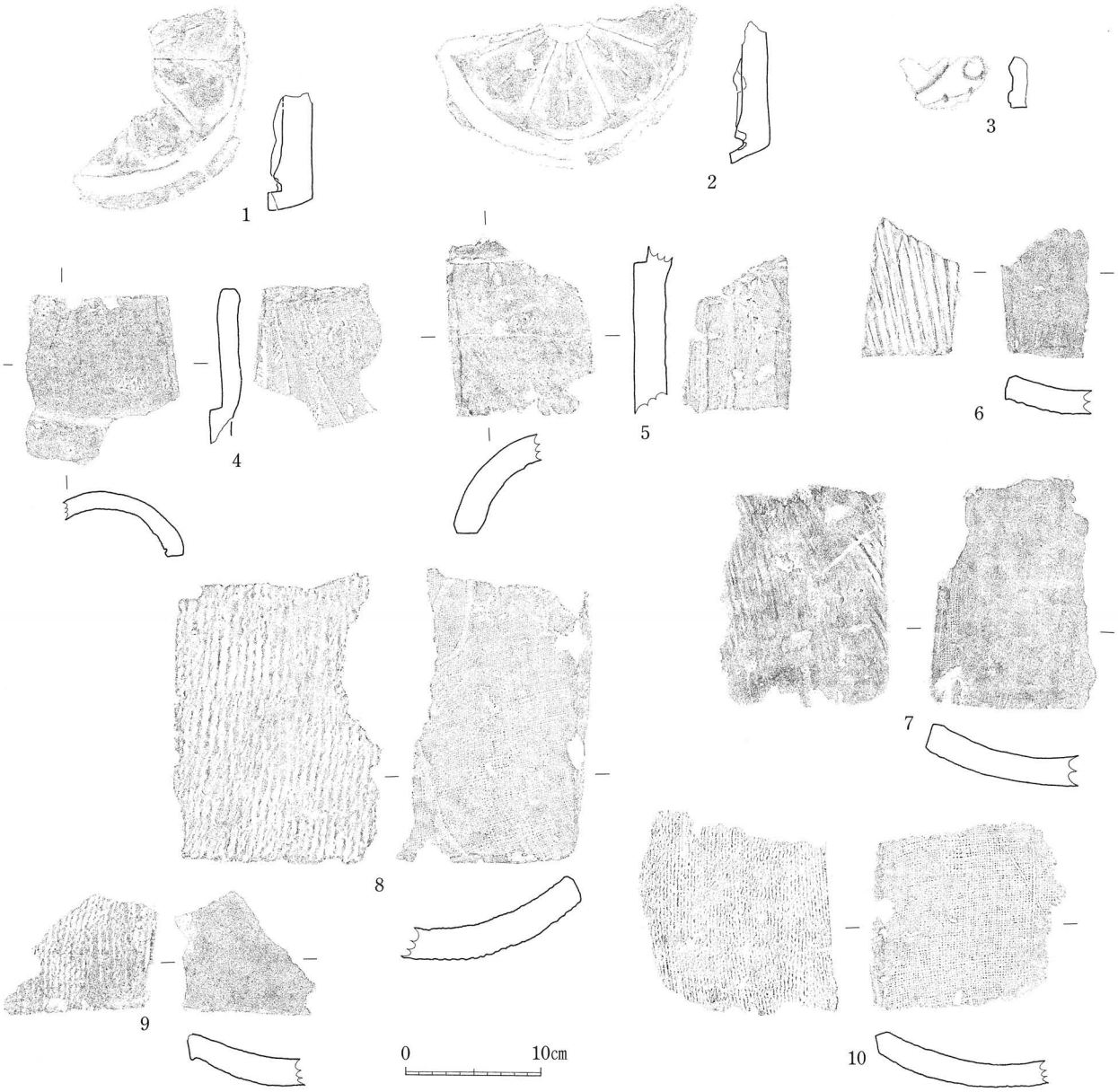
SB１・４掘立柱建物跡、SA１柱列跡、SK１・２・４土坑に切られている。

ピット　掘立柱建物跡などとしての組み合わせが不明なピットが約60ある。これらのピットからは土師器15点、須恵器１点、瓦49点が出土したが、図化できたのは東拡張区南端部のP112から出土した八葉重弁蓮華文軒丸瓦F－２(第30図２)と平瓦G－６(第30図９)である。

その他の出土遺物　基本層Ⅰ・Ⅱ層および撹乱中からも土師器、須恵器、土師質土器、中世陶器、近世の陶磁器、瓦、金属製品などが約800点出土している。在地産の中世陶器Ⅰｃ－１壺(第33図２)、北宋銭Ｎｂ－１(第33図４)の他、瓦では八葉重弁蓮華文軒丸瓦Ｆ－３(第32図１)、宝相華文軒丸瓦Ｆ－４(第32図２)、連珠文軒平瓦G－１(第32図３)、隅切瓦G－12・３(第32図４・10)、面戸瓦H－１(第32図11)、平瓦G－15～17・７・４(第32図５～９)が図化できた。

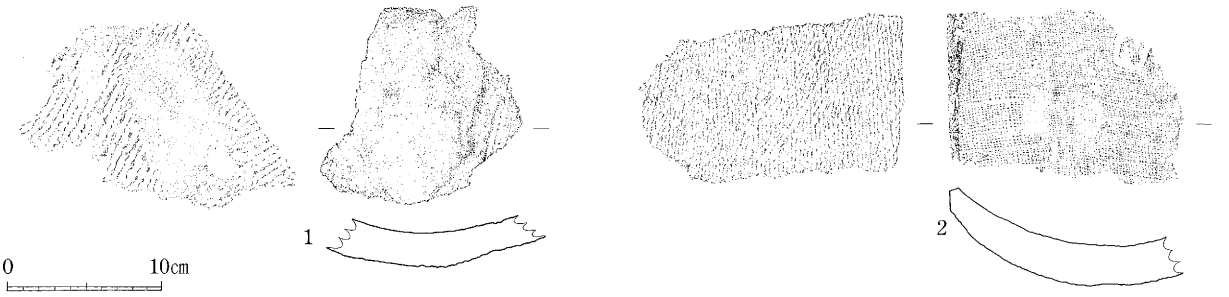
４．まとめ

今回確認した掘立柱建物跡６棟と一本柱列１列は、これまで確認されている陸奥国分尼寺跡の建物跡と比べると柱穴掘り方や柱痕跡ともに規模が小さく、方向性も異なること（註４）から、古代の陸奥国分尼寺跡に係わる遺構ではなく、中～近世の建物跡である可能性が高い。これらの遺構の時期を限定することは困難であるが、わずかなが



No.	登録No.	遺構・層位	種　別	調整・特徴	色調	写真図版
1	F－1	SB１(P－60)	軒丸瓦	八葉重弁蓮華文、国分寺３類、瓦当面１／３遺存、蓮弁・小蓮弁・間弁端部はやや丸みを帯びる 裏面に丸瓦接合痕	暗灰黄色	18－1
2	F－2	P－112	軒丸瓦	八葉重弁蓮華文、国分寺１類、瓦当面１／２遺存、蓮弁・小蓮弁・間弁端部は鋭く、稜線が明瞭	灰色	18－3
3	G－2	SX１	軒平瓦	偏行唐草文、国分寺２類、瓦当面のみ剥離、剥離面にヘラ痕(平行あるいは放射状の沈線)	灰黄色	18－2
4	F－6	SK８	丸瓦	凸面：縄叩き、ロクロナデ、側面ヘラケズリ、凹面：粘土紐痕、布目痕、小口面ヘラケズリ、厚さ1.6cm	灰黄褐色	18－4
5	F－5	SK３	丸瓦	凸面：摩滅、ロクロナデ、側面ヘラケズリ、凹面：粘土紐痕(幅５cm)、布目痕、縦位のナデ、厚さ2.3cm	浅黄橙色	18－5
6	G－14	SK８	平瓦	凸面：縄叩き(痕跡)、平行叩き(縦位)、凹面：布目痕、縦位のナデ、側面・小口面ヘラケズリ、厚さ1.7cm	灰黄色	18－6
7	G－13	SK８	平瓦	凸面：平行叩き(縦位)、ナデ、ヘラ痕、凹面：布目痕、縦位のナデ、側面・小口面ヘラケズリ、厚さ2.2cm	灰黄色	18－7
8	G－11	SK６	平瓦	凸面：縄叩き(太め・縦位)、縄目つぶれ気味 凹面：糸切痕、布目痕、ヘラ記号？、側面・小口面ヘラケズリ、厚さ2.3cm	にぶい褐色	19－1
9	G－6	P112	平瓦	凸面：縄叩き(やや細め・縦位)、縄目つぶれ、端部に凹型台圧痕、凹面：布目痕、縦位のナデ、厚さ1.8cm	黄灰色	19－2
10	G－9	SB３(P28)	平瓦	凸面：縄叩き(細め・縦位)、凹面：布目痕、ヘラ記号「×」、厚さ2.0cm	黄灰色	19－3

第30図　第11次調査出土遺物(1)



No.	登録No.	遺構・層位	種　別	調整・特徴	色調	写真図版
1	G－5	SK8・堆積土	平瓦	凸面：縄叩き(やや太め・縦位)、砥石に転用、凹面：糸切痕、布目痕、砥石に転用、厚さ2.2cm	灰色	19－4
2	G－10	SK7・堆積土	平瓦	凸面：縄叩き(細め・縦位)、側面ヘラケズリ、ヘラ痕跡、凹面：布目痕、側面ヘラケズリ、刻印、厚さ2.1cm	灰黄褐色	19－5

第31図　第11次調査出土遺物(2)

遺構・層位	土師器	須恵器	赤焼土器	土師質土器	中世陶器	近世		瓦	金属製品	その他
						陶器	磁器			
SB1・確認面	7	1						14		川原石2 漆器・漆膜
SB2・確認面	3							1		
SB3・確認面	10	9						20		
SB4・確認面	2							3		
SB5・確認面	1	2						6		
SB6・確認面	1							3		
SA1・確認面	6	1						2		
SK1・堆積土	16			6		16	6	59	2	
SK2・堆積土								2		
SK3・堆積土								2		
SK4・堆積土	5							7		
SK6・堆積土	30							66		
SK7・堆積土	15							7		
SK8・堆積土	32	1	26			1		51		
SX1・堆積土	10	1			1			98	1	
その他のピット	15	1						49		
基本層Ⅰ層	146	7		12	1	36	4	447	6	
基本層Ⅱ層								7		
攪乱	28	3				1		106	2	

表6　陸奥国分尼寺跡第11次調査遺物集計表

らも周辺から在地産の中世陶器や北宋銭が出土していることから、中世まで遡る可能性は考えられる。その他の遺構のうち出土遺物や他の遺構との重複関係から古代にまで遡る可能性のあるのは、SK3・5～7のみであるが、詳細な時期は限定できなかった。

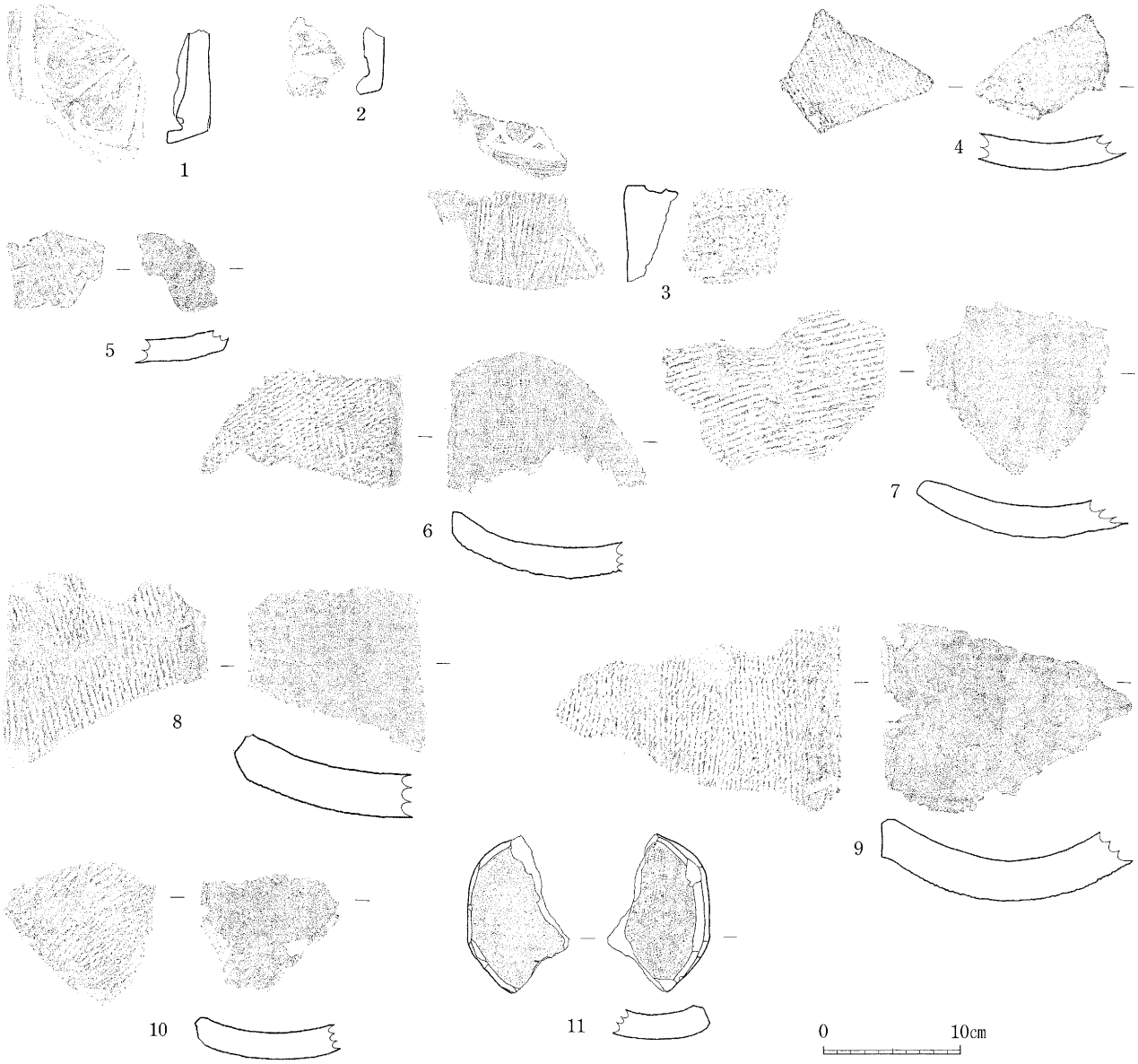
遺構や基本層中から出土した瓦については先に述べたとおりであるが、ここで概観しておきたい。

軒丸瓦は4点あり、八葉重弁蓮華文軒丸瓦が3点(国分寺1類がF－2・3の2点、国分寺3類がF－1の1点)、小片であるが宝相華文軒丸瓦がF－4の1点である。

軒平瓦は2点で、偏行唐草文軒平瓦(国分寺2類)G－2と連珠文軒平瓦G－1がある。連珠文軒平瓦G－1の顎には格子状の隆線が認められたが、これは平瓦部分に刻まれた格子状の沈線が顎に転写された結果、顎の方には隆線として残ったものと考えられる。顎と平瓦部分の接合方法を示す一例である。

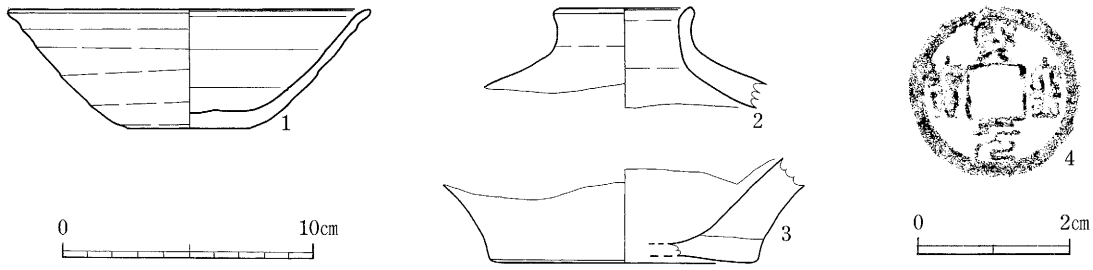
丸瓦は玉縁を呈するF－6・5のみを掲載した。

平瓦は凸面に縄叩きが施されるものと平行叩きが施されるものがあり、縄叩きが圧倒的に多い。縄叩きには縄目が太めのもの(G－11)、やや太目のもの(G－16・17)、やや細めのもの(G－4・6・7)、細めのもの(G－9・10)があり、凹面の布目痕が縦位のナデによってすり消されているものも認められる(G－6・17)。凸面平行叩きは4点図化したが、叩き目が太いもの(G－13～15)と細かいもの(G－12)がある。凹面の布目痕は4点とも縦位のナデによってすり消されている。



No	登録No	遺構・層位	種　別	調整・特徴	色調	写真図版
1	F－3	Ⅰ層	軒丸瓦	八葉重弁蓮華文、国分寺１類、瓦当面１／４遺存、蓮弁・小蓮弁・間弁端部は鋭く、稜線が明瞭 裏面に丸瓦接合痕	灰黄褐色	20－1
2	F－4	撹乱	軒丸瓦	宝相華文、国分寺１類、瓦当面の一部遺存	灰黄褐色	20－2
3	G－1	撹乱	軒平瓦	連珠文、国分寺２類、顎部縄叩き（細め・縦位）、波形沈線、剥離面に格子状降線（平瓦凸面沈線の転写）	黄灰色	20－3
4	G－12	Ⅰ層	道具瓦 隅切瓦	凸面：平行叩き（縦位）、凹面：ナデ、厚さ2.1cm	にぶい 黄橙色	20－4
5	G－15	Ⅰ層	平瓦	凸面：布目痕（幅１cmの帯状）、平行叩き（斜位）、ナデ、凹面：ナデ、厚さ1.6cm	灰黄褐色	20－5
6	G－16	Ⅰ層	平瓦	凸面：縄叩き（やや太め・縦位・斜位）、側面ヘラケズリ、凹面：布目痕、側面ヘラケズリ、厚さ2.1cm	灰黄褐色	20－6
7	G－17	Ⅰ層	平瓦	凸面：縄叩き（やや太め・横位）、縄目つぶれ気味、凹面：布目痕、縦位のナデ、側面ヘラケズリ、厚さ2.2cm	灰黄褐色	20－7
8	G－7	Ⅰ層	平瓦	凸面：縄叩き（やや細め・縦位）、縄目つぶれ気味、側面ヘラケズリ、凹面：布目痕、厚さ3.0cm	灰色	21－1
9	G－4	撹乱	平瓦	凸面：縄叩き（やや細め・縦位）、凹面：糸切痕、布目痕、厚さ3.2cm	灰色	21－2
10	G－3	撹乱	道具瓦 隅切瓦	凸面：縄叩き（細め・斜位）、凹面：ナデ、側面ヘラケズリ、厚さ1.9cm	黄灰色	21－3
11	H－1	撹乱	道具瓦 面戸瓦	凸面：ナデ、側面ヘラケズリ、凹面：布目痕、側面ヘラケズリ、厚さ2.0cm	灰黄褐色	21－4

第32図　第11次調査出土遺物(3)



No.	登録No.	遺構・層位	種別・器種	遺存度	法量(cm)			調整・特徴	写真図版
					口径	底径	器高		
1	D－1	SK8	赤焼土器・坏	1／2	14.3	4.8	4.8	ロクロ調整、底部回転糸切無調整、底径／口径0.34、白針微量	21－5
2	Ic－1	Ⅰ層	陶器・壺(在地)	上部1／2	(5.4)			口縁部ロクロ(回転台)調整、体部ナデ、	21－6
3	Ic－2	SX1	陶器・鉢(在地)	底部1／4		(10.6)		ロクロ(回転台)調整、内面摩滅が著しい	21－7
4	Nb－1	Ⅰ層	銅製品・銭貨	完形	2.3	—	—	重量3.5g、熙寧元寶(北宋・初鋳1068年)	21－8

第33図　第11次調査出土遺物(4)

なお、この他に隅切瓦２点と面戸瓦１点が出土している。

（註１）北側に小子坊と考えられる桁行15間、梁行２間(44.8×6.6m)のSB１、南側に大坊と考えられる桁行15間、梁行４間(44.8×11.6m)のSB２がある。

（註２）調査中は、直線上に並ぶピットが確認できたため掘立柱建物跡などの存在が予想されたが、詳細は不明であった。大部分は調査終了後に図上で復元した。

（註３）北東隅の柱穴P65から１間分西(N１E２)に相当する柱穴が未確認であるため、西拡張区と東拡張区で確認された柱穴はそれぞれ別の建物跡や柱列跡のものである可能性がある。しかし、西側の梁行をP63・61・60、東側の梁行をP65・70・105・91とし、P61とP70、P60とP91を同じ桁行上の柱穴であると想定すると、梁行・桁行共に柱間寸法が1.80～2.20ｍに揃えられた建物が想定できるため、断定はできないが建物跡として推定している。なお、未確認の柱穴については本来の深さが浅かった場合は既に削平されて確認できなかった可能性もある。

（註４）第６次・10次調査で確認された尼坊と推定されるSB１とSB２は真北から４～５°西に振れており、今回確認された建物跡は真北から５～20°東に振れている。

１．調査区全景（西から）

２．SK２完掘状況（北から）

３．SK５断面（東から）

４．SK６断面・遺物出土状況（西から）

５．SK８半裁状況（南東から）

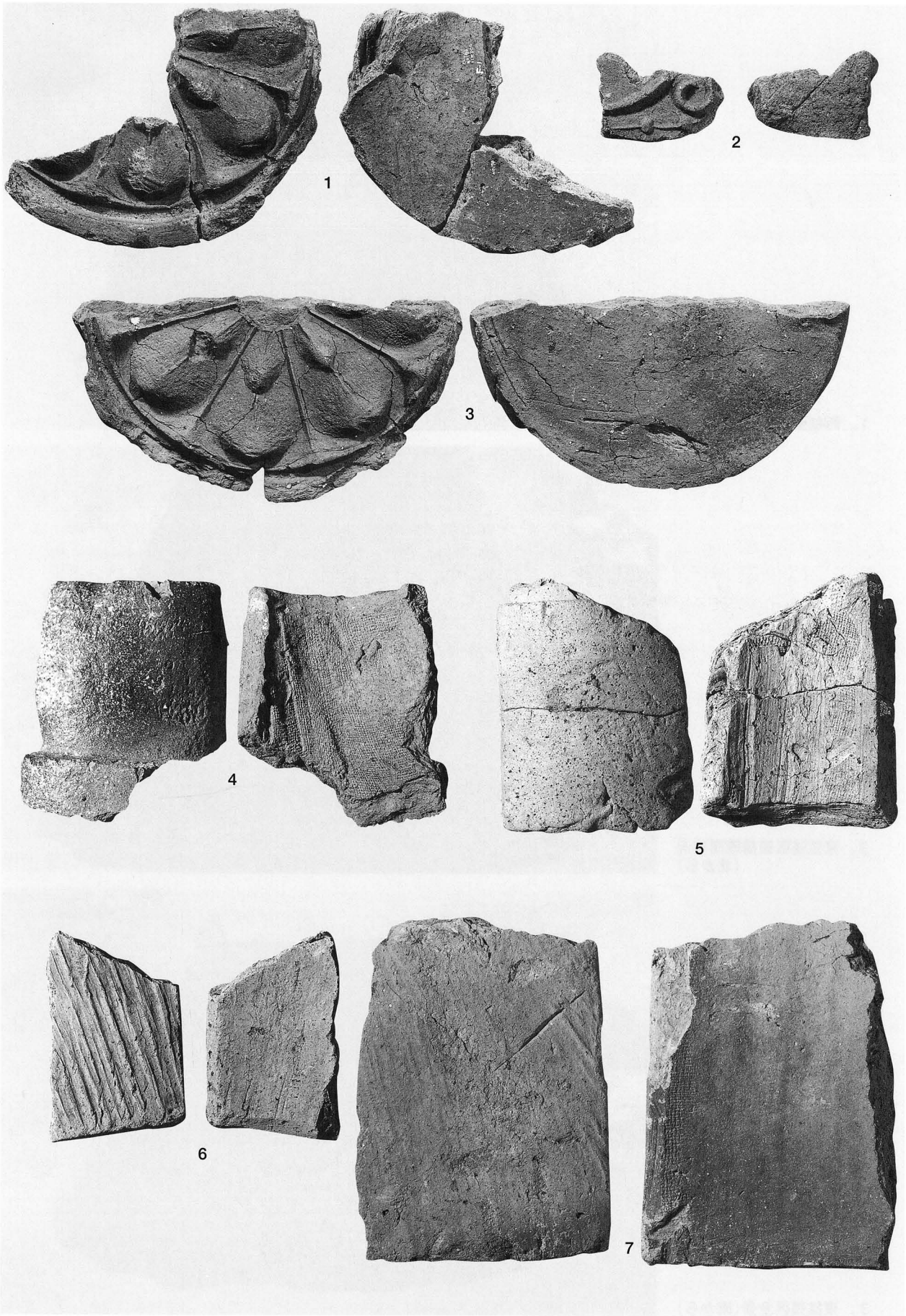
写真図版16　陸奥国分尼寺跡第11次調査区全景、土坑

1．西拡張区全景（南から）

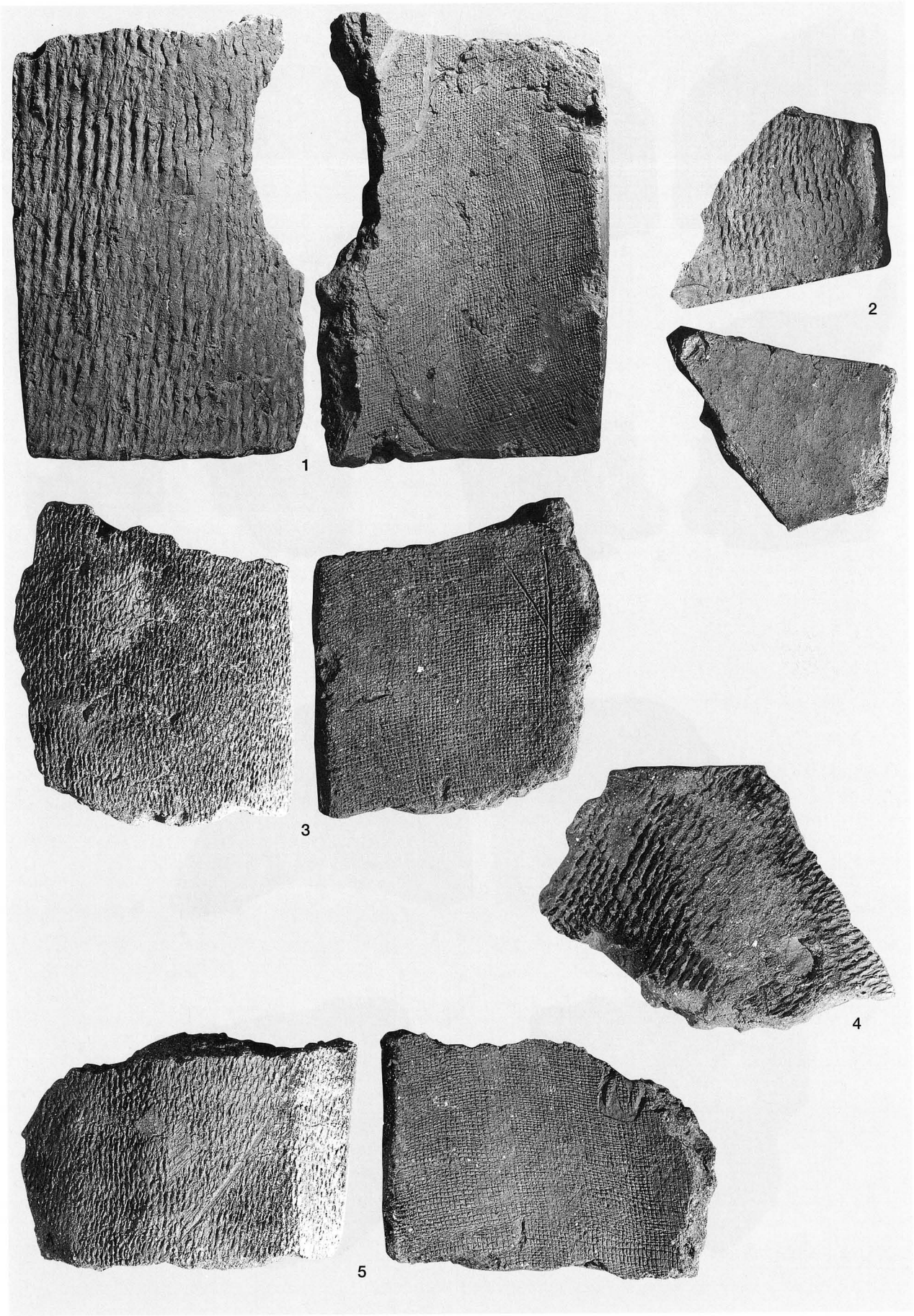
2．東拡張区遺構確認状況（北から）

3．東拡張区全景（南から）

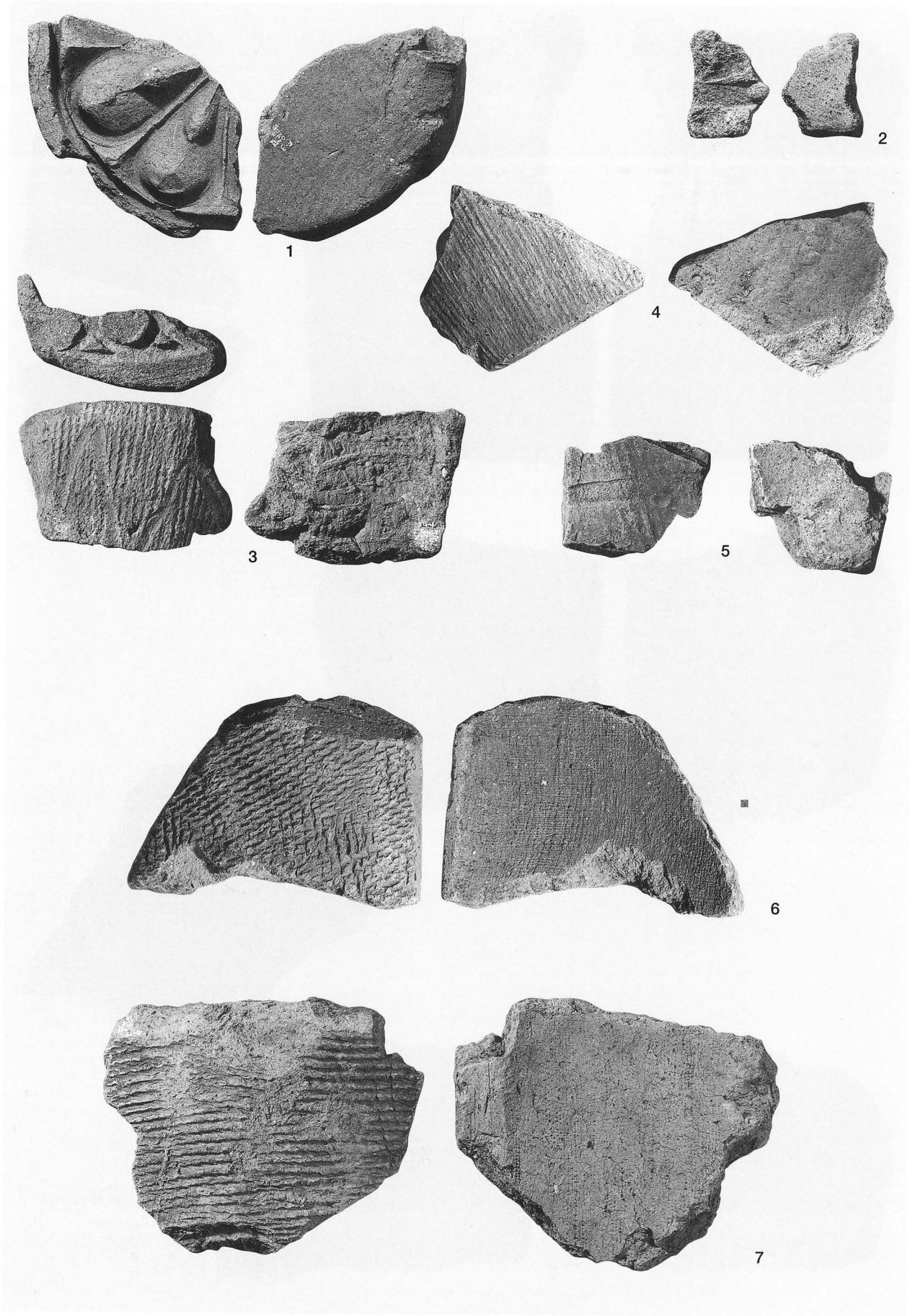
写真図版17　拡張区全景



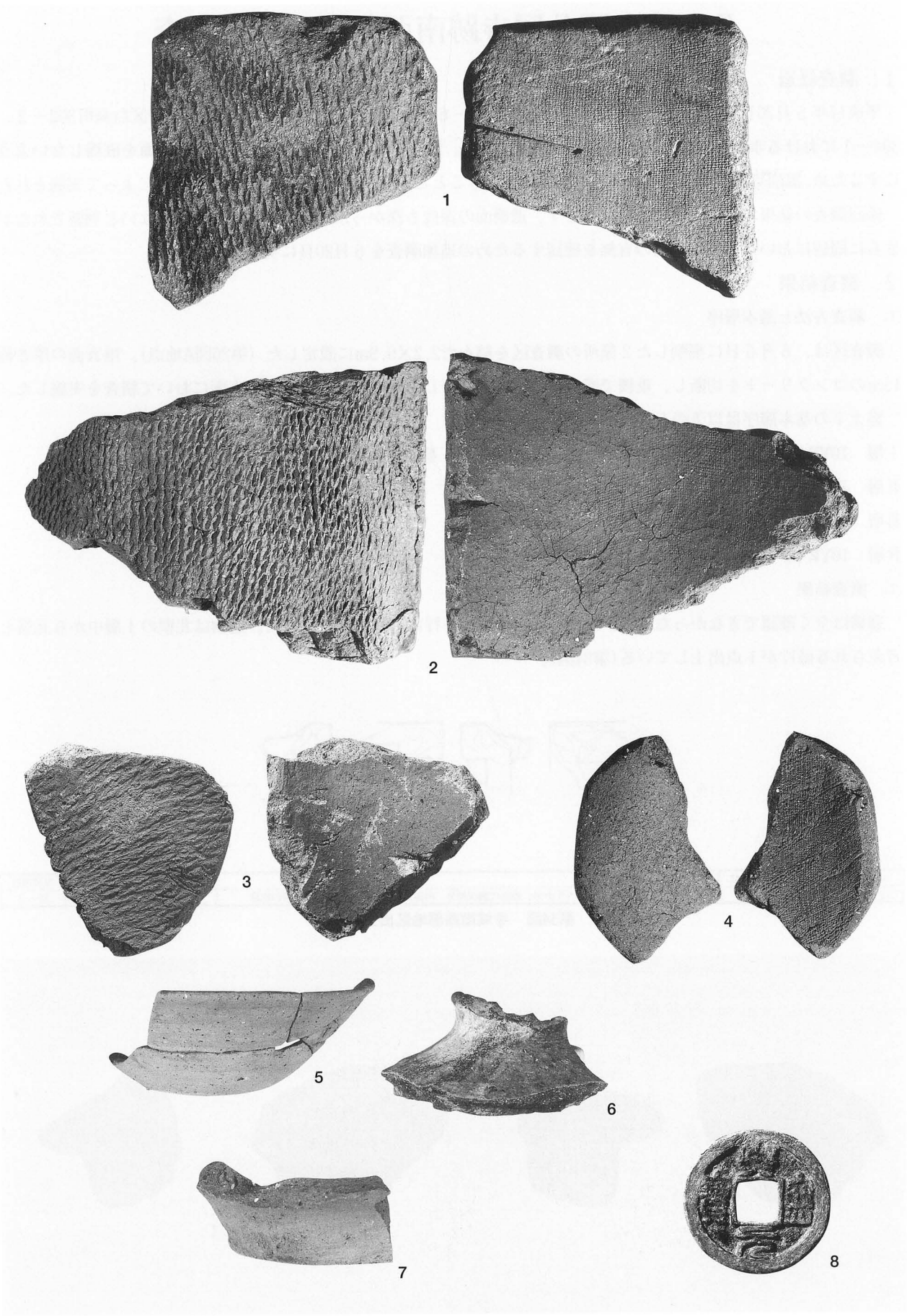
写真図版18　第11次調査出土遺物(1)



写真図版19　第11次調査出土遺物(2)



写真図版20　第11次調査出土遺物(3)



写真図版21　第11次調査出土遺物(4)

Ⅱ．陸奥国分尼寺跡南西部範囲確認調査

１．調査経過

平成17年５月20日付で仙台市宮城野区千代一丁目５－６、高橋ふじの氏より、仙台市宮城野区白萩町302－２、304－１における事務所建築に伴う発掘届が提出された。協議の結果、基礎工事によって遺構面を破壊しないようにするため、掘削可能深度を測るための確認調査を行うこととなり、６月６日に文化財課調査係によって実施された。

確認調査の結果、遺構・遺物は確認できず、遺構面の深度も深かったため工事による影響はないと判断されたが、さらに周辺において遺構・遺物の有無を確認するための追加調査を６月20日に実施した。

２．調査結果

(1)　調査方法と基本層序

調査区は、６月６日に掘削した２箇所の調査区を結んだ2.2×9.9mに設定した（第26図A地点）。地表面の厚さ約15cmのコンクリートを切断し、重機で盛土と表土層を除去した後にⅢ層上面とⅣ層上面において精査を実施した。

盛土下の基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　10YR３／２黒褐色粘土。木炭粒、小礫を少量含む。盛土以前の表土層。

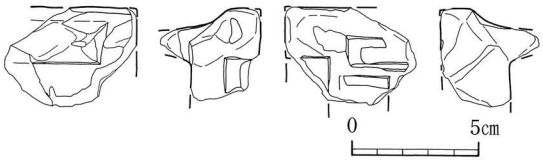
Ⅱ層　10YR２／２黒褐色粘土。耕作土と推定される。

Ⅲ層　10YR３／１黒褐色粘土。旧表土と推定される。

Ⅳ層　10YR４／４褐色粘土。

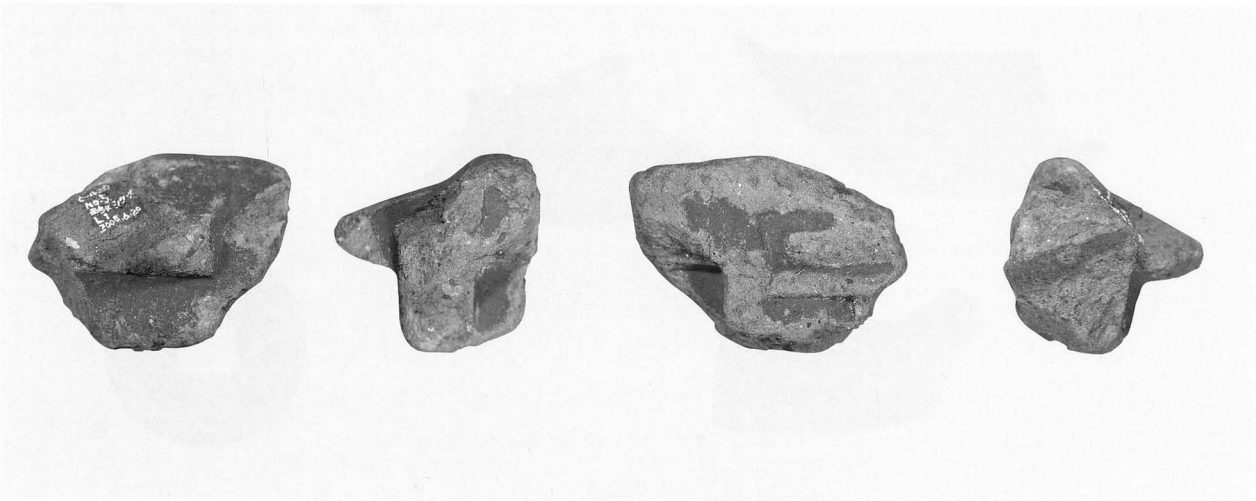
(2)　調査結果

遺構は全く確認できなかったので、当日中に埋め戻しを行い、調査を終了した。遺物は北壁のⅠ層中から瓦塔と考えられる破片が１点出土している（第34図）。



No.	登録No.	遺構・層位	種　別	遺存度	調整・特徴	写真図版
1	瓦塔１	Ⅰ層	瓦塔？	小片	ヘラナデ、外面に廂状部分、内面に扉状の凹面、全面に赤彩の痕跡	22－３

第34図　寺域南西部地区出土遺物



写真図版22　寺域南西部地区出土遺物

Ⅲ．陸奥国分寺跡南大門跡、薬師堂仁王門跡の調査

１．調査経過

陸奥国分寺跡は若林区木ノ下に所在する。昭和30～34年に学術調査、昭和47年以降は整備のための調査が行われており、伽藍配置など寺院の概要は明らかになりつつある。

寺院が衰退していった過程やその後の状況は不明な点が多いが、慶長年間に伊達政宗によって復興され、講堂跡に薬師堂(国指定重要文化財)、南大門跡に仁王門(宮城県指定有形文化財)が建てられた(註１)。

現在の仁王門は、昭和53年の宮城県沖地震によって柱が礎石上でずれる被害を受けたが、それ以来建物の歪みが顕著となり、倒壊の危険があったため解体修理されることとなった。解体修理では礎石の据え直し工事も予定されているため、陸奥国分寺跡の遺構面について深度等の状況確認が必要となり、解体を待って調査に至った。

調査は11月15日に開始したが、最初に仁王門の礎石に係わる調査を実施し、その後陸奥国分寺跡の遺構面の精査を行った。調査は12月２日に終了し、16日に埋め戻しと現状復旧を行っている。

２．調査方法と基本層序

⑴　調査方法

仁王門の礎石の調査は、地表面に薄く堆積していた針葉樹の腐植土を除去し、礎石を水洗するなどの清掃を行った後、個別の観察と写真撮影を実施し、エレベーション図を作成した。

仁王門礎石の調査終了後に陸奥国分寺跡の調査を行ったが、国分寺跡の調査については遺構の掘り下げは行わず、遺構面も破壊しないことを前提として実施することとなった。このため、昭和31年の第２次調査のトレンチ２箇所(註２)を再掘削し、このトレンチの壁面と底面を利用して精査を行った。トレンチの再掘削はすべて人力で行い、トレンチ名称は東側をAトレンチ、西側をBトレンチとした。面積はAトレンチが9.1㎡、Bトレンチが8.8㎡である。

遺構実測のための基準杭は任意に設定し、平面図はこの基準杭によって簡易遣り方を組んで１／20で作成した。断面図も１／20で作成している。写真は基本的に35㎜モノクロフィルムとリバーサルフィルムを一眼レフカメラで撮影したが、全景写真などは６×７判で、補助としてデジタルカメラでも撮影した。

⑵　基本層序

トレンチは２箇所ともに基壇内部に位置するため、確認した基本層序はⅠ層のみである。Ⅰa～Ⅰc層に細分した。

Ⅰa層　10YR５／３にぶい黄褐色シルトと針葉樹を主とする落ち葉の混合。しまりに欠ける。昭和31年の第２次調査以来の堆積物。

Ⅰb層　10YR５／６黄褐色粘土。仁王門基壇南部に部分的に分布する。部分的な盛土と考えられる。

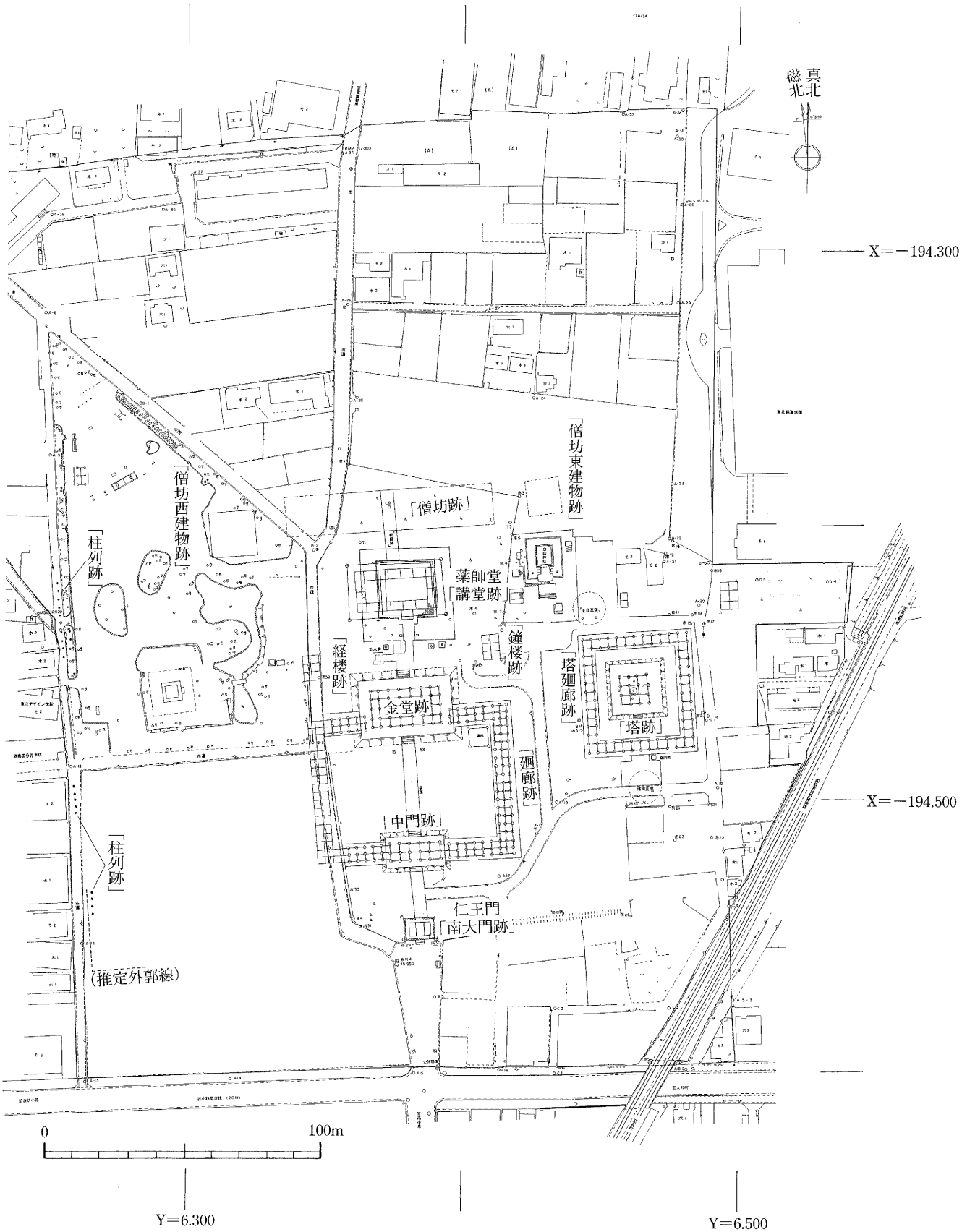
Ⅰc層　10YR４／３にぶい黄褐色シルト。角礫を多量に含む。仁王門基壇の周囲には凝灰岩の切石が並べられているが、この切石の裏込である。なお、第２次調査の報文によれば、切石は昭和10年頃の設置とされている。

３．遺構と遺物

⑴　仁王門跡

仁王門は桁行24尺(通り間10尺)、梁行14尺の八脚門である。礎石12個には北からＮ１・Ｎ２、東からＥ１・Ｅ２の番号をつけて区別している。礎石は自然面を利用して設置されており、特別に平坦面を加工した痕跡は認められない。表面は風化が進行しており、多くの剥離やひび割れが認められる。また、赤褐色を呈した焼けはじけのような被熱痕跡が認められたものも半数ある。Ｎ２Ｅ４のみは凝灰岩系の軟質な石材である。

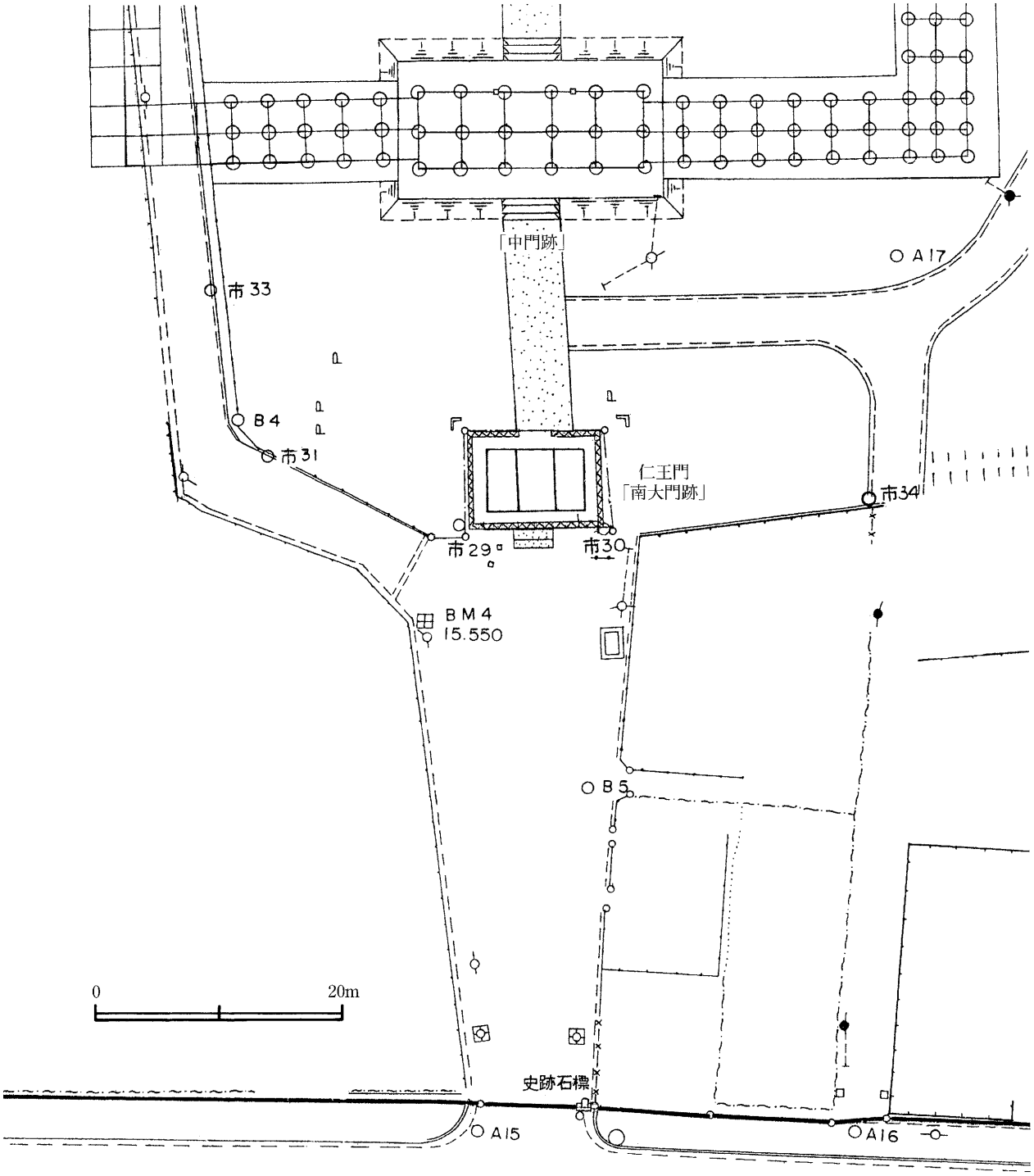
礎石表面には柱位置に関する２種類の痕跡が認められた。一つ目は柱痕跡が色調の違いで認められた点で、周辺



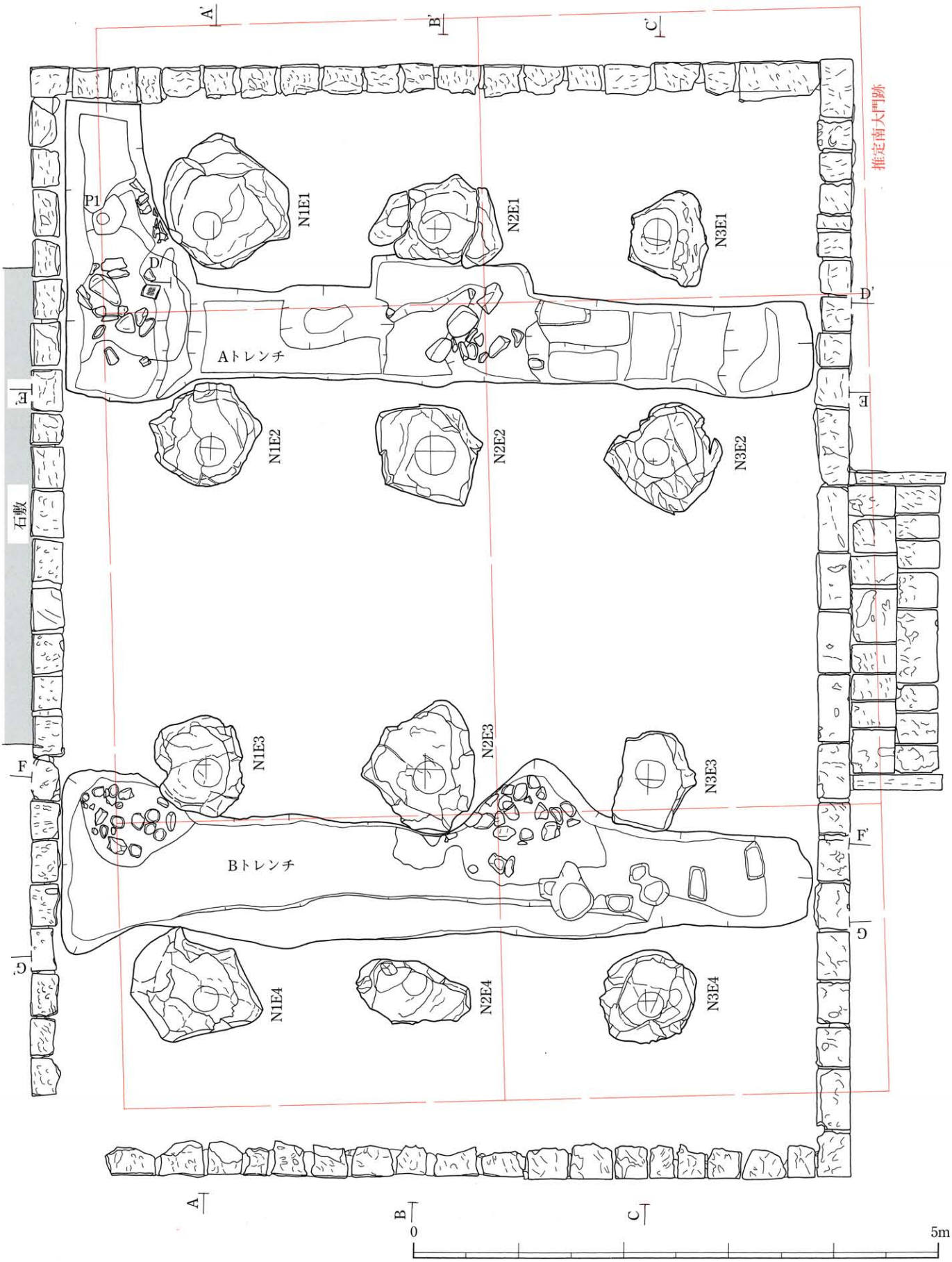
第35図　陸奥国分寺跡全体図（１／2000）

に比べて色調が薄い部分が直径24～37cmの円形あるいは楕円形を呈していた。この柱痕跡の大きさが一定していないのは、位置が大きく動いた柱とあまり動かなかった柱の違いを示していると考えられる。柱位置に関する二つ目の痕跡は、礎石表面に「＋」印が刻まれていた点である。刻みの幅、深さは共に１mm以下のわずかな痕跡であり、全く確認できなかった礎石や「－」印のみ確認できた礎石もある。「＋」印の間の距離は、Ｅ２～Ｅ３の通り間が303cm(10尺)、その他が212cm(７尺)であることから、この「＋」印は仁王門建築時における柱の芯を示していると考えられる。

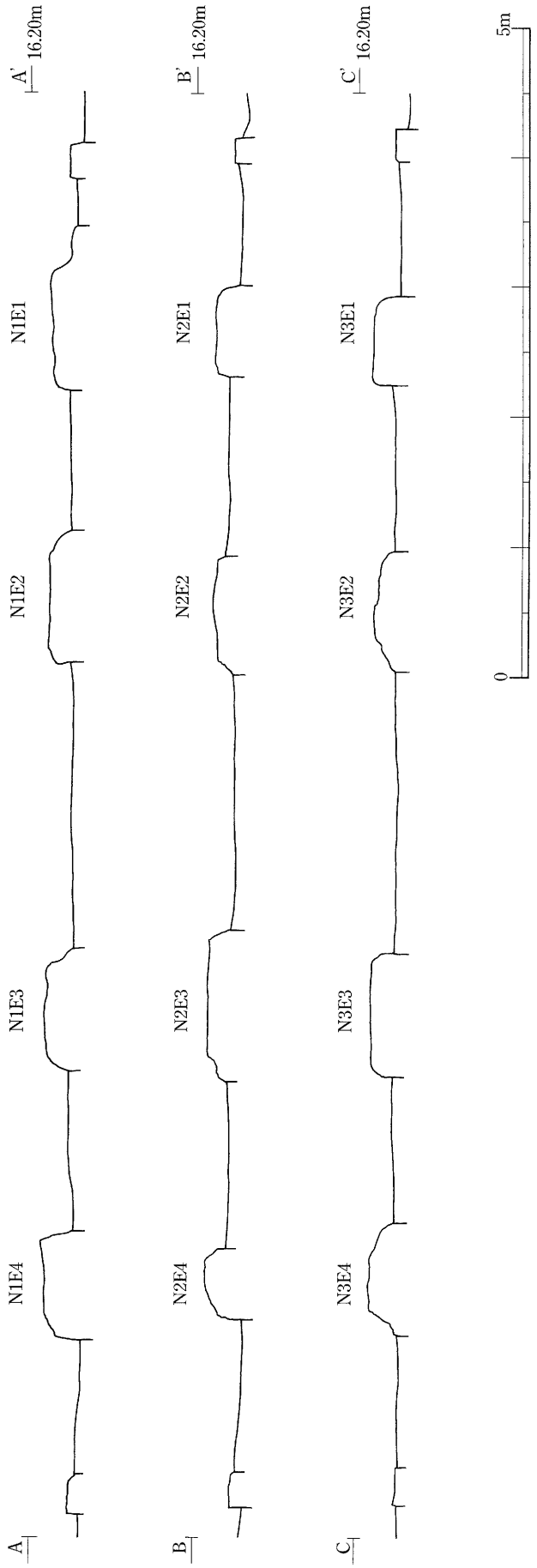
表土下には仁王門建築時のものと推定される整地層が認められたが(註３)、礎石を据えるための掘り方は認めら



第36図　仁王門、南大門跡位置図



第37図　調査区平面図（左が北）



第38図　仁王門礎石エレベーション図

No.	大きさ(東西×南北)m	柱痕跡(径)cm	柱心の印	被熱痕跡
N1E1	1.3×1.2	27	「－」	×
N1E2	1.0×1.1	28	「＋」	×
N1E3	1.0×0.8	27	「＋」	○
N1E4	1.1×1.3	24	「＋」	○
N2E1	0.9×1.25	31	「＋」	×
N2E2	0.95×1.05	37	「＋」	×
N2E3	1.25×1.1	30	「＋」	○
N2E4	0.6×1.0	23	無(風化)	×
N3E1	0.95×0.75	25	「＋」	○
N3E2	1.05×1.15	25	「＋」	○
N3E3	1.0×0.75	25×28	「＋」	×
N3E4	0.9×0.9	24	「＋」	○

表７　仁王門礎石一覧

れなかった。礎石は整地層の下部に乗せるようにして設置されており(註４)、整地作業と礎石の設置作業は同時に行われたと推定される。

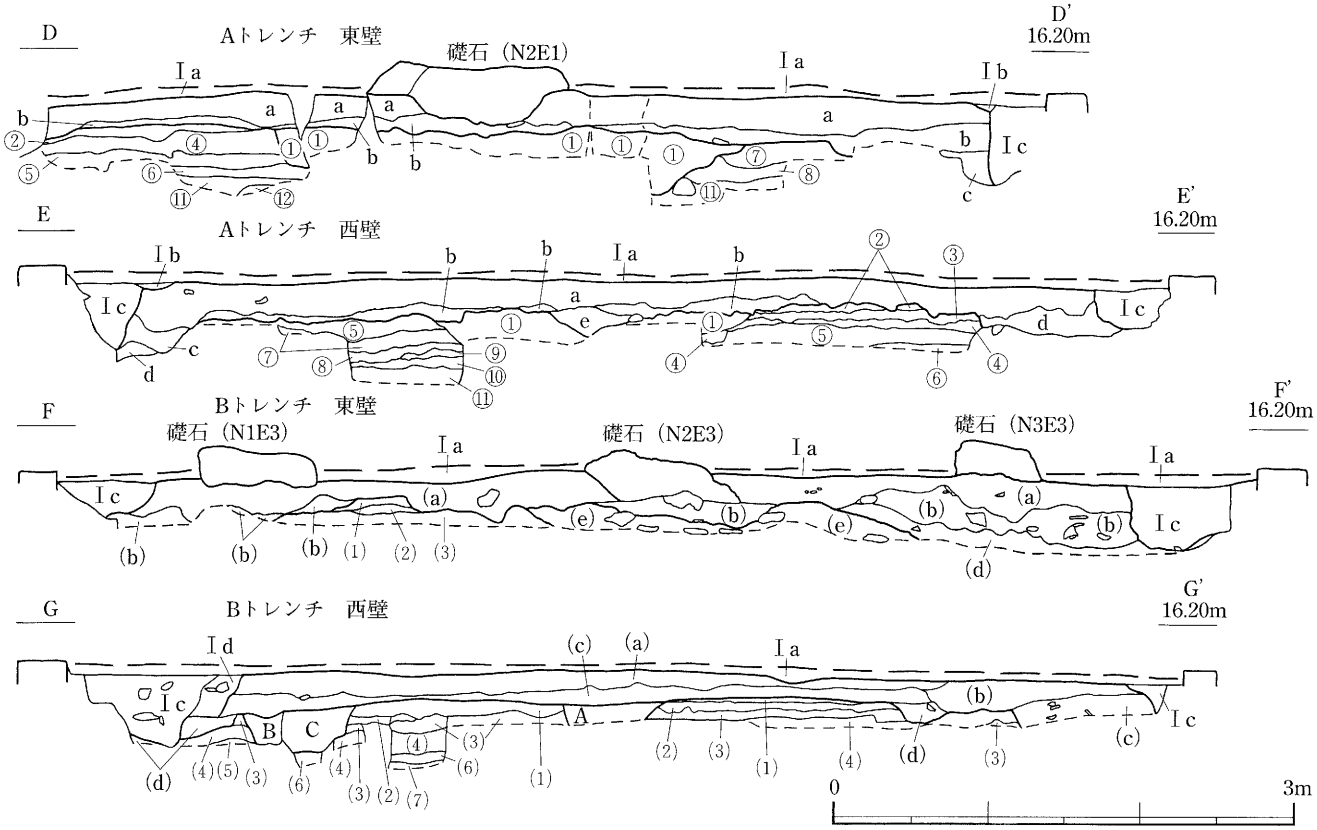
なお、Ａトレンチの北部では、整地層の下部にある古代の版築層(後述する)を切る柱穴を１基確認している(Ｐ１)。掘り方は30×40cmのやや歪んだ楕円形で、柱痕跡は直径12cmの円形である。位置は仁王門の東梁行の延長線上で、礎石Ｎ１Ｅ１の柱中心からは1.05ｍ北に離れている。位置関係から仁王門に係わる作業用の柱痕跡と推定される。

(2)　南大門跡

昭和31年の第２次調査のトレンチ２箇所を再掘削して精査した結果、陸奥国分寺南大門に係わると推定される根石をほぼ第２次調査の結果どおりに４箇所で確認した。根石は仁王門の礎石とは位置が異なっており、想定されている柱間は中央通り間16尺、両脇９尺、梁行12尺である（第37図赤線)。

仁王門に伴う整地層の直下(現地表下20～25cm)では、硬く締まった粘土質シルト層が互層状に認められた。遺構の確認面の深度からすると、これは掘り込み地業を伴う基壇の版築と考えられる。トレンチ底面(註５)でも基本層が確認できなかったことから掘り込みの深さは不明であるが、確認できた最も深い箇所で約45cmの厚さがある。なお、掘り込み地業の範囲については周囲に拡がっていると見られるが、今回は明らかにはできなかった。

版築の上面では、４箇所の根石を囲むように版築を掘り込んだ後に埋め戻した土坑状の痕跡を確認した。この痕跡は礎石の据え方であると考えられる。Ａトレンチ西壁の中央部では、据え方の一部を切る浅い土坑状の落ち込みを確認している(註６)。面的に確認して



Aトレンチ

層位	色調	性質	混入物・その他
a	10YR４／３　にぶい黄褐色	シルト	しまりなし、瓦片・礫少量、仁王門に伴う整地層
b	10YR３／３　暗褐色	シルト	硬い、褐色シルト粒少量、焼土粒微量、部分的に瓦片・礫少量、仁王門に伴う整地層
c	10YR３／３　暗褐色	シルト	しまりなし、部分的に礫少量、仁王門に伴う整地層
d	10YR３／３　暗褐色	シルト	やや硬い、仁王門に伴う整地層
e	10YR３／３　暗褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルト粒・木炭粒・焼土粒微量 仁王門建設に伴う南大門の礎石抜取り埋土と推定
①	10YR３／４　暗褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（３～５㎜）多量、木炭粒・砂粒微量 南大門の礎石据え方埋土
②	10YR３／４　暗褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（２～５㎜）少量、南大門基壇積土
③	10YR３／３　暗褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（５～15㎜）多量、南大門基壇積土
④	10YR５／４　にぶい黄褐色	粘土質シルト	硬い、暗褐色シルトブロック（５～15㎜）少量、南大門基壇積土
⑤	10YR３／３　暗褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（20～30㎜）・砂粒・焼土粒微量、南大門基壇積土
⑥	10YR３／４　暗褐色	粘土質シルト	硬い、南大門基壇積土
⑦	10YR３／３　暗褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（10～50㎜）少量、南大門基壇積土
⑧	10YR３／３　暗褐色	粘土質シルト	硬い、砂粒微量、南大門基壇積土
⑨	10YR３／３　暗褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（10～30㎜）多量、南大門基壇積土
⑩	10YR５／４　にぶい黄褐色	粘土質シルト	硬い、暗褐色粘土質シルトブロック（５～10㎜）少量、南大門基壇積土
⑪	10YR３／３　暗褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（10～30㎜）少量、南大門基壇積土
⑫	10YR３／３　暗褐色	粘土質シルト	硬い、砂粒微量、南大門基壇積土

Bトレンチ

層位	色調	性質	混入物・その他
(a)	10YR４／３　にぶい黄褐色	シルト	しまりなし、瓦片・礫少量、仁王門に伴う整地層
(b)	10YR４／４　褐色	シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（５㎜）少量、仁王門に伴う整地層
(c)	10YR３／４　暗褐色	粘土質シルト	礫(50㎜)・瓦片多量、仁王門に伴う整地層
(d)	10YR４／３　にぶい黄褐色	シルト	ややしまりあり、礫(50㎜)少量、仁王門に伴う整地層
(e)	10YR４／３　にぶい黄褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土ブロック多量、仁王門に伴う整地層
A	10YR４／３　にぶい黄褐色	シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルト粒少量、南大門基壇を切る落ち込み
B	10YR３／２　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（５㎜）多量、南大門基壇を切る落ち込み
C	10YR３／２　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（５㎜）少量、焼土ブロック少量、木炭粒微量、南大門基壇を切る落ち込み
(1)	10YR３／３　暗褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルト粒少量、南大門基壇積土
(2)	10YR３／２　黒褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（５～10㎜）少量、南大門基壇積土
(3)	10YR３／２　黒褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（10～30㎜）多量、南大門基壇積土
(4)	10YR３／２　黒褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（10㎜）微量、南大門基壇積土
(5)	10YR３／２　黒褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（５～10㎜）多量、南大門基壇積土
(6)	10YR３／２　黒褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（10～20㎜）少量、南大門基壇積土
(7)	10YR３／２　黒褐色	粘土質シルト	硬い、にぶい黄褐色粘土質シルト粒微量、南大門基壇積土

第39図　調査区断面図

いないので断定はできないが、仁王門の建築段階における礎石の抜き取り痕の可能性がある。仁王門の礎石は、仁王門の柱の太さに比べて大きすぎることから、陸奥国分寺南大門の礎石を転用した可能性が考えられていたが、今回確認した痕跡が礎石の抜き取り痕とすれば、礎石が転用された可能性がさらに高まったとも言えよう。

Bトレンチ東壁断面では、版築層上面が1.5㎝の厚さで焼土化した箇所を確認した(註７)。火を受けた痕跡と考えられ、このことから、この面が版築の上面であった可能性が高い。

⑶　出土遺物

遺物は、旧トレンチの埋め戻し土を中心として、土師器、須恵器、土師質土器、瓦、金属製品などが出土した(表８)。数量が多いのは陸奥国分寺跡関連の瓦であるが、この他に仁王門に係わる鉄釘などの鉄製品や、賽銭として投げられたであろう銭貨などもある(註８)。図化できたのは瓦19点、鉄製品16点、銭貨11点である。

丸瓦はF１～５(第40図１～５)で、F－３のように凸面にヘラ記号「×」が認められるものや、F－４のように粘土紐の積み上げ痕が明瞭なものなどがある。

軒平瓦G－16(第40図６)の瓦当面は剥離しているが、貼り付けた顎に２本組の沈線による格子状の文様が施されている。

平瓦は大部分が縄叩きであるが、わずかに格子叩きが施されるG－14(第41図１)や叩きがすり消されているG－８(第41図10)などもある。縄叩きには縄目が太めのG－３(第41図２)、やや太目のG－１・13・２(第41図３～５)、やや細めのG－６・５(第41図６・７)、細めのG－４・９(第41図８・９)があり、G－３・２・５は凹面の布目痕が縦位のナデによって部分的にすり消されている。なお、G－９の凹面端部には凸型台の圧痕が認められる。G－15・12(第40図７・８)はやや細めの縄叩きのものであるが、G－15は凸面に刻印、G－12は凹面にヘラ記号が認められる。

熨斗瓦としたG－10(第40図９)は厚さが1.3㎝と薄く、扁平なものである。凹面にはヘラ記号らしき痕跡が認められる。

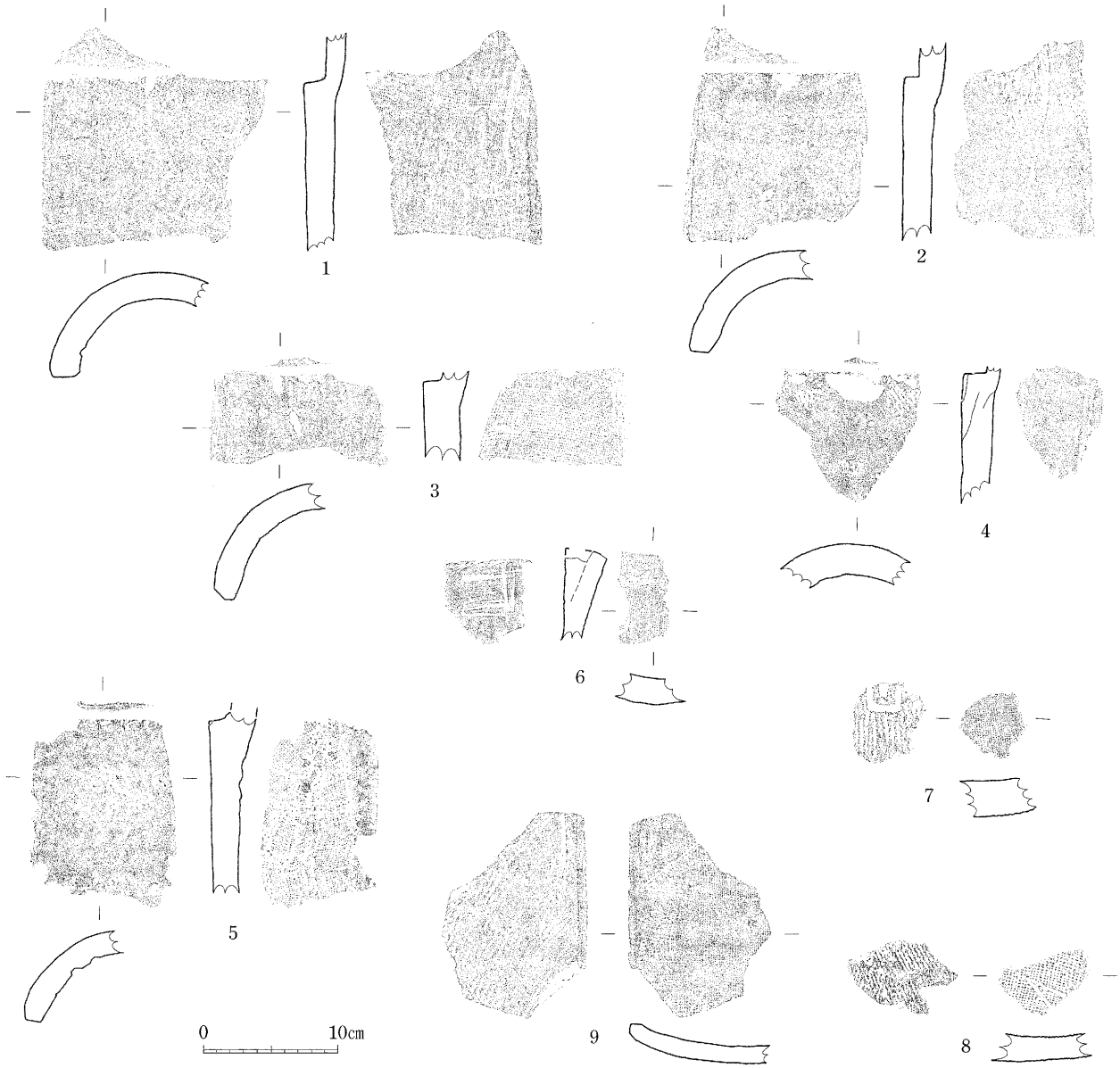
鉄製品は表土出土のものが多いが31点出土し、釘15点と鎹１点が図化できた(第42図)。仁王門で使用されていたとかんがえられる。

銭貨は22点が出土し、このうち11点が図化できた(第43図)。11点の内訳は、北宋銭が１点(Nb－１)、寛永通寶などの国内銭が10点である。国内銭10点の内訳は、古寛永通寶２点(Nb－２・３)、新寛永通寶４点(Nb－４・５・７・８)、新寛永通寶の鉄銭３点(Na－17・18・20)、仙台通寶１点(Na－19)である。

⑷　まとめ

陸奥国分寺南大門跡のトレンチの再精査では、版築による基壇の残存している面までの深さが現地表下20～25㎝と比較的浅いことが判明した。また、掘り込み地業を伴う基壇の版築と礎石の据え方を確認したことで南大門の基礎構造についても新たな知見を得ることができた。今後は、掘り込み地業の範囲や深さなどの基礎構造の他に、礎石位置の確定、扉に係わる痕跡などについても確認していく必要性があろう。

仁王門の礎石については、整地作業と同時に設置されたと考えられ、その工法は南大門の場合とは全く異なっていることが確認できた。部分的な調査であるため仁王門の建築年代は確定し難いが、出土した銭貨の大多数は寛永通寶と仙台通寶で、渡来銭は１点のみであることから、現在の場所に建てられたのは近世以降である可能性が高いと考えられる(註９)。

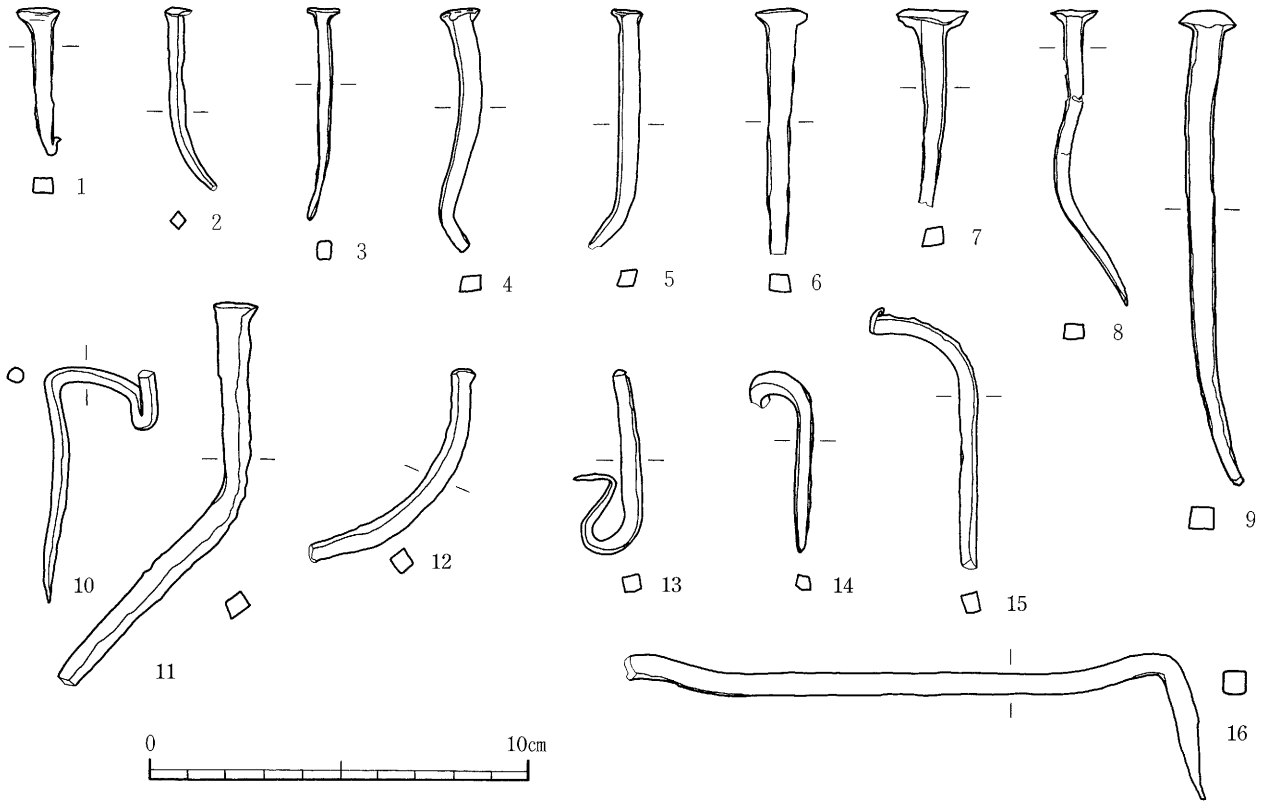


No.	登録No.	遺構・層位	種　別	調整・特徴	色調	写真図版
1	F－1	トレンチ埋戻し土	丸瓦	凸面：ロクロナデ、ナデ、側面ヘラケズリ 凹面：粘土紐痕、布目痕、縦位のナデ、側面ヘラケズリ、厚さ1.8cm	灰色	30－1
2	F－2	トレンチ埋戻し土	丸瓦	凸面：縄叩き、ロクロナデ、側面ヘラケズリ、凹面：布目痕、側面ヘラケズリ、厚さ2.2cm	灰色	30－2
3	F－3	トレンチ埋戻し土	丸瓦	凸面：ロクロナデ、側面ヘラケズリ、ヘラ記号「×」、凹面：布目痕、側面ヘラケズリ、厚さ2.1cm	橙色	30－3
4	F－4	トレンチ埋戻し土	丸瓦	凸面：縄叩き、ロクロナデ、凹面：粘土紐痕、布目痕、厚さ2.2cm	灰色	30－4
5	F－5	トレンチ埋戻し土	丸瓦	凸面：ロクロナデ、側面ヘラケズリ、凹面：布目痕重複、側面ヘラケズリ	灰黄色	30－7
6	G－16	トレンチ埋戻し土	軒平瓦	瓦当面：剥離、顎部：ナデ、格子状２本沈線、凹面：布目痕、一部ヘラナデ、厚さ1.7cm	灰黄色	30－5
7	G－15	トレンチ埋戻し土	平瓦	凸面：縄叩き(やや細め・縦位)、刻印、凹面：布目痕、厚さ2.5cm	灰色	30－6
8	G－12	トレンチ埋戻し土	平瓦	凸面：縄叩き(やや細め・縦位)、縄目つぶれ気味、凹面：布目痕、ヘラ記号、厚さ2.0cm	灰褐色	31－1
9	G－10	トレンチ埋戻し土	道具瓦 熨斗瓦	凸面：縄叩き(やや細め・斜位)、縄目つぶれ、一部ナデ、側面ヘラケズリ 凹面：布目痕(粗い)、ヘラ記号？、側面ヘラケズリ、厚さ1.3cm	灰色	31－2

第40図　南大門跡出土遺物(1)

No.	登録No.	遺構・層位	種　別	調整・特徴	色調	写真図版
1	G－14	トレンチ埋戻し土	平瓦	凸面：格子叩き(幅広の菱形状)、凹面：布目痕、縦位のナデ、厚さ2.1cm	灰黄褐色	31－3
2	G－3	トレンチ埋戻し土	平瓦	凸面：縄叩き(太め・縦位)、縄目つぶれ、凹面：布目痕、縦位のナデ、側面ヘラケズリ、厚さ1.8cm	にぶい橙色	31－5
3	G－1	トレンチ埋戻し土	平瓦	凸面：縄叩き(やや太め・縦位)、凹面：糸切痕、布目痕、側面ヘラケズリ、厚さ2.5cm	灰色	31－4
4	G－13	トレンチ埋戻し土	平瓦	凸面：縄叩き(やや太め・縦位・斜位)、縄目つぶれ気味、凹面：糸切痕、布目痕、側面ヘラケズリ、厚2.1cm	灰色	31－6
5	G－2	トレンチ埋戻し土	平瓦	凸面：縄叩き(やや太め・縦位)、縄目つぶれ、凹面：布目痕、ナデ、側面と小口面ヘラケズリ、厚さ2.3cm	にぶい褐色	31－7
6	G－6	トレンチ埋戻し土	平瓦	凸面：縄叩き(やや細め・縦位)、縄目つぶれ気味 凹面：糸切痕、布目痕、側面と小口面ヘラケズリ、厚さ1.7cm	灰色	32－1
7	G－5	トレンチ埋戻し土	平瓦	凸面：縄叩き(やや細め・縦位)、縄目つぶれ 凹面：糸切痕、布目痕、ナデ(縦位)、側面と小口面ヘラケズリ、厚さ1.4cm	灰色	32－2
8	G－4	トレンチ埋戻し土	平瓦	凸面：縄叩き(細め・斜位)、縄目つぶれ気味、凹面：布目痕(粗い)、側面と小口面ヘラケズリ、厚さ2.4cm	灰色	32－3
9	G－9	トレンチ埋戻し土	平瓦	凸面：縄叩き(細め・斜位)、凹面：糸切痕、布目痕(粗い)、端部に凸型台圧痕、厚さ2.9cm	灰黄色	32－4
10	G－8	トレンチ埋戻し土	平瓦	凸面：叩き原体不明、布目痕、横位のヘラナデ、側面ヘラケズリ 凹面：糸切痕、布目痕、側面と小口面ヘラケズリ、厚さ2.1cm	灰黄色	32－5

第41図　南大門跡出土遺物(2)



No.	登録No.	遺構・層位	種別	遺存度	法量(cm)			特　徴	写真図版
					長さ	幅	厚さ		
1	Na－15	トレンチ埋戻し土	鉄製品・釘	完形	3.9	0.5	0.4	頭部幅1.1cm、4.7g	33－1
2	Na－14	トレンチ埋戻し土	鉄製品・釘	ほぼ完形	4.9	0.3	0.3	頭部幅0.8cm、3.7g、やや屈曲	33－2
3	Na－13	トレンチ埋戻し土	鉄製品・釘	完形	5.6	0.5	0.4	頭部幅0.9cm、4.5g	33－3
4	Na－6	Ⅰ層	鉄製品・釘	先端部欠損	6.4＋	0.6	0.4	頭部幅1.0cm、9.0g、やや屈曲	33－4
5	Na－8	Ⅰ層	鉄製品・釘	完形	6.3	0.4	0.4	頭部幅0.8cm、7.6g、先端部やや屈曲	33－5
6	Na－16	トレンチ埋戻し土	鉄製品・釘	先端部欠損	6.5＋	0.5	0.4	頭部幅1.4cm、11.8g＋	33－6
7	Na－9	Ⅰ層	鉄製品・釘	先端部欠損	5.2＋	0.6	0.5	頭部幅1.9cm、9.6g＋	33－7
8	Na－5	Ⅰ層	鉄製品・釘	完形	7.8	0.5	0.4	頭部幅1.2cm、7.8g、やや屈曲	33－8
9	Na－1	Ⅰ層	鉄製品・釘	ほぼ完形	12.5	0.7	0.6	頭部幅1.5cm、30.2g	33－9
10	Na－4	Ⅰ層	鉄製品・釘	頭部欠損	6.3＋	0.4	0.4	10.4g、屈曲	33－10
11	Na－2	Ⅰ層	鉄製品・釘	先端部欠損	11.6＋	0.7	0.7	頭部幅1.0cm、29.4g＋、屈曲	33－11
12	Na－12	トレンチ埋戻し土	鉄製品・釘	先端部欠損	6.3＋	0.5	0.5	頭部幅0.7cm、10.5g＋、屈曲	33－12
13	Na－7	Ⅰ層	鉄製品・釘	頭部欠損	4.9＋	0.4	0.4	7.3g＋、屈曲	33－13
14	Na－10	Ⅰ層	鉄製品・釘	頭部欠損	4.8＋	0.3	0.3	5.2g＋、屈曲	33－14
15	Na－3	Ⅰ層	鉄製品・釘	先端部欠損	8.0＋	0.4	0.5	頭部幅0.7cm、10.7g＋、屈曲	33－15
16	Na－11	Ⅰ層	鉄製品・鎹	端部欠損	15.2＋	0.6	0.6	47.8g＋、屈曲	33－16

第42図　仁王門跡出土遺物(1)

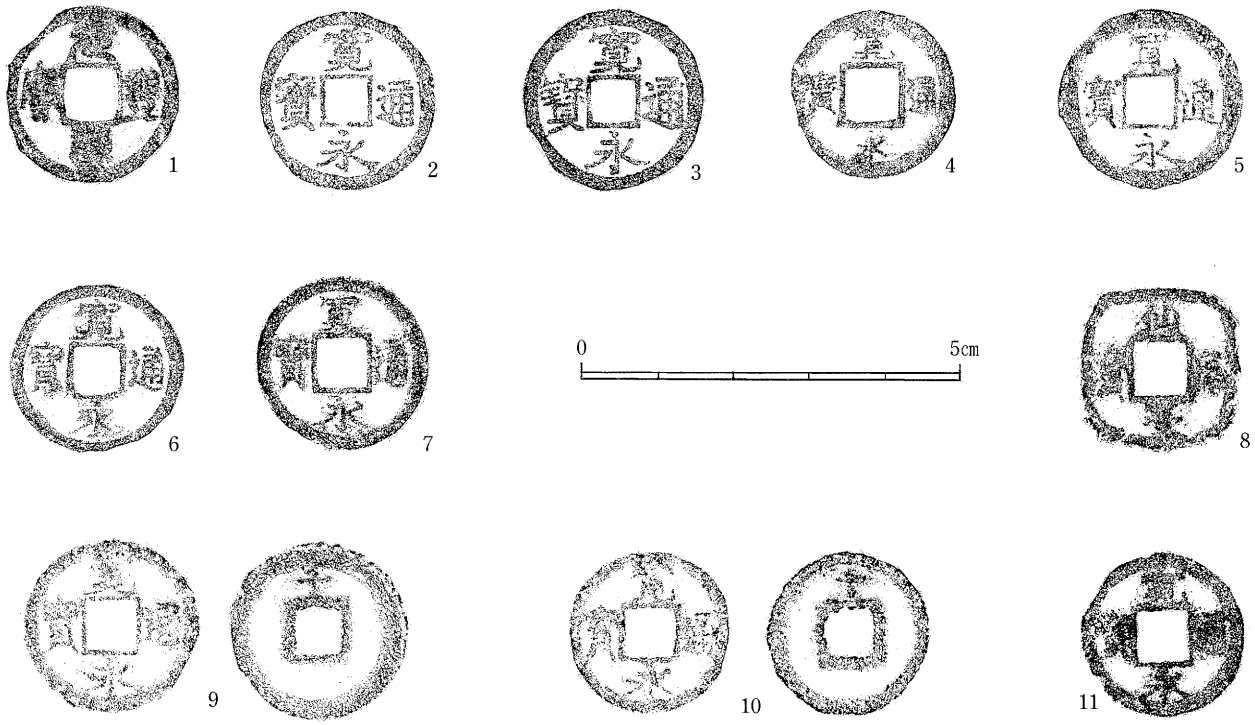
層位	土師器	須恵器	土師質土器	古代	近世	近世以降		金属製品		その他
				瓦	瓦	陶器	磁器	鉄釘等	銭貨	
トレンチ埋め戻し土	57	11	4	1364 (9.8kg)	61	33	65	9	17	硯２、土製品３ 鉄滓４
表採	1		1	51 (4.4kg)	2	5	21	22	5	土製品４

表８　陸奥国分寺跡調査遺物集計表

(註１)薬師堂は慶長12年の建築である。仁王門の建築時期についての記録はないが、門の方向が薬師堂と一致することから、薬師堂と同時期に建造されたとされる。

(註２)仁王門の床下に設定され、調査された。

(註３)第39図ａ～ｅ、(ａ)～(ｅ)層。なお、今回の調査で掘削したのはトレンチの埋め戻し土であるため、整地層の年代を出土遺物から判断することはできない。



No.	登録No.	遺構・層位	種別	遺存度	径(cm)	重量(g)	特　徴	
1	Nb－1	Ⅰ層	銅製品・銭貨	完形	2.4	2.3	元豊通寶、北宋銭(初鋳1078年)	33－17
2	Nb－3	トレンチ埋戻し土	銅製品・銭貨	完形	2.4	3.3	古寛永通寶	33－18
3	Nb－2	Ⅰ層	銅製品・銭貨	完形	2.4	2.9	古寛永通寶	33－19
4	Nb－7	Ⅰ層	銅製品・銭貨	完形	2.2	2.4	新寛永通寶	33－20
5	Nb－5	トレンチ埋戻し土	銅製品・銭貨	完形	2.4	3.1	新寛永通寶	33－21
6	Nb－4	トレンチ埋戻し土	銅製品・銭貨	完形	2.3	2.7	新寛永通寶	33－22
7	Nb－8	Ⅰ層	銅製品・銭貨	完形	2.3	2.1	新寛永通寶	33－23
8	Na－19	トレンチ埋戻し土	鉄製品・銭貨	完形	2.2	3.0	鉄銭、仙台通寶、(初鋳1784年)	33－24
9	Na－17	Ⅰ層	鉄製品・銭貨	完形	2.4	3.3	鉄銭、新寛永通寶(石巻、初鋳1838年)	33－25
10	Na－20	トレンチ埋戻し土	鉄製品・銭貨	完形	2.2	2.3	鉄銭、新寛永通寶(石巻、初鋳1838年)	33－26
11	Na－18	トレンチ埋戻し土	鉄製品・銭貨	完形	2.3	2.3	鉄銭、新寛永通寶	33－27

第43図　仁王門跡出土遺物(2)

(註４)トレンチが仁王門の礎石に接する箇所が限られているので断定はできないが、Ｎ２Ｅ１とＮ２Ｅ３は第39図でb層や(ｂ)としたややしまりのある整地層上に乗っているように見える。

(註５)各トレンチの最も深い箇所の深度は、Ａトレンチで75cm、Ｂトレンチで70cmである。

(註６)第39図、Ａトレンチ西壁断面図のｅ層。

(註７)第39図、Ｂトレンチ東壁断面図の(１)層の上部。仁王門礎石Ｎ１Ｅ３のやや南側の部分。

(註８)表８に示した銭貨は中世・近世のものであるが、このほかに富士１銭アルミ貨、１銭錫貨など昭和16～20年頃のものや、１円アルミ貨など現行通貨もある。

(註９)移築されたとすれば中世にまで遡る可能性はある。

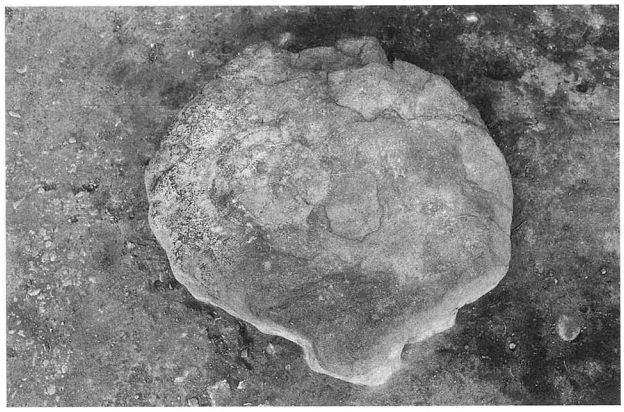
1．仁王門全景

2．仁王門礎石全景
（北から）

3．仁王門礎石全景
（南から）

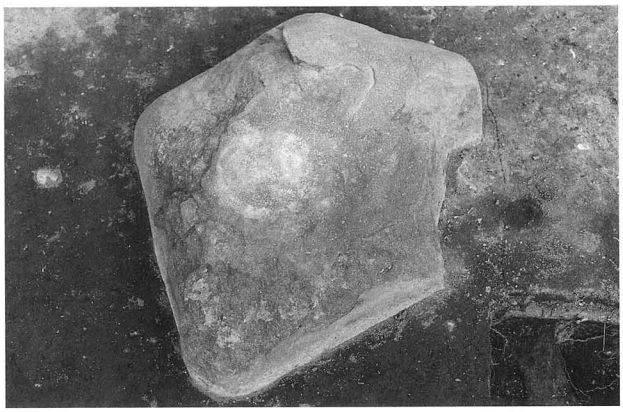
写真図版23　仁王門全景、礎石全景

1．N1E1（南から）

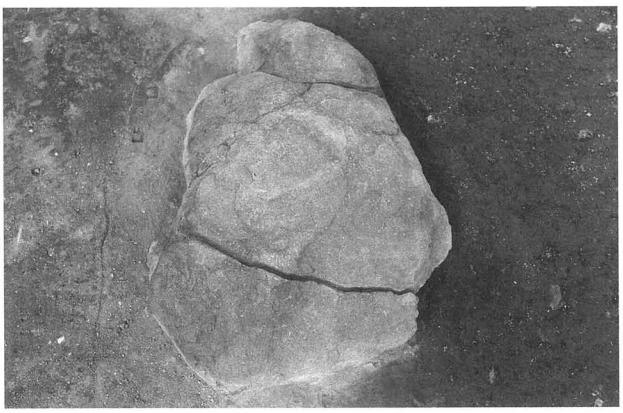


2．N1E2（南から）

3．N1E3（南から）



4．N1E4（南から）



5．N2E1（南から）

6．N2E2（南から）

7．N2E3（南から）

8．N2E4（南から）

写真図版24　仁王門礎石(1)

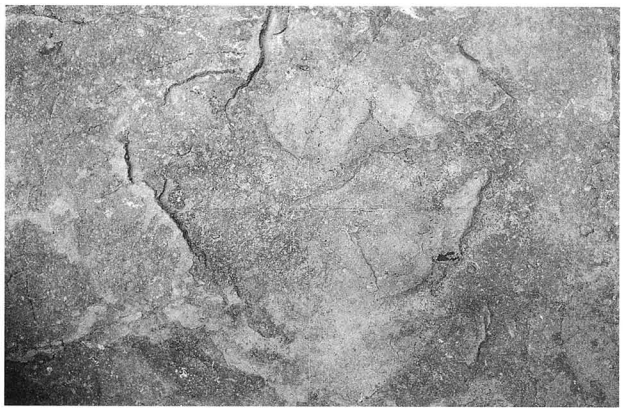
1．N3E1（南から）

2．N3E2（南から）

3．N3E3（南から）

4．N3E4（南から）

5．N2E1拡大、「十」刻み



6．N2E3拡大、「十」刻み

7．N3E3拡大、「十」刻み

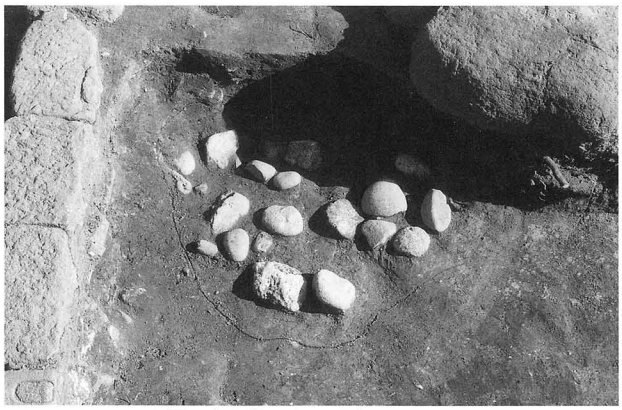
8．N3E4拡大、「十」刻み

写真図版25　仁王門礎石(2)

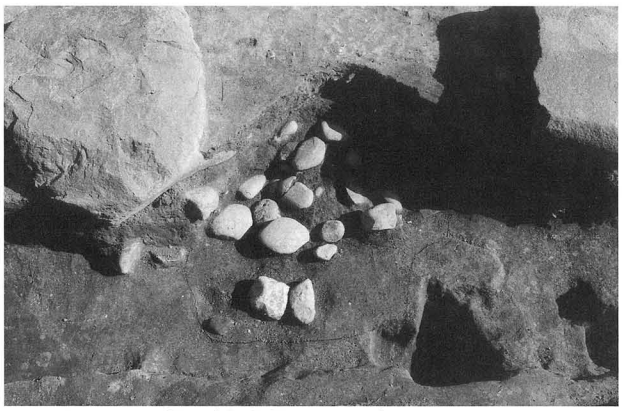
1．南大門跡調査区全景（北から）

2．Ａトレンチ根石（北部、西から）

3．Ａトレンチ根石（中央部、西から）

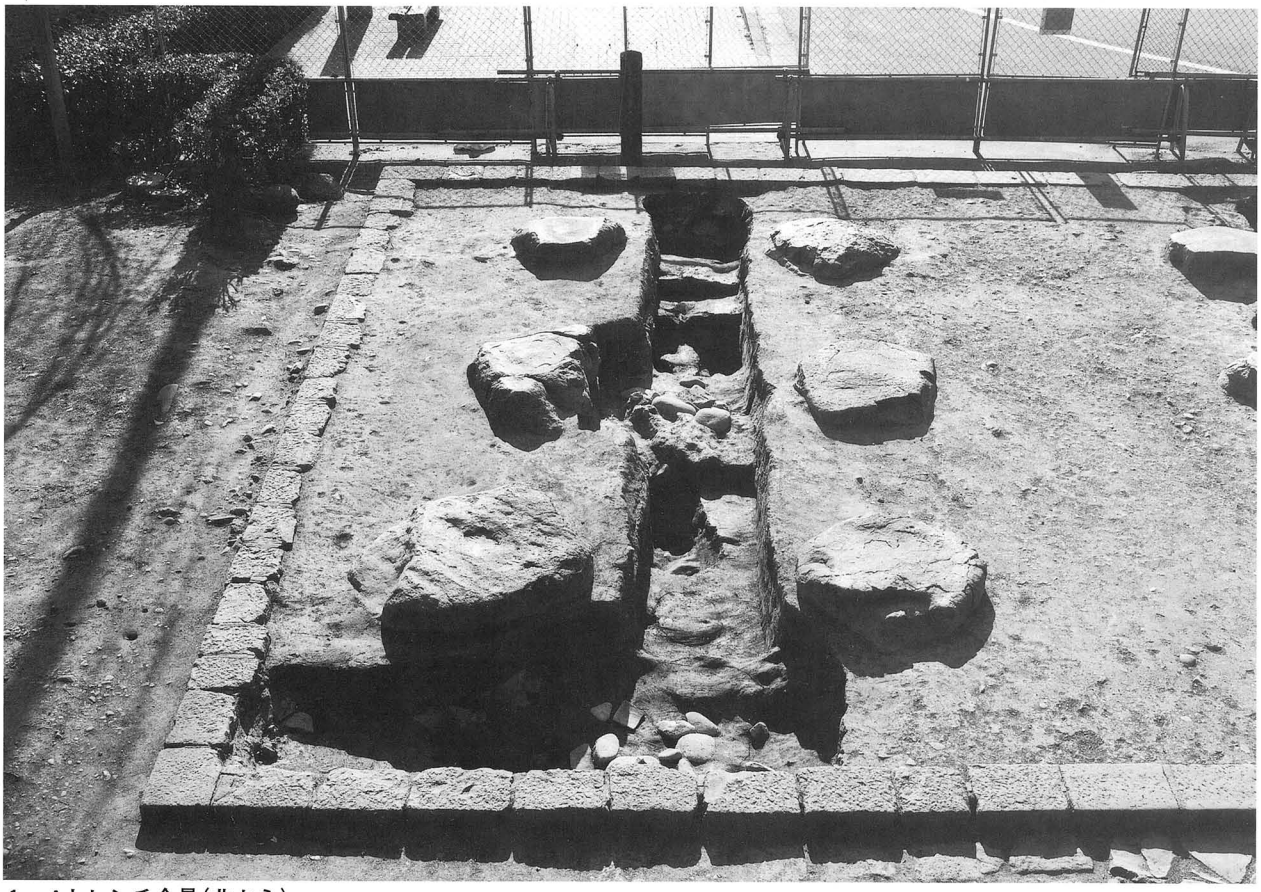


4．Ｂトレンチ根石（北部、西から）

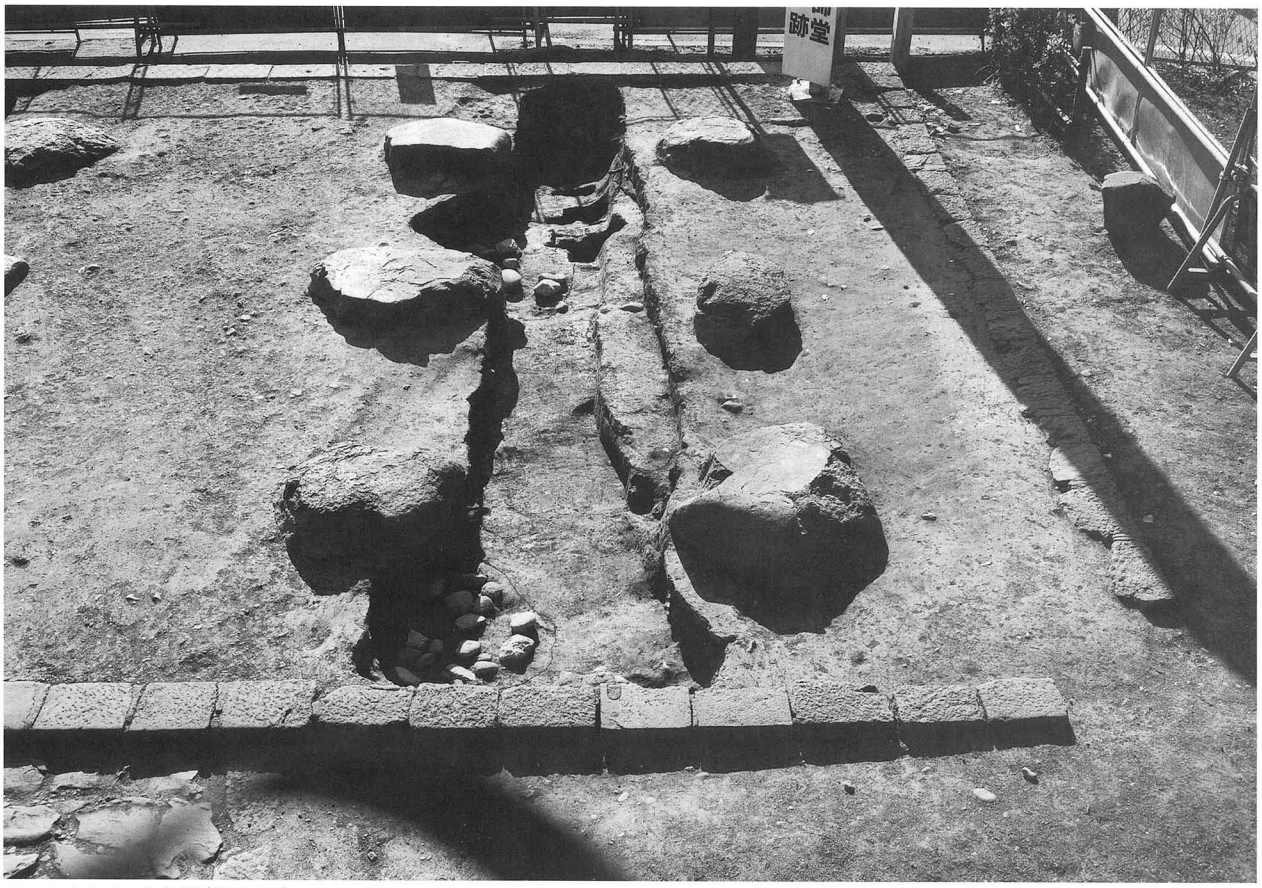


5．Ｂトレンチ根石（中央部、西から）

写真図版26　南大門跡調査区全景、根石

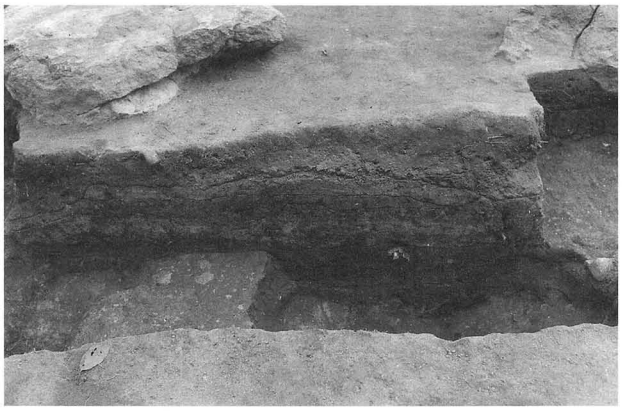


1．Aトレンチ全景（北から）

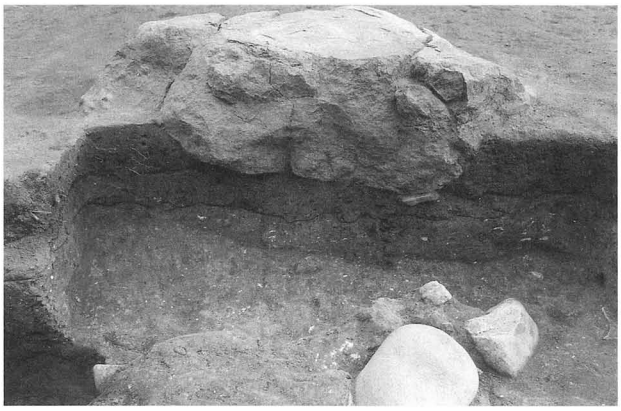


2．Bトレンチ全景（北から）

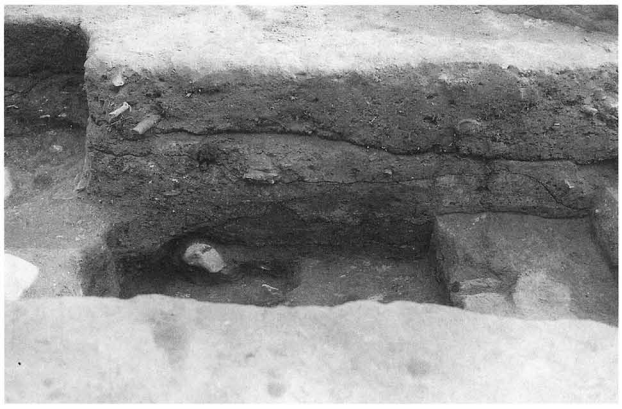
写真図版27　南大門跡調査区



1．Aトレンチ東壁断面(1)



2．Aトレンチ東壁断面(2)

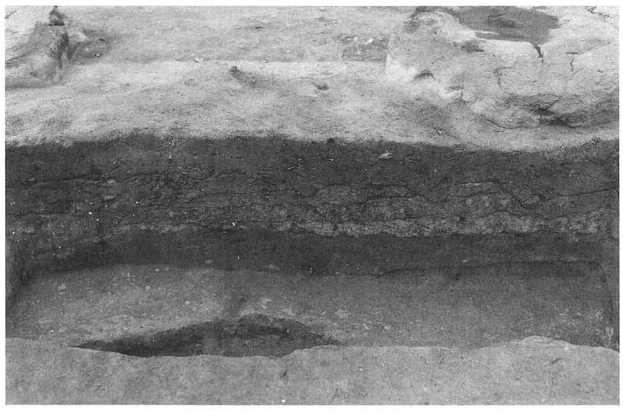


3．Aトレンチ東壁断面(3)

4．Aトレンチ東壁断面(4)

5．Aトレンチ西壁断面(1)

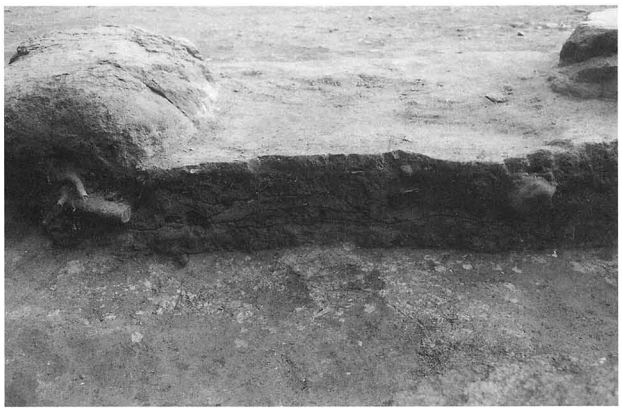
6．Aトレンチ西壁断面(2)



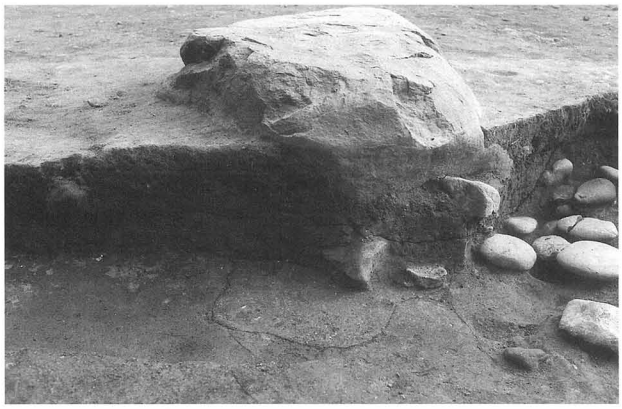
7．Aトレンチ西壁断面(3)

8．Aトレンチ西壁断面(4)

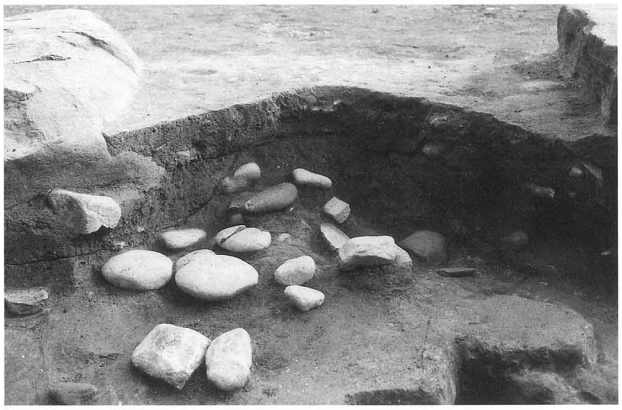
写真図版28　南大門跡調査区断面(1)



1．Bトレンチ東壁断面(1)



2．Bトレンチ東壁断面(2)



3．Bトレンチ東壁断面(3)

4．Bトレンチ東壁断面(4)

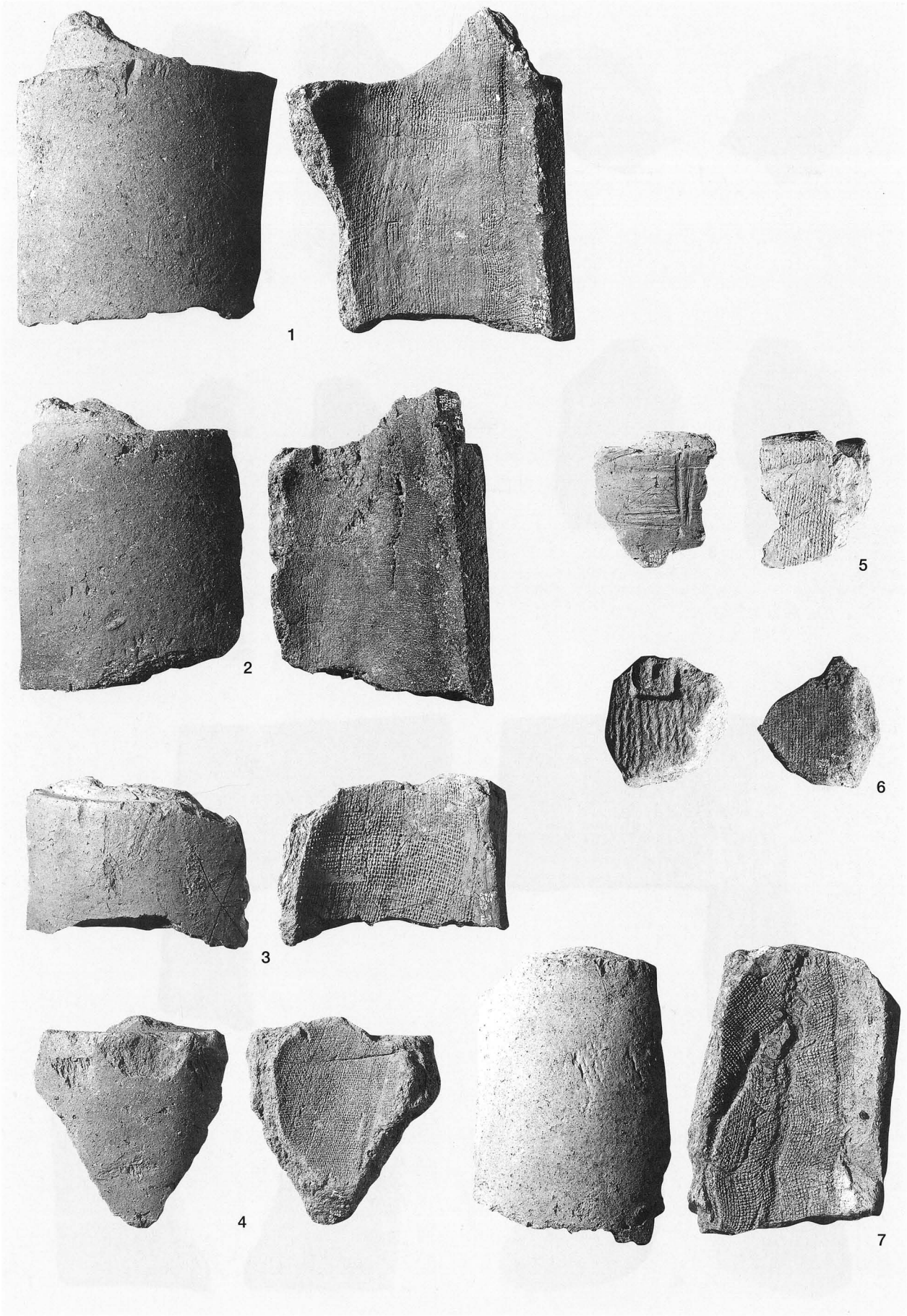
5．Bトレンチ西壁断面(1)

6．Bトレンチ西壁断面(2)

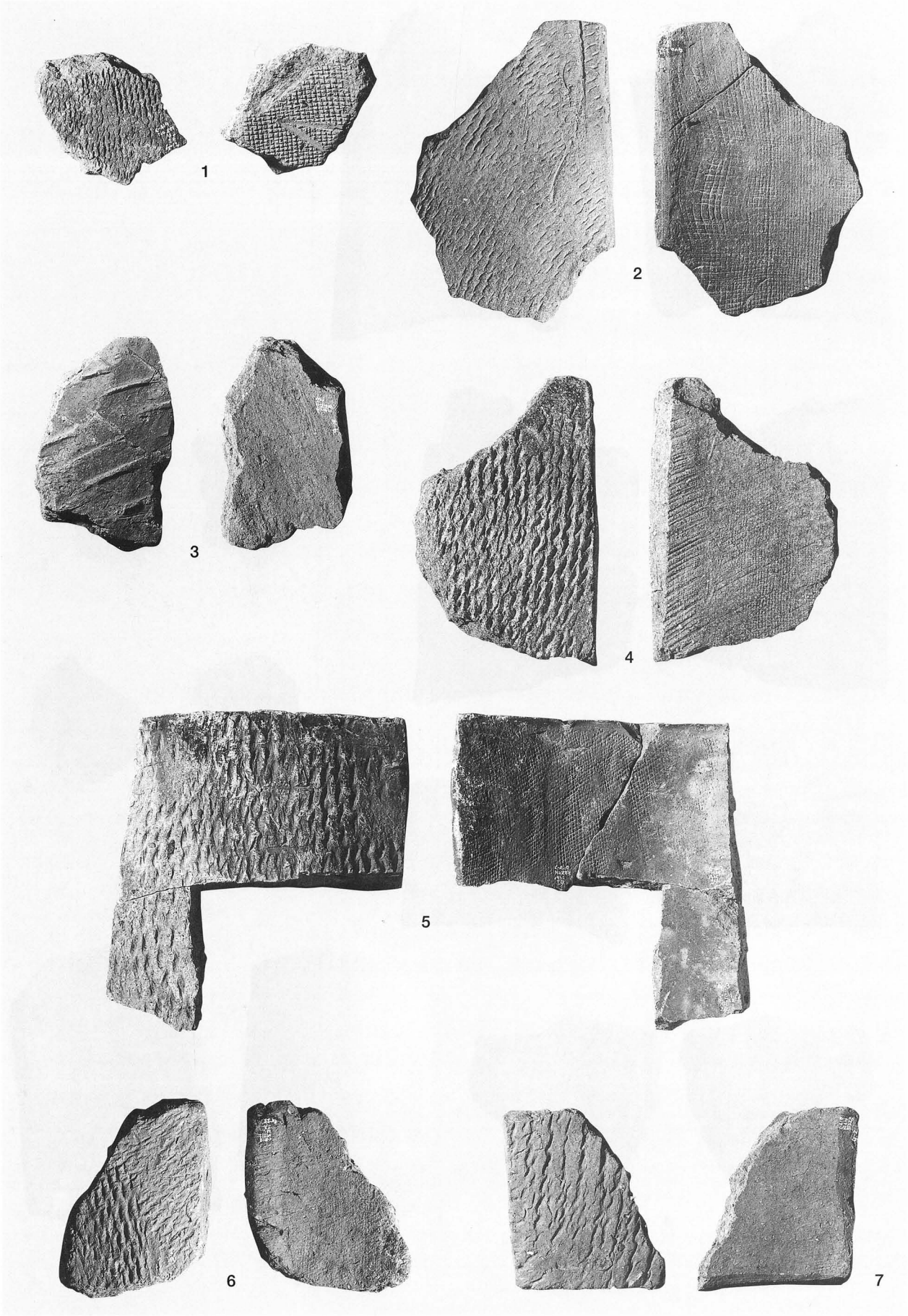
7．Bトレンチ西壁断面(3)

8．Bトレンチ西壁断面(4)

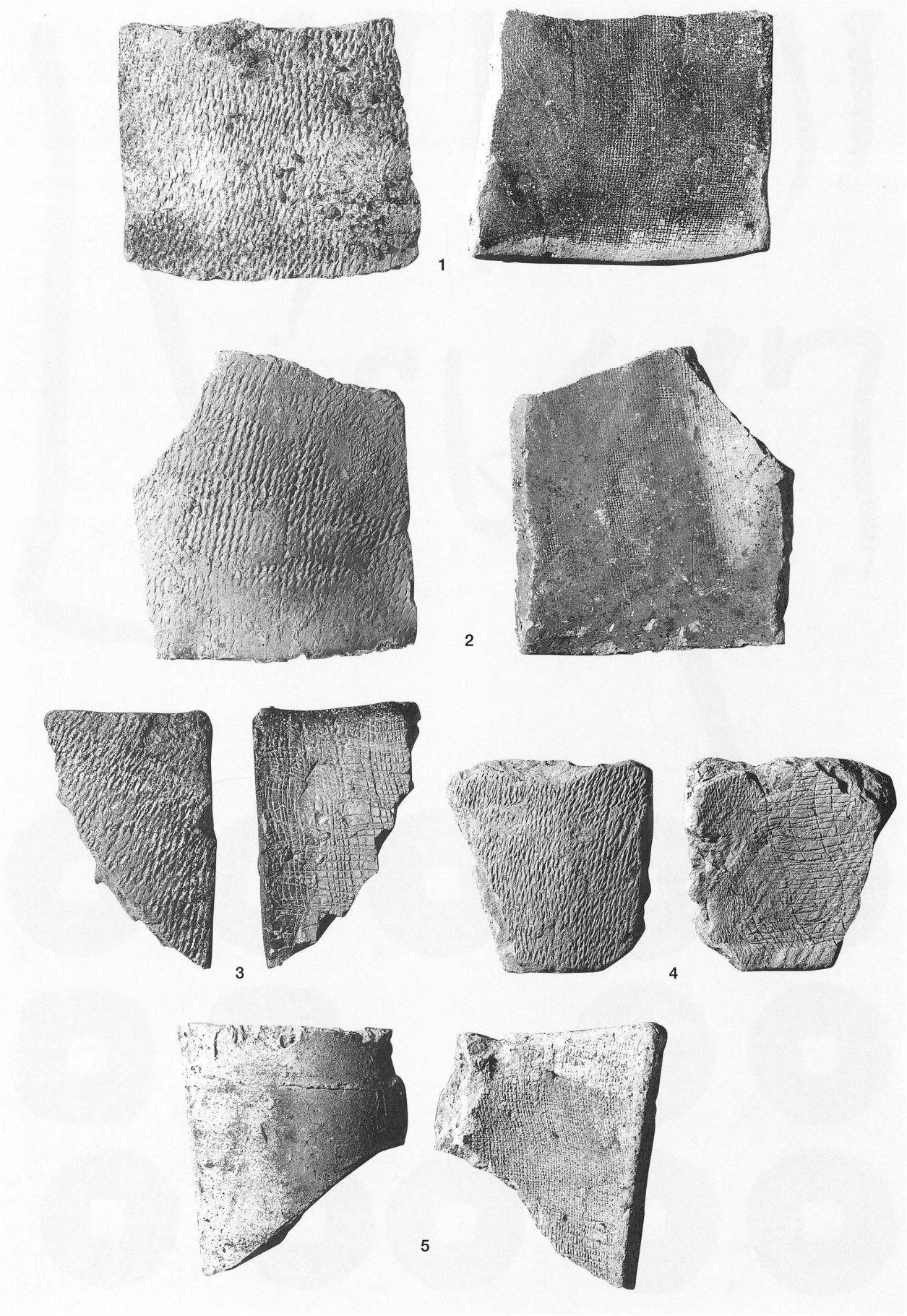
写真図版29　南大門跡調査区断面(2)



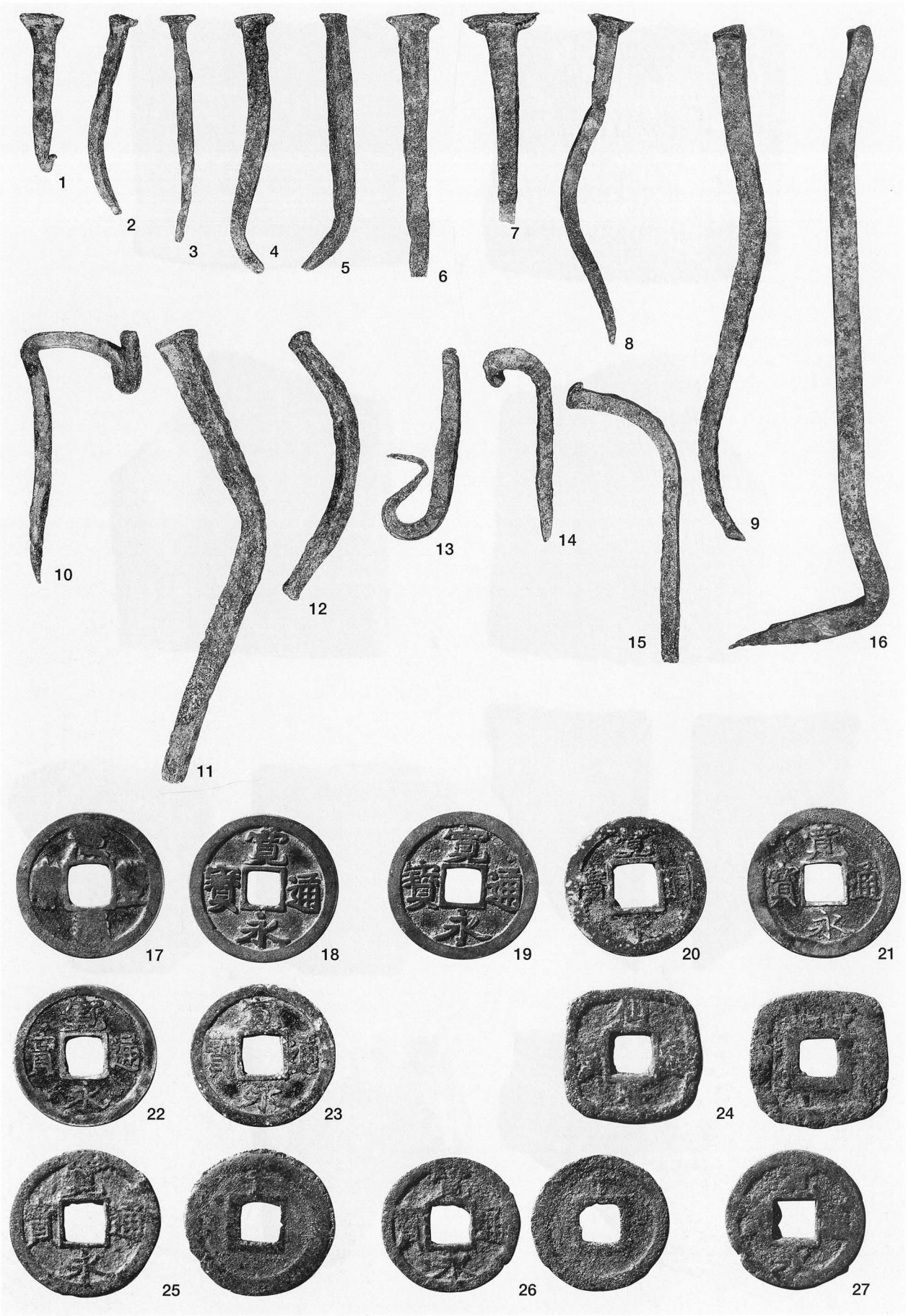
写真図版30　出土遺物(1)



写真図版31　出土遺物(2)



写真図版32　出土遺物(3)



写真図版33　出土遺物(4)

Ⅳ．南小泉遺跡

南小泉遺跡では、個人住宅建築に係る確認調査を２地点で実施した。各地点の調査状況は下記の通りである。

１　No１地点の調査：若林区遠見塚２丁目241－２・241－３地内

１）調査要項

調査期間　　平成18年２月13日

調査面積　　対象面積　136㎡　　実調査面積　21㎡

２）調査概要

建築予定部分に南北３ｍ×東西10ｍのトレンチを設定し、重機により盛土（約45cm）と旧水田耕作土層（約50cm）を排除したのち、遺構確認作業を実施した。確認作業の結果、トレンチ全面に河川跡内の堆積層と考えられる土層が分布し、この堆積層の上面で遺構は検出されなかった。河川跡堆積土層の上部には「十和田ａ火山灰」と観察されるテフラが溝状に堆積しおり、この河川跡は、10世紀前半頃にほぼ埋まったものと考えられる。

２　No.２地点の調査：若林区南小泉２丁目40－164の一部

１）調査要項

調査期間　　平成18年３月６日～７日

調査面積　　対象面積　90㎡　　実調査面積　14㎡

２）調査概要

建築予定部分に南北５ｍ×東西２ｍのトレンチを設定し、重機により盛土（約30cm）と旧耕作土層（約45cm）を排除したのち、黄褐色土層の上面で遺構確認作業を行った。検出遺構の平面プランの確認のためトレンチの南東部を一部拡張した。この結果土坑２基・溝跡２条・ピット５基が検出された。土坑の１基は楕円形を呈し、長軸100cm・短軸80cm・深さ30cmを測る。遺物は出土していない。他の遺構もその性格や時期決定できるものはない。

第44図　南小泉遺跡調査地点位置図（１／5000）

No.１地点の調査状況（東から）

No.２地点の調査状況（南から）

写真図版34　南小泉遺跡調査区

第４章　総括

Ⅰ．郡山遺跡

今年度は、第５次５ヵ年計画が終了した後の最初の年にあたり、補足調査の第１年目にあたる。今年度の「郡山遺跡内の国庫補助事業による調査」としては、方四町Ⅱ期官衙の東辺部において外溝を確認するため第166次調査を実施した。なお、個人住宅の建替えのうち基礎構造が深く、遺構を損なうようなものについては「仙台平野の遺跡群」として４件の小規模な調査を実施した。

１．Ⅱ期官衙

⑴　今年度の調査

方四町Ⅱ期官衙の外郭南東部で行われた第166次調査では、外溝の通過予想地点において概ね真北方向(註１)のＳＤ2120溝跡を検出した。これによって方四町Ⅱ期官衙の東辺においても南辺や西辺と同様に、外溝が巡っていることが確認された。上部を近世の河川跡に切られており、残存していた部分の上幅は2.0～2.3ｍ、底面幅1.6～1.7ｍ、深さ1.0ｍであったが、本来の深さはさらに深く、上幅も約3.5ｍ程度あったと推定される。第11次調査で確認されている方四町Ⅱ期官衙の外郭大溝SD73との間隔は心々で49.3ｍ、SD73の上部東端からSD2120の上部西端までは46.0ｍである。SD2120外溝跡の西側では官衙に関連する遺構は確認できなかった。大溝と外溝に挟まれた区域は、南辺と同じく遺構が希薄な空閑地となっている可能性がある。

なお、遺跡北西部では平成10年度より長町副都心土地区画整理事業関係の調査が行われているが、今年度の調査では方四町Ⅱ期官衙外溝の北西コーナーが発見され(註２)、外溝は官衙の周囲を全周することがほぼ確実となった。これによってⅡ期官衙は材木列と大溝によって区画され、さらにそれらの外側を外溝が囲んでいる構造であることが明らかとなった。

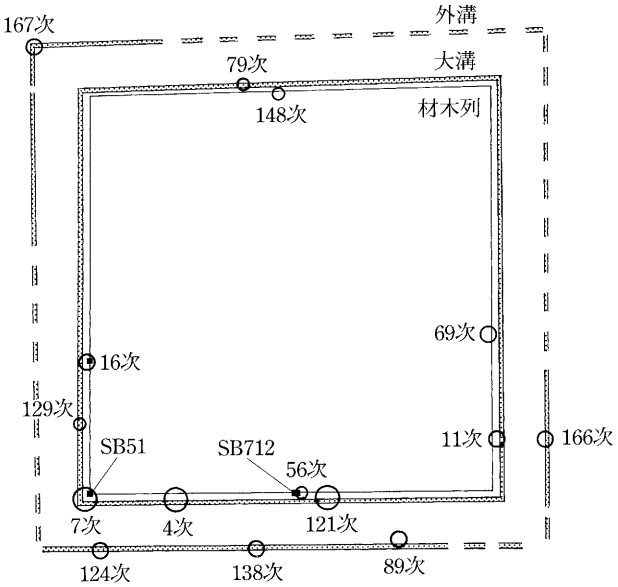
⑵　方四町Ⅱ期官衙外郭の構造について

これまで方四町Ⅱ期官衙の外郭材木列については、図上の計測によって南辺の長さを428.44ｍとし、方向は真北方向を基準としていると考えてきた(註３)。しかし、その後の調査例の増加と共に官衙の外郭に関するデータも蓄積され、さらに、Ⅱ期官衙は藤原宮をモデルにして設計されていることが考えられるようになってきている(註４)。そこで、ここでは外郭の方向について再検討を加え、藤原宮の構造を参考とすることによって、外郭の構造と規模について若干の考察を加えてみたい。

遺構の座標値は、これまでは遺跡内の任意の原点を通る磁北線を基準とする座標系(註５)で表してきたが、外郭の方向と構造を検討するに当たり、遺構の位置関係を把握しやすくするために国家座標(平面直角座標系Ｘ)を使用することとした。外郭に係わる主な遺構を対象として任意の座標値を平面直角座標系Ｘの座標値に換算し、座標上の位置関係を示したのが表９～11である(註６)。

表９の外郭南辺材木列のX座標値は、南西コーナーのSB51から東部の第121次調査区のSA33まで、西から東に行くにしたがって南にずれていく。このため北辺のSA616との距離(表では南北の座標差と表示)は東に行くにしたがって大きくなっている。同様の現象は、表10の外郭大溝SD35の南西コーナーから第121次調査区までと、表11の外溝SD1860～SD2000～SD984の間でも認められる。このことから、外郭材木列、大溝、外溝の南辺は真東西方向ではないことが分かる。外郭材木列南辺の傾きは、南西コーナーに位置するSB51建物跡のＳ２Ｗ２の柱とSB712南門の東端の柱の座標から算出すると、E－０°48′55″－Sである。西辺の材木列の方向は、SB51建物跡と北に140ｍ離れた第16次調査区のSA138材木列で計測するとN－１°46′９″－Eで、南辺に直交する角度N－０°48′55″と比べると約１°東への傾きが大きい。一方、東辺は地点によってばらつきが大きいため方向を算出することはで

きなかった。このように西辺と東辺の傾きについては不確定な要素が含まれることから、今回は一応南辺に直交するN－0°48′55″－Eに近い角度と考えておきたい。次に大溝と外溝であるが、大溝の傾きは第7次調査区SD35の北東岸と第121次調査区SD35の北岸の座標値から算出するとE－0°49′6″－S、外溝の傾きは第124次調査SD1860の北岸と第89次調査SD984北岸の座標値から算出するとE－0°45′17″－Sで、大溝・外溝共に材木列と概ね同じ傾きを示している。溝跡の場合は上部を削平されるなどの遺存状況の違いによって平面形が異なってくるため、材木列に比べて計測誤差が大きいと予想されるが、それでも上記のように極めて近い数値を示すことからすると大溝と外溝の南辺は材木列と全く同じ方向であると考えて問題ないであろう。また、西辺・北辺・東辺の方向もそれぞれの材木列の方向と一致している可能性が高い。



第45図　外郭の計測地点

位置	調査次数	遺構名 詳細位置	X座標	Y座標	南北の 座標差	東西の 座標差	対象遺構
北辺中央	148	SA616	−197308.13	5501.48			
南西コーナー	7	SB51(S2W2)	−197728.89	5284.83	420.76		SA616
南辺西部	4	SA33	−197729.79	5359.96	421.66		SA616
南門	56	SB712東端	−197732.07	5508.55	423.94		SA616
南辺東部	121	SA33	−197732.18	5551.56	424.05		SA616
西辺中央	16	SA138	−197590.33	5289.11		423.83	SA74
東辺中央	69	SA1026	−197566.86	5718.12		433.29	SB51
東辺南部	11	SA74	−197683.27	5712.94		428.11	SB51

表9　外郭材木列の座標値(m)

位置	調査次数	遺構名 詳細位置	X座標	Y座標	南北の 座標差	東西の 座標差	対象遺構
北辺中央	79	SD617南岸	−197303.12	5461.62			
南西コーナー	7	SD35コーナー 北東岸	−197735.49	5278.37	432.37		SD617
南辺西部	4	SD35北岸	−197737.43	5360.86	434.31		SD617
南辺東部	121	SD35北岸	−197739.26	5542.33	436.14		SD617
東辺南部	11	SD73西岸	−197684.49	5719.63		441.26	SD35 (7次)
西辺南部	129	SD1825東岸	−197658.78	5280.79		438.84	SD73
西辺中央	16	SD132東岸	−197591.14	5282.30		437.33	SD73

表10　外郭大溝の座標値(m)

位置	調査次数	遺構名 詳細位置	X座標	Y座標	南北の座標差	東西の座標差	対象遺構
北西コーナー	167	SD013コーナー 南東岸	−197249.50	5241.20			
南辺西部	124	SD1860北岸	−197783.80	5303.00	534.30		SD013
南辺中央	138	SD2000北岸	−197786.28	5467.33	536.78		SD013
南辺東部	89	SD984北岸	−197788.01	5622.61	538.51		SD013
東辺南部	166	SD2120西岸	−197686.63	5769.72		528.52	SD013

表11　外溝の座標値(m)

次に外郭の規模について考えてみたい。表９～11に示した各遺構の座標値と現時点で想定される外郭の真北からの傾き０°48′55″を使用し、三角関数を用いて材木列、大溝、外溝の間隔を算出したのが表12～14であり、まとめると以下のようになる。

外郭材木列　南北423.3～423.8ｍ、東西425.1～430.9ｍ

大溝の内側　南北434.9～435.7ｍ、東西438.6～440.5ｍ

外溝の内側　南北533.0～533.5ｍ、東西534.7ｍ

外郭材木列と大溝は南北長に対して東西長がやや長いが、その原因は今のところ不明である。外溝は東西南北がほぼ等しいようであるが、計測点が少ないため現段階では断定はできないであろう。

今泉隆雄氏はⅡ期官衙の外郭の大きさについて、これまで推定されている材木列の東西幅428.44mを1200大尺に換算し、その際の測地単位と想定される「歩」が、1200大尺÷６＝200歩と区切りの良い数値であることから、Ⅱ期官衙の造営時は１歩＝６大尺であったと推定している(註７)。この想定を基にして、材木列の外側にある大溝および外溝の位置関係について検討していくが、同時に前提となるのが藤原宮の地割り方法である。藤原宮の外郭施設の地割については井上和人氏の研究に詳しいが(註８)、藤原宮の外郭施設は、大垣と内濠、外濠などの地割が溝幅などを考慮した実質の距離で設定されている。

第46図は実際に確認された方四町Ⅱ期官衙の外郭材木列ー大溝ー外溝の幅と間隔を示した模式図で、外郭南東部の東西方向は第11次調査と第166次調査、外郭南部の南北方向は第121次調査と第138次調査結果によっている。なお、第121次調査区と第138次調査区は南北の軸線上の位置関係にはないため、距離は座標値を基に算出してある。また、断面形が逆台形の溝の上部が削平された場合、大溝の上端と材木列との間隔、大溝と外溝との間隔は広くなるため、本来は確認された間隔よりも若干狭かった可能性が高い。このことを考慮して外郭材木列から外溝までの地割を復元すると、外郭材木列と大溝の内側の上端までは6.5～７ｍ(20大尺)、大溝の幅が3.5m(10大尺)、大溝の外側の上端から外溝の内側の上端までは44.5～45ｍ(120大尺)、外溝の幅が3.5m(10大尺)となっていると推定され

位置	調査次数	遺構名・詳細位置	南北距離	東西距離	対象遺構
南西コーナー	7	SB51(Ｓ２Ｗ２)	423.80		SA616
南辺西部	4	SA33	423.63		SA616
南門	56	SB712東端	423.80		SA616
南辺東部	121	SA33	423.29		SA616
西辺中央	16	SA138		425.11	SA74
東辺中央	69	SA1026		430.94	SB51
東辺南部	11	SA74		427.42	SB51

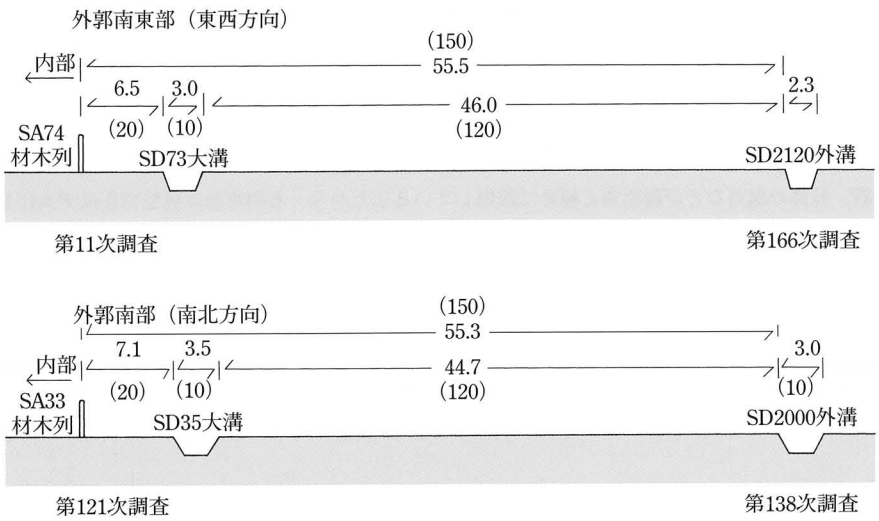
表12　外郭材木列の間隔(ｍ)

位置	調査次数	遺構名・詳細位置	南北距離	東西距離	対象遺構
南西コーナー	7	SD35コーナー　北東岸	434.93		SD617
南辺西部	4	SD35北岸	435.70		SD617
南辺東部	121	SD35北岸	434.95		SD617
東辺南部	11	SD73西岸		440.49	SD35(７次)
西辺南部	129	SD1825東岸		439.16	SD73
西辺中央	16	SD132東岸		438.61	SD73

表13　外郭大溝の間隔(ｍ)

位置	調査次数	遺構名・詳細位置	南北距離	東西距離	対象遺構
南辺西部	124	SD1860北岸	533.37		SD013
南辺中央	138	SD2000北岸	533.51		SD013
南辺東部	89	SD984北岸	533.03		SD013
東辺南部	166	SD2120西岸		534.69	SD013

表14　外溝の間隔(ｍ)



第46図　外郭材木列から外構までの構造模式図〔単位はｍ、(　)内は大尺〕

る(註９)。なお、今泉氏が想定しているⅡ期官衙の測地単位１歩＝６大尺をあてはめると、外郭材木列から外溝の内側までは150大尺＝25歩となり、想定されている外郭材木列の幅1200大尺(200歩)の両外側に外溝までの150大尺(25歩)を加えると、全体(外溝の内部)の大きさは1500大尺(250歩)となる。上記の南北間の距離533.0～533.5mと東西間の距離534.7mを1500大尺とすると、１大尺＝0.355～0.356ｍとなるので矛盾しない数値と考えられる。

以上のように、方四町Ⅱ期官衙の外郭については方向や規模など、部分的ではあるが基本的な構造が判明してきた。未調査部分が多い北辺部と東辺部における調査事例が増えれば、さらに解明が進むと考えられる。今後は官衙内部の建物配置や方向についても、外郭構造と関連した総合的な検討が可能となってくるであろう。

２．Ⅰ期官衙

個人住宅の建替えに伴う第171次調査区は、平成15年に実施された第152次調査区と一部重複しているが、Ⅰ期官衙東辺となる材木列SA2055の東側に平行してSD2125溝跡が新たに確認された。約300m南西に離れた第138次調査区でも材木列と溝跡が平行して確認されていることから、Ⅰ期官衙の東辺は材木列と溝によって区画されている可能性が出てきた(註10)。ただし、第138次調査区とは距離が離れていること、Ⅰ期官衙の材木列、溝跡は方向が一定しないものもあることなどから東辺の構造については不明な点が多い。今後、中間地点などの追加調査による解明が必要と考えられる。

Ⅱ．陸奥国分尼寺跡・陸奥国分寺南大門跡など

陸奥国分尼寺跡と陸奥国分寺南大門跡では、それぞれ本堂と仁王門の建て替え工事を利用した範囲確認調査を行い、南小泉遺跡では個人住宅建築に伴う調査を実施している。

陸奥国分尼寺跡第11次調査区は、推定される寺域の中軸線上に位置し、金堂跡や中門跡などの重要な遺構の発見が期待された。調査の結果、中～近世と考えられる建物跡は発見されたが、古代の陸奥国分尼寺跡に係わる遺構は発見できなかった。伽藍配置の解明は引き続き今後の課題となった。

陸奥国分寺南大門跡のトレンチの再精査では、掘り込み地業を伴う基壇の版築と礎石の据え方を確認したことで南大門の基礎構造について新たな知見を得ることができた。今後は、今回の調査区周辺においても掘り込み地業の範囲などを明確にすると共に、根石の位置を把握することによって礎石位置を確定し、門の規模や構造、扉に係わる唐敷居や蹴放しなどの痕跡、建て替えの有無、築地とのとりつきなどを解明していく必要性がある。

(註１)計測した数値はＮ－１°－Ｅであるが、検出長が5.5ｍと短いため若干の誤差を含んでいる可能性がある。

(註２)第167次調査・『第32回　古代城柵官衙遺跡検討会－資料集－』

(註３)『郡山遺跡Ⅱ』

(註４)今泉隆雄「古代国家と郡山遺跡」『郡山遺跡発掘調査報告書－総括編－』仙台市文化財調査報告書第283集　2005.3。今泉氏は、平面形と中枢部の位置、外郭の構造などが藤原宮と極めて類似していることから、Ⅱ期官衙は藤原宮をモデルにして設計されていると指摘している。

(註５)概ね1984年頃の磁針偏角に合わせてあり、平面直角座標系Ｘからは６°44′７″西に傾いている。

(註６)元になる各遺構の計測値は１／100～１／300平面図から起こしたので誤差を含んでいる。誤差の大小は一概には言えないが、１／300の図面では実長で最大10～20㎝程度になる可能性はある。表の数値は１㎝単位まで表示したが、厳密な有効桁を示すものではない。

(註７)註４と同じ。

(註８)井上和人「古代都城制地割再考」『古代都城制条里制の研究』2004

(註９)大溝および外溝の幅は3.5mより広い箇所もあるので、この規格が全体に及ぶかどうか断定はできない。

(註10)註２と同じ。

参考文献

井上和人「古代都城制地割再考」『古代都城制条里制の研究』　2004

古代城柵官衙遺跡検討会『第32回　古代城柵官衙遺跡検討会－資料集－』　2006．2

神野恵・川越俊一「平城京出土の陶硯」『古代の陶硯をめぐる諸問題－地方における文書行政をめぐって－』独立行政法人　文化財研究所　奈良文化財研究所

関根真隆「正倉院の仏具」『正倉院宝物にみる仏具・儀式具』　紫紅社　1993

仙台市教育委員会「郡山遺跡発掘調査概報」『年報１』仙台市文化財調査報告書第23集　1980．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅰ』仙台市文化財調査報告書第29集　1981．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第38集　1982．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡－第13次－』仙台市文化財調査報告書第42集　1982．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第46集　1983．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅳ』仙台市文化財調査報告書第64集　1984．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅴ』仙台市文化財調査報告書第74集　1985．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡』仙台市文化財パンフレット第10集　1985．10

仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅵ』仙台市文化財調査報告書第86集　1986．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅶ』仙台市文化財調査報告書第96集　1987．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅷ』仙台市文化財調査報告書第110集　1988．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅸ』仙台市文化財調査報告書第124集　1989．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡』仙台市文化財パンフレット第18集　1989．12

仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅹ』仙台市文化財調査報告書第133集　1990．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡－第84・85次－』仙台市文化財調査報告書第145集　1990．6

仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅺ』仙台市文化財調査報告書第146集　1991．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡－第65次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第156集　1992．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅻ』仙台市文化財調査報告書第161集　1992．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡ⅩⅢ』仙台市文化財調査報告書第169集　1993．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡ⅩⅣ』仙台市文化財調査報告書第178集　1994．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡ⅩⅤ』仙台市文化財調査報告書第194集　1995．3

仙台市教育委員会『郡山遺跡Ⅻ』仙台市文化財調査報告書第210集　1996．3
仙台市教育委員会『郡山遺跡ⅩⅢ』仙台市文化財調査報告書第215集　1997．3
仙台市教育委員会『郡山遺跡－第112次－』仙台市文化財調査報告書第222集　1997．3
仙台市教育委員会『発掘！郡山遺跡－郡山遺跡に埋もれた歴史を掘る－』仙台市文化財パンフレット第40集　1997
仙台市教育委員会『郡山遺跡ⅩⅣ』仙台市文化財調査報告書第227集　1998．3
仙台市教育委員会『郡山遺跡ⅩⅨ』仙台市文化財調査報告書第234集　1999．3
仙台市教育委員会『郡山遺跡ⅩⅩ』仙台市文化財調査報告書第244集　2000．3
仙台市教育委員会『郡山遺跡21』仙台市文化財調査報告書第250集　2001．3
仙台市教育委員会『郡山遺跡－第124次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第251集　2001．3
仙台市教育委員会『郡山遺跡22』仙台市文化財調査報告書第258集　2002．3
仙台市教育委員会『郡山遺跡23』仙台市文化財調査報告書第263集　2003．3
仙台市教育委員会『郡山遺跡24』仙台市文化財調査報告書第269集　2004．3
仙台市教育委員会『郡山遺跡』仙台市文化財パンフレット第54集　2004．10
仙台市教育委員会『郡山遺跡25』仙台市文化財調査報告書第284集　2005．3
仙台市教育委員会『郡山遺跡－第162次調査１区・164次調査－』仙台市文化財調査報告書第288集　2005．3
仙台市教育委員会『郡山遺跡発掘調査報告書―総括編―』仙台市文化財調査報告書第283集　2005．3

調査成果の普及と関連活動

１．広報・普及・協力活動

年	月	日	行事名称	担当職員	主　催
2005	4．	6	展示室見学	長島・平間	JR東日本ジパング倶楽部
	4．	13	展示室見学	長島・平間	JR東日本ジパング倶楽部
	6．	8	展示室見学	長島	東長町小学校２年生
	7．	12	第166次発掘調査報道発表	長島・平間	仙台市教育委員会
	11．	1	職場体験	長島・平間	郡山中学校１年生
	11．	8	展示室見学	長島	ディスカバーたいはく

２．調査指導委員会の開催

第34回　郡山遺跡調査指導委員会　平成18年３月７日　教育局北庁舎５階会議室

○平成17年度の調査成果について

○平成17年度の調査計画について

３．資料の貸し出し・展示

東北歴史博物館　企画展「古代の旅」

富沢遺跡保存館　企画展「グルメの考古学」

原町市博物館　企画展「発掘された古代の行方と新市の誕生

横浜市歴史博物館　企画展「諸岡五十戸」

４．展示室の利用者

平成17年４月～平成18年３月　229名

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき
書名	郡山遺跡 26
副書名	郡山遺跡・仙台平野の遺跡群　平成17年度発掘調査概報
巻次	26
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第296集
編著者名	平間亮輔、今野秀治、工藤哲司
編集機関	仙台市教育委員会(文化財課)
所在地	〒980－8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目７－１　TEL022－214－8893～8894
発行年月日	2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
こおりやまいせき 郡山遺跡 など	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくこおりやま 太白区郡山三丁目 他	04100	01003	38° 12′ 58″	140° 53′ 41″	20050510 ～ 20060307	757㎡	重要遺跡の範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡山遺跡 陸奥国分尼寺跡 陸奥国分寺跡 南小泉遺跡	官衙跡 寺院跡 集落跡	飛鳥～ 平安	掘立柱建物跡 竪穴住居跡 溝跡・土坑	土師器・須恵器・瓦・ 木製品・金属製品	方四町Ⅱ期官衙外郭東辺で外溝を発見した

仙台市文化財調査報告書第296集

郡　山　遺　跡　26

— 郡山遺跡・仙台平野の遺跡群 —
平成17年度発掘調査概報

2006年3月

発　行　仙　台　市　教　育　委　員　会
仙台市青葉区国分町三丁目7－1
文化財課　022(214)8893

印　刷　株式会社　日進堂印刷所　仙台営業所
仙台市青葉区樋町1－8－28
022(225)4713